

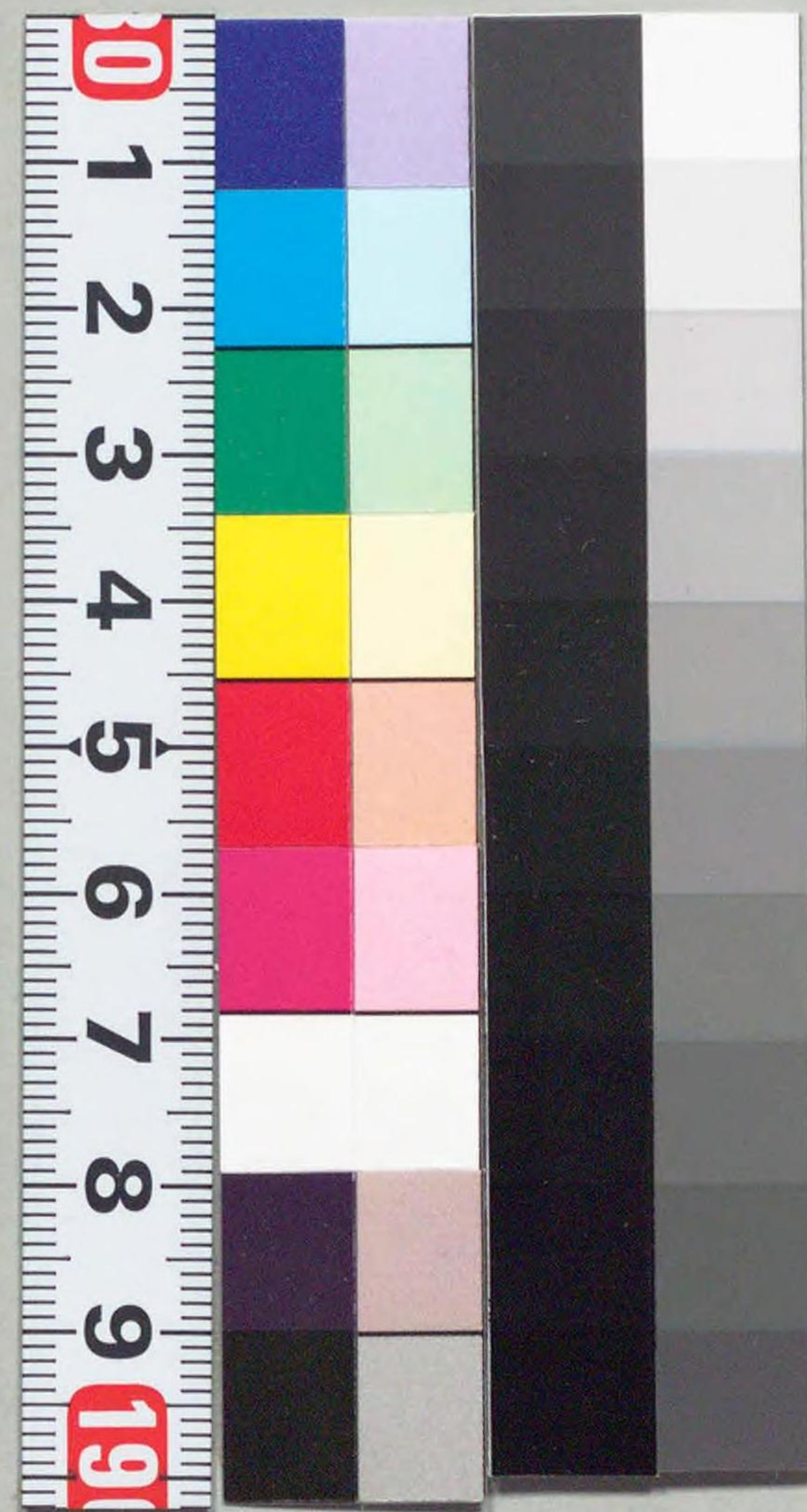
鑑賞 小倉百人

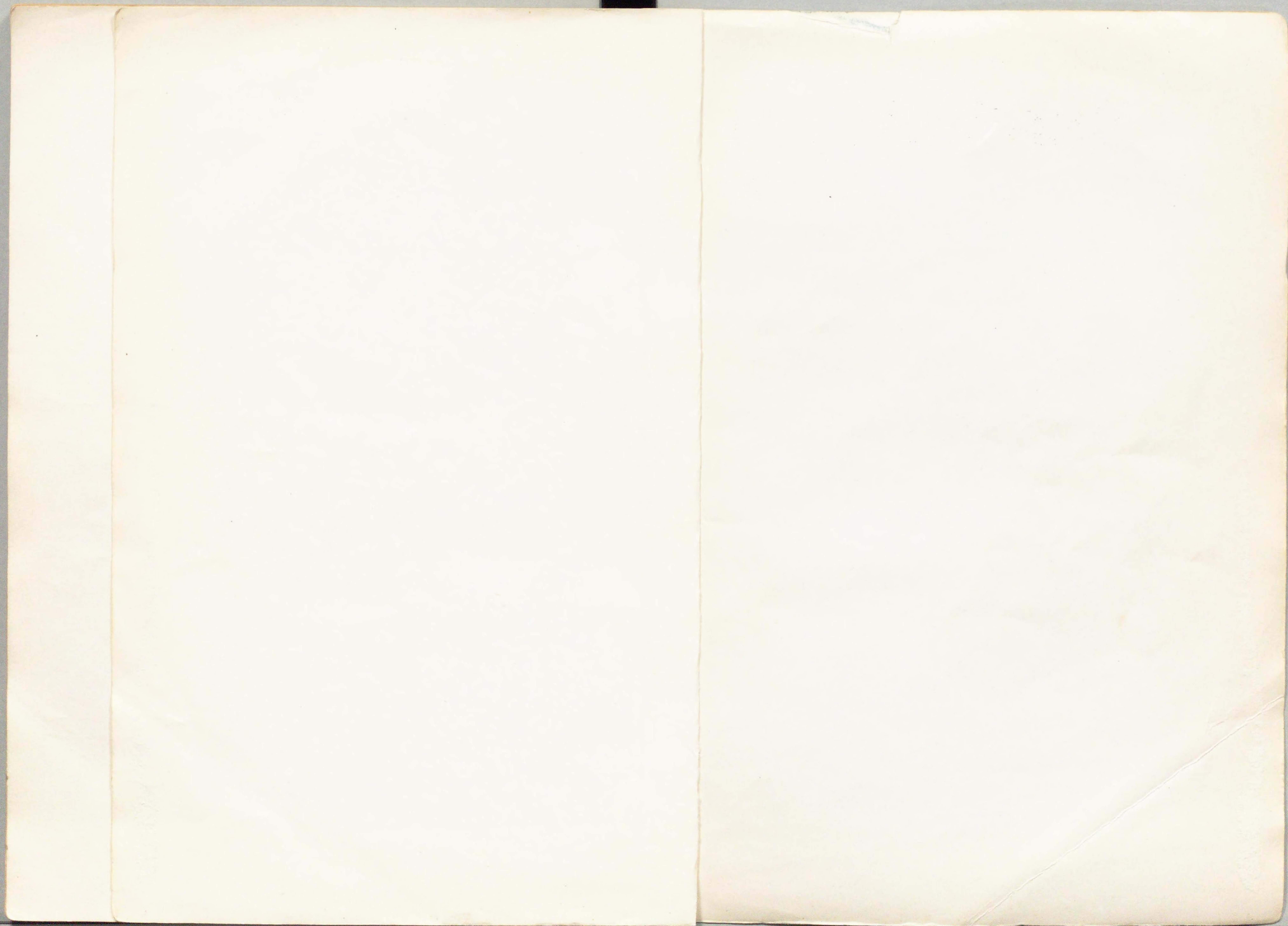
文学博士 新村

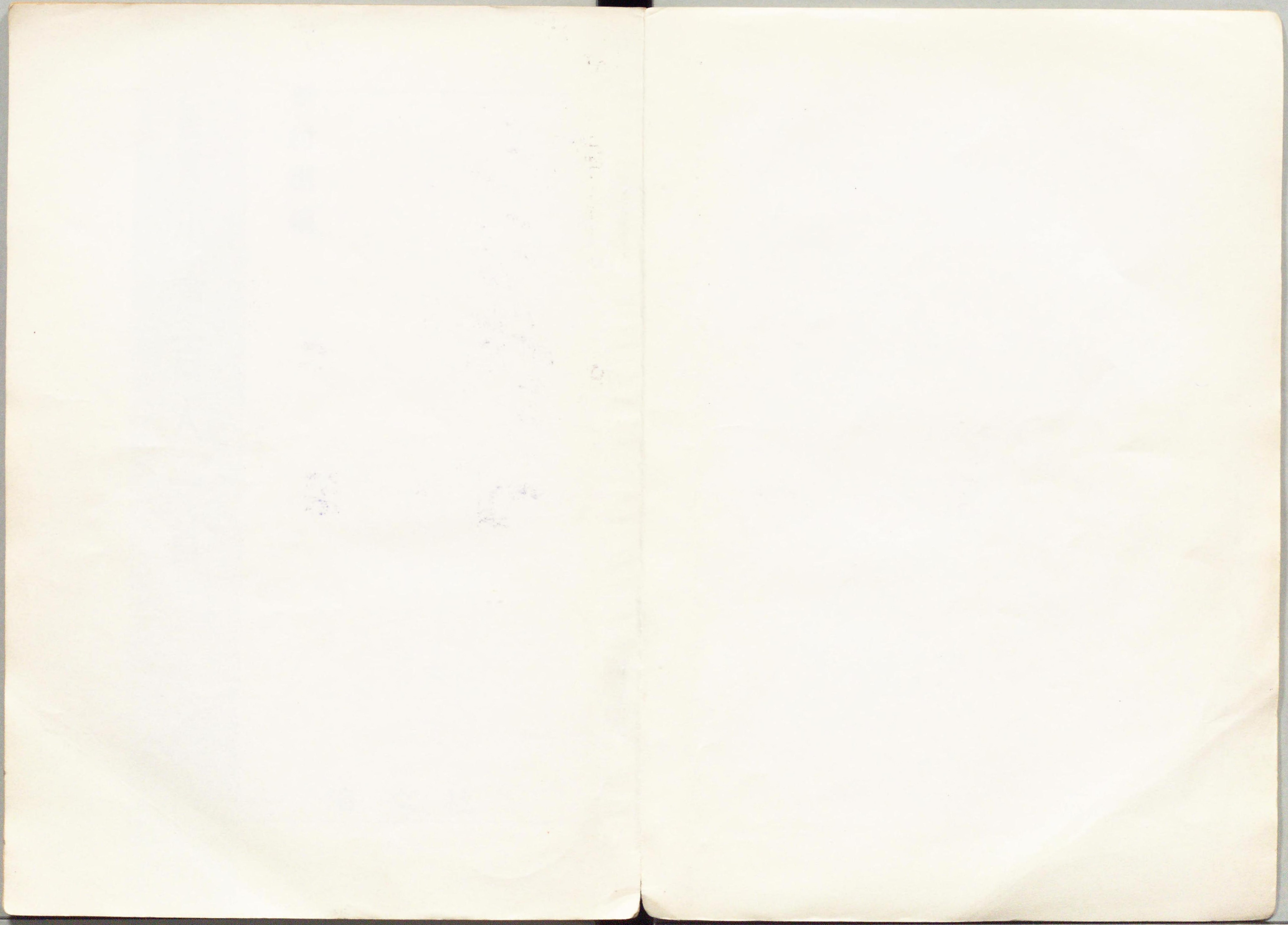
911.147
Si473o



洛文社







新村出編

鑑賞小倉百人一首

洛文社

911.147
Si4730



658945

はしがき

「小倉百人一首」が歌ガルタとして古来広く国民の間に親しまれて来たことは、それが単に娯楽のもてあそびものであったと同時に、この本が和歌の精髓として重んぜられていたことを物語るものであろう。

本書はこれを平易簡明に解説するとともに、特に鑑賞の方面に力を注いで執筆したものである。歌の意義を通して、一首一首のもつ味わいを十分に酌みとってほしいものと思う。

原歌は歴史的仮名づかい、ふり仮名と解説は現代仮名づかいによった。

鑑賞小倉百人一首

目 次

(番号は歌番号)
(内は下句)

はしがき	三	
解説	三	
口 絵	七	
一 あきのたの	天智天皇	一六
二 はるすぎて	持統天皇	一九
三 あしびきの	柿本人麿	二〇
四 たごのうらに	山部赤人	二二
五 おくやまに	猿丸大夫	二三
六 かささぎの	中納言家持	二三
七 あまのはら	安倍仲磨	二四
八 わがいほは	喜撰法師	二五

△表紙写真▽

小倉山は嵯峨野の西はずれ、大堰川に沿って東南から北西へと伸びる姿やさしい山である。藤原定家が晩年山荘を構えて隠棲したといわれるのがこのあたりである。

小倉山の南東に面した一辺はちょうど渡月橋から釈迦堂へと通じる道と平行しており、これらの中間には天竜寺をはじめ小倉山常寂光寺、二尊院、落柿舎などの名所の数々が点在する。手前を流れる大堰川は上流の保津川からこのあたりで大堰川となり、更に桂川となって淀川にそそぐ。

写真は渡月橋西畔から大堰川をへだてて小倉山を望んだもの。

夕月夜小倉の山に啼く鹿の内にや秋は来るらむ
貫之(古今巻五)

九	はなのいろは	(わが身世にふるながめせしまに)	小野小町	三
一〇	これやこの	(しるもしらぬもあふ坂の関)	丸	三
一一	わたのはら	(人にはつげよ蟹のつり舟)	参議	三
一二	あまつかぜ	(をとめの姿しぼしとどめむ)	昭	元
一三	つくばねの	(恋ぞつもりて淵となりぬる)	院	三
一四	みちのくの	(乱れそめにし我ならなくに)	大臣	三
一五	きみがため	(わが衣手に雪は降りつつ)	皇	三
一六	たちわかれ	(まつとしきかば今帰り来む)	中納言行平	三
一七	ちはやぶる	(からくれなるに水くくるとは)	在原業平朝臣	三
一八	すみのえの	(夢の通ひ路人めよくらむ)	藤原敏行朝臣	三
一九	なにはがた	(あはでこの世を過してよとや)	伊勢	三
二〇	わびぬれば	(みをつくしても逢はむとぞ思ふ)	元良親王	三
二一	いまこむと	(有明の月を待ち出でつるかな)	素性法師	三
二二	ふくからに	(むべ山風をあらしといふらむ)	文屋康秀	元
二三	つきみれば	(わが身一つの秋にはあらねど)	大江千里	元
二四	このたびは	(紅葉の錦神のまにまに)	菅家	元

二五	なにしおはば	(人にしられでくるよしもがな)	三条右大臣	三
二六	をぐらやま	(いまひとたびのみゆき待たなむ)	貞信公	三
二七	みかのはら	(いつみきとてか恋しかるらむ)	中納言兼輔	三
二八	やまざとは	(人目も草もかれぬと思へば)	源宗于朝臣	三
二九	こころあてに	(おきまどはせる白菊の花)	凡河内躬恒	三
三〇	ありあけの	(暁ばかりうきものはなし)	壬生忠岑	三
三一	あさぼらけ	(吉野の里にふれる白雪)	坂上是則	三
三二	やまがはに	(流れもあへぬ紅葉なりけり)	春道列樹	三
三三	ひさかたの	(静心なく花のちるらむ)	紀友則	三
三四	たれをかも	(松も昔の友ならなくに)	藤原興風	三
三五	ひとはいさ	(花ぞ昔の香にほひける)	紀貫之	三
三六	なつのよは	(雲のいづこに月やどるらむ)	清原深養父	三
三七	しらつゆに	(つらぬきとめぬ玉ぞ散りける)	文屋朝康	三
三八	わすらるる	(人の命の惜しくもあるかな)	右近	三
三九	あさぢふの	(あまりてなどか人の恋しき)	参議	三
四〇	しのぶれど	(物や思ふと人のとふまで)	平兼盛	三

四	こひすてふ	(人しれずこそ思ひそめしか)	壬生忠見	四
三	ちぎりきな	(末の松山波こさじとは)	清原元輔	三
三	あひみでの	(昔は物を思はざりけり)	中納言敦忠	三
四	あふことの	(人をも身をも恨みざらまし)	中納言朝忠	三
三	あはれとも	(身のいたづらになりぬべきかな)	謙徳公	三
四	ゆらのとを	(行くへもしらぬ恋のみちかな)	曾禰好忠	三
三	やへむぐら	(人こそ見えぬ秋は来にけり)	惠慶法師	三
四	かぜをいたみ	(碎けて物を思ふ頃かな)	源重之	三
三	みかきもり	(昼は消えつつ物こそ思へ)	大中臣能宣	三
三	きみがため	(長くもがなと思ひけるかな)	藤原義孝	三
三	かくとだに	(さしも知らじな燃ゆる思ひを)	藤原実方朝臣	三
三	あけぬれば	(なほ恨めしき朝ぼらけかな)	藤原道信朝臣	三
三	なげきつつ	(いかに久しきものとかは知る)	右大将道綱母	三
三	わすれじの	(今日を限りの命ともがな)	儀同三司母	三
三	たきのおとは	(名こそ流れてなほ聞えけれ)	大納言公任	三
三	あらざらむ	(今ひと度の逢ふこともがな)	和泉式部	三

三	めぐりあひて	(雲がくれにし夜半の月かな)	紫式部	三
三	ありまやま	(いでそよ人を忘れやはする)	大弐三位	三
三	やすらはで	(傾くまでの月を見しかな)	赤染衛門	三
三	おほえやま	(まだふみも見ず天の橋立)	小式部内侍	三
三	いにしへの	(今日九重にほひぬるかな)	伊勢大輔	三
三	よをこめて	(世に逢坂の関はゆるさじ)	清少納言	三
三	いまはただ	(人づてならでいふよしもがな)	左京太夫道雅	三
三	あさぼらけ	(あらはれ渡る瀬々の網代木)	権中納言定頼	三
三	うらみわび	(恋に朽ちなむ名こそ惜しけれ)	相模	三
三	もろとも	(花よりほかに知る人もなし)	前大僧正行尊	三
三	はるのよの	(かひなく立たむ名こそ惜しけれ)	周防内侍	三
三	ころにも	(恋しかるべき夜半の月かな)	三条院	三
三	あらしふく	(竜田の川の錦なりけり)	能因法師	三
三	さびしさに	(いづこも同じ秋の夕暮)	良暹法師	三
三	ゆふされば	(芦のまる屋に秋風ぞ吹く)	大納言経信	三
三	おとにきく	(かけじや袖の濡れもこそすれ)	祐子内親王家紀伊	三

三	たかさごの	(外山の霞立たずもあらなむ)	権中納言匡房……………	一〇
四	うかりける	(はげしかれとは祈らぬものを)	源俊頼朝臣……………	一九
五	ちぎりおきし	(あはれ今年の秋もいぬめり)	藤原基俊……………	一九
六	わたのはら	(雲るにまがふ沖つ白波)	法性寺入道前関白太政大臣…	二〇
七	せをはやみ	(われても末にあはむとぞ思ふ)	崇徳院……………	二〇
八	あはぢしま	(幾夜寝覚めぬ須磨の関守)	源兼昌……………	二〇
九	あきかぜに	(もれ出づる月の影のさやけさ)	左京大夫顕輔……………	二〇
一〇	ながからむ	(乱れて今朝は物をこそ思へ)	待賢門院堀河……………	二〇
一一	ほととぎす	(ただ有明の月ぞ残れる)	後徳大寺左大臣……………	二〇
一二	おもひわび	(憂きに堪へぬは涙なりけり)	道因法師……………	二〇
一三	よのなかよ	(山の奥にも鹿ぞ鳴くなる)	皇太后宮大夫俊成……………	二〇
一四	ながらへば	(憂しと見し世ぞ今は恋しき)	藤原清輔……………	二〇
一五	よもすがら	(閨のひまさへつれなかりけり)	俊恵法師……………	二〇
一六	なげけとて	(かこち顔なるわが涙かな)	西行法師……………	二〇
一七	むらさめの	(霧たちのぼる秋の夕暮)	寂蓮法師……………	二〇
一八	なにはえの	(みをつくしてや恋ひわたるべき)	皇嘉門院別当……………	二〇

九	たまのをよ	(忍ぶることの弱りもぞする)	式子内親王……………	二〇
一〇	みせばやな	(ぬれにぞぬれし色はかはらず)	殷富門院大輔……………	二〇
一一	きりぎりす	(衣かたしきひとりかもねむ)	後京極摂政前太政大臣……………	二〇
一二	わがそでは	(人こそ知らね乾く間もなし)	二条院讃岐……………	二〇
一三	よのなかは	(蟹の小舟の綱手かなしも)	鎌倉右大臣……………	二〇
一四	みよしのの	(ふるさと寒く衣うつなり)	参議雅経……………	二〇
一五	おほけなく	(我がたつ袖に墨染の袖)	前大僧正慈円……………	二〇
一六	はなさそふ	(ふり行くものはわが身なりけり)	入道前太政大臣……………	二〇
一七	こぬひとを	(焼くや藻塩の身もこがれつつ)	権中納言定家……………	二〇
一八	かぜそよぐ	(みそぎぞ夏のしるしなりける)	従二位家隆……………	二〇
一九	ひとをし	(世を思ふゆゑに物思ふ身は)	後鳥羽院……………	二〇
二〇	ももしきや	(なほあまりある昔なりけり)	順徳院……………	二〇
付1	上句索引(五十音順)			二〇
付2	下句索引(")			二〇
付3	作者索引(")			二〇

小倉百人一首解説

名 称

「百人一首」というのは、百人の歌人の秀歌を一首ずつ選んで百首としたものをいい、例
 えば「後撰百人一首」とか「武家百人一首」とか「女房百人一首」とか、その類のものは
 おびただしく作られているが、中で「小倉百人一首」はそのもっとも古いものであって、単に「百人
 一首」としてもいえばこの「小倉百人一首」をさすほどそれらの代表的なものとされているのである。
 そうして、これは古く「小椋山荘色紙和歌」「小倉山荘色紙和歌」または「嵯峨山荘色紙和歌」な
 どといわれていたのであるが、このことはこの百人一首の撰者と伝えられて来た藤原定家の山荘が京
 都の嵯峨小倉付近にあったのによるのである。小倉山荘に定家が住んでいたことは、その日記「明月
 記」や「露霜の小倉の山に家居して干さでも袖の朽ちぬべきかな」という彼の歌などによって、これ
 を証することができる。

成 立

さて、「小倉百人一首」がいつ誰によって選定されたものかについては、古くから諸説
 があるが、まとめてみれば、およそ次のごとくになる。

一、藤原定家自撰説　これは中世以来長い間信ぜられて来た説で、藤原定家が新古今集撰定に不
 満をもち、別にこの百人一首を選んで、その山荘に書き置いたというのである。この説は後に種
 々疑われるところがあったが、最近、定家撰になる「二四代集」（八代集から千七百九十一首は
 どの歌を抜き出した秀歌集）と百人一首との関係を調査することによって、百首の中九十二首ま
 だが「二四代集」と一致しているので、定家自撰ということがふたたび考えられるようになった。
 二、宇都宮頼綱（入道蓮生）撰歌、定家浄書説　元禄十五年に安藤為章（二六五―二七六）という学
 者が定家の日記「明月記」の嘉禎元年五月二十七日の条に「予本ヨリ文字ヲ書ク事ヲ知ラズ、嵯
 峨ノ中院ノ障子ノ色紙形、故子ニ書クベキ由、カノ入道懇切ナリ、極メテ見苦シキ事ナリトイヘ
 ドモ、愁ニ筆ヲ染メテ、コレヲ送ル、古来ノ人ノ歌各一首、天智天皇ヨリ以来家隆雅経ニ及ブ」
 云々とあるのによって、百人一首は定家の自撰によるものではなく、そのころ定家山荘にほど近
 く住み、また定家の長男為家の妻の父である頼綱が歌を選んで、定家には単に染筆を乞うたのだ
 という説を出したのである。これは為章の「年山紀聞」に記されており、近世の学者の多くはこ
 れにそのまま従っていたが、種々の点から再検討されるに至っている。

三、宗祇撰定家仮託説　これは吉沢義則博士のいうところで、百人一首の注釈書が宗祇以前に見
 られないことから、明月記の記事は今の百人一首についての記述かどうか不明確であるという

ことから、室町時代の宗祇などが選び、それを定家が選んだものと仮託したではあるまいかというのである。この説も宗祇よりもはるか以前の頼阿法師の「水蛙眼目」という書に小倉色紙のことが記されていることから否定された。

四、定家撰後人追補説 最近、有吉保氏により宮内庁書陵部に蔵する「百人秀歌」という書が発見され、これと百人一首とを比較することによって、多少の異同はあるが、そもそもこれが百人一首の原本と見なされるもので、結局定家が「二四代集」などから自撰自書して色紙としたものが「百人秀歌」のごときものとなり、それに後人が手を加え、歌の順序を改めなどしていわゆる「百人一首」なる成書ができあがったと見る説であって、現在のところこの説が一番おだやかである。かくてこれが世に流布するに至ったのは、よほど古くからであったらうと思われる。

内容

「小倉百人一首」は第三十八代天智天皇の御製を始めとし、第八十四代順徳院の御製をもつて終り、約五百七十年間の著名歌人の歌を集めてあり、その排列はおおむね年代順になっている。そうして、歌の種類からいえば、

恋・四三首（男二九・女一四首） 春・六首 夏・四首 秋・一六首 冬・六首 雑
 ・二〇首 羈旅・四首 離別・一首
 となり、出典別に見れば、

古今集・二四首 後撰集・七首 拾遺集・一一首 後拾遺集・一四首 金葉集・五首
 詞花集・五首 千載集・一四首 新古今集・一四首 新勅撰集・四首 続後撰集・二首
 となる。また身分からすると、

天皇・七首 女帝・一首 親王・一首 内親王・一首 朝臣・五八首 僧・一三首
 女房・一七首 母・二首

となる。恋の歌が半数に近く、季の歌では秋がもっとも多く、勅撰集では古今集からの歌が圧倒的であることなどは注意してよいことであろう。

価値

「小倉百人一首」はこれを通覧すれば、さながら和歌史をたどるようなもので、多少の不審の点をのぞくならば、いわゆる歴代名歌集として、まずもつとも要を得たものといえよう。藤原定家が古來定評のあるものをもとにして、その鑑賞眼にかなった作を集めたものだからである。従って、この書は以後歌の道の経典として重要視され、その注釈解説の類のおびただしいことは他の古典に比して驚くほどである。その重んぜられたことは、やがて「何々百人一首」という類書を多く輩出せしめたことによってもこれを証することができるが、一方いつからか「歌ガルト」として国民の間に広く親しまれて来たことも、この本によって和歌文学の精神が一般民衆の中に浸透していった面を見のがすことができない。「小倉百人一首」はわずか百首の集に過ぎないものではあるけれど

ども、歌を作る者にも一般の者にも、古典としてその与えた影響はすこぶる大きいといわなければならぬし、今後とも国民教養書の一つとして永く親しまれてゆくことであろう。

△参考書▽ おもなものだけを掲げておく。

百人一首拾穂抄
百人一首雑談
百人一首改観抄
百人一首初学
百首異見
百人一首一夕話
百人一首講義

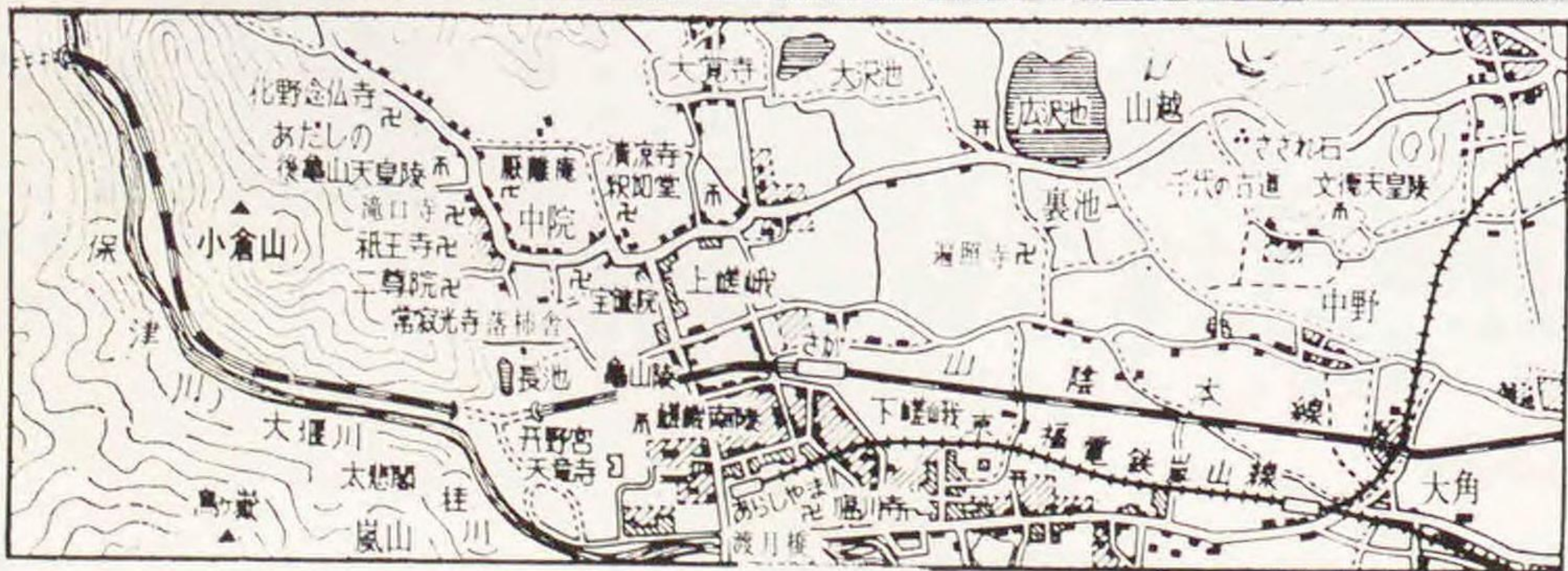
北村季吟
戸田茂睡
契沖
賀茂真淵
香川景樹
尾崎雅嘉
佐佐木信綱

新釈百人一首精解
百人一首夜話
小倉百人一首評釈
百人一首新釈
小倉百人一首新釈
百人一首の読み方
小倉百人一首の講義
百人一首評解

鴻巣盛広
吉井勇
中島悦次
松田好夫
小高敏郎
犬養廉
木俣修
金子武雄
石田吉貞



歌離庵旧址



小倉山周辺図

秋の田のかりほの庵の苫をあらみ
 わが衣手は露にぬれつつ
 天智天皇

筆理為泉冷



口歌 秋の田に造った、刈り穂を見守るための仮小屋の屋根の苫の編み方が荒いので、その中にいる私の袖が夜露にしみきりにぬれることだ。

語釈 かりほは仮小屋。刈った穂の穂とする説もあるがとらない。「仮庵の庵」はいわゆる重ねことば。庵は粗末な仮小屋。苦はかやなどの草を編んで屋根をふくもの。あらみは荒いために。「み」は理由を示す接尾語で、「を…み」の形をとる。編み方が荒いことをいっている。衣手は袖。ぬれつつは「つつ」は継続を現わす助詞。しきりに繰返されている様を示す。

鑑賞 作者については一応の疑問が持たれるが、とにかく、天智天皇の歌として伝えられていたのである。作者は、刈った稲穂の番をするために、番小屋に泊ったのである。古代では、田に小屋を造って、獣の被害を避けるために番をした。仮小屋であるために苦も目が荒く、従って、夜露が、屋根のすき間からもれて来て袖をぬらすというのである。これは、事実としては誇張しているであろうが、中世時代以後は屋根のすき間から月光や雨がもれることが常識になっている様を示す。

「置きつつ」としないで「ぬれつつ」という表現はその事を示していると思われる。袖などに露が置くとする表現は古代にもある。誇張は詩には付き物で、これなどもそれだと思われるが、その表現を通して、夜の小屋の中のわびしさ、苦しさをよく表わしている。助詞「の」を三つ重ねて調べを整えながら簡潔に情景を示し、露によって夜を暗示するなど、心細い手法によって、具象し、それによって叙情を果たしている。事実は天皇の御製ではあるまいが、編者は天皇が農民の立場で詠まれたものと考えていたのだろう。

参考 出典は後撰集・秋(三〇二)「題しらず」。作者は天智天皇(六六〇-七〇一)は三十八代の帝、父は舒明(じよめい)、母は皇極(こうぎょく)各帝。中大兄(なかのおおえの)皇子と称し、藤原鎌足と協力して蘇我入鹿を滅して大化改新の政治を行なった。土地人民の私用を禁じた大革新の政治であった。天皇となって後、六六七年、都を近江大津宮に移し、五十八歳で崩御。万葉集初期の時代に当たり、天皇もその作者の一人で「三山の歌」は有名である。参考は万葉集卷十に「露を詠める」として作者不明の「秋田刈るかりほを作りわが居れば衣手寒く露ぞ置きにける」という歌があるが、この種の歌を改作したのではないかと疑われる。

春過ぎて夏来にけらし
 白妙の衣ほすて
 ふ天の香具山
 持統天皇

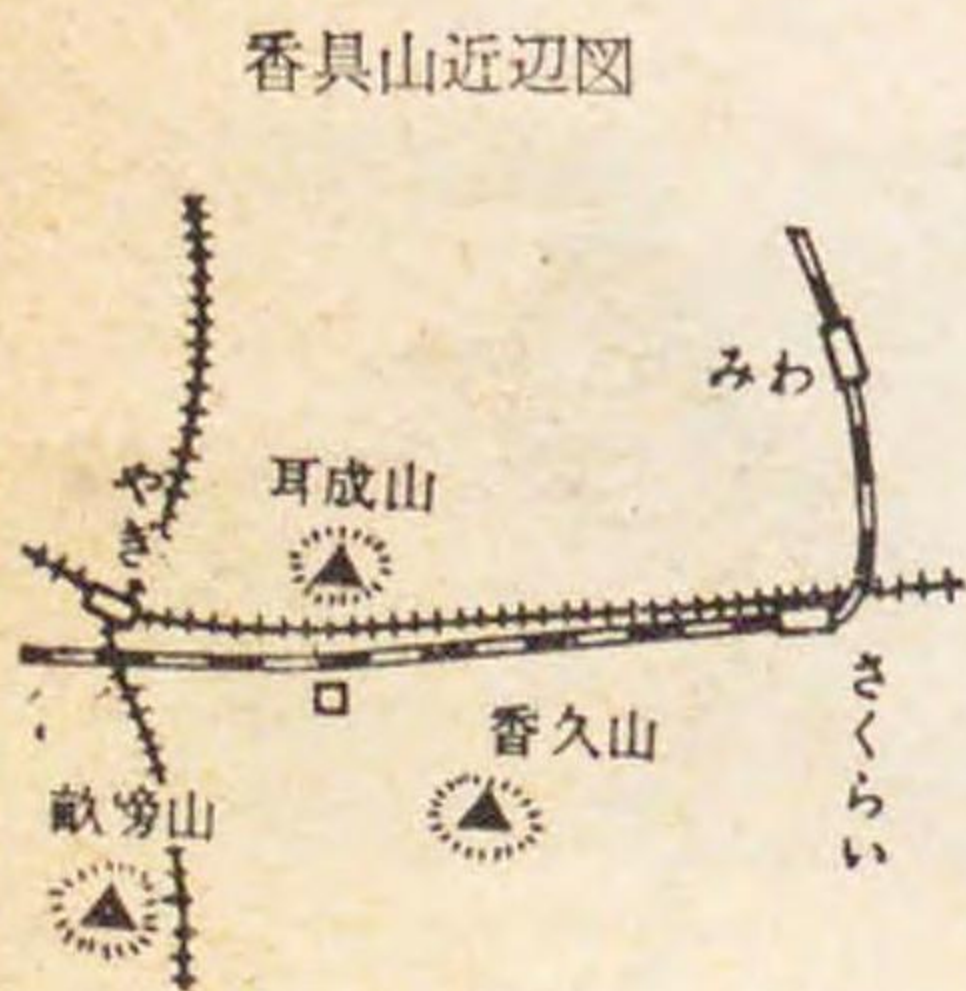
口歌 春が過ぎ去って、夏が来たらしい。そこには、白い妙の着物をほすのだと人がいう天の香具山に。

語釈 来にけらしは完了助動詞連用形。「けらし」は複合の助動詞で、「ける」「らし」が一つになったもの。過去の推量である。来たらしいの意。白妙は「かじ」の木の子の繊維で織った織物の名で、白い色をしているので白妙という。衣は着物の一般的な名。ほすては「ほす」という。「てふ」は「といふ」が圧縮された語。ほしているとは他の人がいっている意。この場合は連体形で「天の香具山」にかかる。天の香具山は天和三山の一つで、「天の」というのは天上から降った山という伝説から付けられたもので、尊敬的に枕詞のように使われている。

鑑賞 この歌は万葉集の原歌を時代の好みに応じて訓読したものである。それで、原歌の「来たらし」を「来にけらし」「ほしたり」を「ほすてふ」としている。新古今集のこの歌として鑑賞すると夏が来たことを「来にけらし」と感傷している。それは、弱く優雅な調でもある。又、「衣ほすてふ」も柔らかく優雅な調で、全体的に柔らかく陶酔的な

歌になっている。それはそれなりに美しく耽美的であるが、一度万葉の原歌と比較すると、全く異質な歌が出来上がっていることが感じられる。原歌は「来たらし」と訓まれて、力強い季節に対する感動が表わされ、その推量の根拠を示すものとして「白妙の衣ほしたり天の香具山」が置かれている。白妙の衣も、はっきり目に映じたものとして断定し、印象深いものにされている。原歌と比較すると、優雅ではあるが、力の弱い印象の散漫な歌になっていることは否定できない。

参考 出典は万葉集卷一(二二八)「春過ぎて夏来たるらし白妙の衣ほしたり天の香具山」。新古今集・夏(一七五)、「題しらず」。作者は持統天皇(六六八-七〇九)は四十一代目の女帝。天智天皇の第二皇女で天武天皇の皇后となる。血族間の争いであった壬申の乱を経験し、天皇崩御後即位された。それは文武天皇の即位を待たためであった。藤原宮に遷都。新都造営の時の奉仕の長歌は有名である。天皇の歌才は万葉集原歌に見るように優れている。吉野、紀伊等へ度々行幸され、人麿等はこれに奉仕して名歌を残した。大宝二年、五十八歳にて崩御。



三
あしびきの山鳥の尾のしだり尾のながし夜をひとりかも寝む
柿本人麿



山口 山鳥の垂れた尾のように長い長い夜を、私ひとりです寝ることであろうかなあ。

語釈 あしびきの山鳥の枕詞(まくらことば)。万葉時代は「あしひきの」。山鳥はきじ科の鳩。しだり尾のしだり尾は垂れた尾。「の」は比喩をあらわす助詞。ここまでは比喩でかかる「ながながし」の序詞。ながながしは長いを重ねた形容詞で、長い長い。形容詞の連体形だから、「ながながしき」でなければならぬが、古い形で、終止形が連体形の働きをしている。多くの例がある。かもは疑問、「も」は感動の助詞。寝むは推量の助動詞で係助詞「か」の結びである。

鑑賞 三句に及ぶ長い序詞、しかも、「の」を使った比喩的な、序詞としては未成熟なものを使っているのは、まさに民謡的な性格を示している。「尾のしだり尾の」と繰り返した表現も謡曲の性質を語っている。恋の歌で、独り寝のさびしさを歌っているのだが、リズムが軽快で暗さが無い。「尾」を重ね、「の」を四つも重ねていることが、このような明るい調べを生んだのであろう。長い序詞を使っているこ

とがすでに音楽的效果をねらっている証拠である。山鳥を序に使ったのは、この鳥は、夜は谷を隔てて別れ別れに夫婦が寝るといわれていたからであろう。このことは万葉集、枕草子等に書かれている。枕詞を使い、「しだり尾」という華麗なものを扱って、長大な序を作りあげている余裕は、素朴というようものでなく、相当文芸的意識を持って作っているものと思われる。しかし、作者、人麿は疑問がある。

参考 出典 万葉集卷十一、作者不明。拾遺集・恋三(七七八)、「題しらず」。作者詳細な伝記は分らないが、持統、文武の二代に仕えた下級役人で、所々の行幸に供奉して歌を献上している。石見国(いわみのくに)(島根県)に役人として下り、その地で、和銅二、三年頃に死んだらしい。万葉時代最大の歌人で、長歌、短歌共に優れ、長歌は彼によって完成されたといってもよいであろう。情熱と知性を兼ね備えた人と思われ、主観的な歌にも客観的な歌にも名作を残している。参考 万葉集の中には柿本人麿歌集の歌が伝えられているが、この中には他人の作品も混じっている。柿本集という歌集も伝えられているが、詳しい成立は不明であろう。

四
田子の浦にうち出でて見れば白妙の富士
土の高嶺に雪は降りつつ
山部赤人

富士山



山口 田子の浦に出て見ると、雪で白くなっている富士山の高い峰に、雪が降り続けている。

語釈 田子の浦 現在は、静岡県富士郡の海岸。昔のは由比、蒲原付近の海岸。うち出でては「うち」は意味を強める接頭語。白妙の白妙は白い妙の織物、即ち、かじ、麻等の皮で造った織物の名であるが、「の」は、のごとくの意味を持ち、全体で白いという意味に転じた。高嶺は「ね」は根とも書き、それに「み」が付いて「みね」になった。山の嶺である。降りつつは「つつ」は継続を表わす助詞だから、降り続けている意。万葉集の原歌は「降りける」で降り積っている状態をいつているが、この歌は現在降り続けている状態をいつている。

鑑賞 静岡県の田子の浦は、富士山が正面に見える海岸で三保の松原も近くて風光明々な土地である。作者は、この海岸に出て、白く雪が降り積った高い嶺に更に雪が降り続けている状態を驚きをもって飽かず眺めているのである。作者としては、自己と自然の状態をそのままに表現するだけの余裕がなかったであろう。本来、この歌は、富士の神として

の信仰を述べた長歌の反歌であって、そうした心情を背景にして味わうべき歌である。原歌は「ま白にぞ」と白いことを強調して、白い神々しさを表現しているが、この歌は、「白妙」と柔らかく平安以後の調子に変えられている。そのため、意味も変化して、白く積った雪の上に更に雪が降り続く状態となり、新古今集では冬の歌とされている。この状態は事実としては多少無理があるが、時代的な歌にするために強いて変えられたのであろう。しかし、このままの歌としても、神々しさは減じているが、作者の状態と共に秀麗な富士の崇高厳肅な様子が示されている。古今集・新古今集両歌集の時代的特色が知られるであろう。

参考 出典 万葉集卷三、不尽の山を望んだ長歌の反歌「田子の浦うち出でて見れば真白にぞ不尽の高嶺に雪は降りける」。新古今集・冬(六七五)、「題しらず」。作者詳細な伝記は知られない。宮廷の役人として各地に旅行して自然を歌っている。奈良時代初期、元明、元正、聖武帝時代の人で、人麿よりも一時代後の歌人である。静寂、清純な自然の美を高い格調で歌った自然歌人である。

五
奥山おくやまに紅葉もみじふみわけ鳴く鹿の
声こゑきく時
ぞ秋は悲しき
猿さる丸まる大夫たふ

金剛寺蔵 狩野山楽筆



口訳 奥深い山に、散った紅葉をふみわけて鳴いている鹿の声を聞く時が、悲しい秋は特に悲しく感じられる。

語釈 奥山に「奥の方の山。そこはさびしいところである。「に」は場所を表わす。この第一句は次句「ふみわけ鳴く」にかかる。紅葉ふみわけ紅葉は紅くなった木の葉。ふみわけは、地上に散ってたまっている所を歩く状態。ふんではかき分けるのである。鹿の動作。鳴く鹿鹿が鳴くのは雄鹿が雌鹿を求めたのである。声こゑきく時とき鹿をきく時を特に取立てていっている。秋は悲しき秋は他の季節とちがって悲しいものと決められていた。その悲しい秋がこの場合は更に一段と悲しいことを表わしている。「悲しき」は、「ぞ」の結び。

注 作者は奥深い山にはいって、鹿の声を聞いた。奥山であるから静かでさびしいところである。折から晩秋で紅葉が地上に散りしている。鹿は、その紅葉をふみ分けて歩きながら鳴いているのである。作者は眼前にそれを見ているものとしているが、恐らくこれは想像であろう。それにしても感性的な情景である。鹿は交尾期にだけ雄が鳴く。その声は

男女関係を連想させる。山の情景も鹿の状態も艶麗さを持ったものである。秋は悲しいというけれども、優雅を持った悲哀である。それは、しみじみとしたさびしさを感じるものあわれであろう。

「奥山に」は「きく」にかかると見られないこともないが、歌として見ると、そこまで離れていることは歌の感味をそぐことになり、面白くないし、作者の側に立って考えて見ても「奥山に」と初句を置きながら、感情を他に移行させたところのは自然である。短歌では言葉はなるべく近い言葉に続くと考えたい。故に、「奥山に」は鹿の位置を示しているが、作者としても奥山に入ったことを示すことになる。少なくとも奥山に入らなければこのような情景は見たり聞いたりできないからである。結句「秋は悲しき」と叙情的にしているのは全体が説明的な構成と共に古今的といえるであろう。

参考 出典古今集秋上(二一五)、「是貞のみこの家の歌合の歌、よみ人しらず」。「題しらず」とあるべきもの。寛平御時后宮歌合(作者不明)。作者「伝記不明。古今集真名序、三十六歌仙伝等に名が見えるが、勅撰集に歌は一首もなく不明の人物である。

六
かささぎの渡せる橋におく霜の
白きを
みれば夜ぞふけにける
中納言家持

信実筆



口訳 かささぎが天の川に渡している橋に白い霜が
白いのを見ると、天上の夜が更けたことだよ。

語釈 かささぎの渡せる橋七夕の夜、かささぎという鳥が、天の川の上に翼をひろげて橋を作り、織女星を渡したという中国の七夕伝説である。「渡せる」の「る」は完了の助動詞で、渡しているの意。この橋は永続的なものと考えている。おく霜の白きを霜ができることを「置く」という。霜が白く目に見えるように置くのは夜が更けてからである。ここは、天上の星群が夜更けに白々と光るのを霜と見たのであろう。「白き」は、白きもの略。夜ぞふけにける「ける」は「ぞ」の結びで連体形。感動の助動詞である。「に」は完了の助動詞。この夜は天上の夜をいっている。

注 日本には上代から多くの七夕(たなばた)伝説の歌があつて、この伝説が一般国民に親しまれてきたことが知られる。伝説は中国で発生したもので、上代に既にわが国に伝えられていた。この歌も、その伝説を扱ったものであるが、単に観念的に扱われたものでなく、実感として歌っているのが感銘がある。新古今集冬に入っているように冬の歌である。

かささぎの橋が出来るのは七月七日であるが、その橋は永続的に渡されているものだとして霜が置く冬もその橋はあるものと考えている。冬の寒い夜更けに、作者は天を仰いでかささぎの橋を空想し、星の白い光から地上の霜を連想したのである。そして、現在の地上から天上を連想し、天上でも夜が更けたと感じたのである。下句は作者の実感がにじみ出ていて、空想的な伝説の世界にひたりきっている作者が目に見えて来る。「かささぎの渡せる橋」を「天上の橋」の意から宮中の御殿の御階と説くのが通説で、これだと恐らく宮中の宿直の夜の体験などを歌ったものということになる。この歌は万葉集中にはなく、歌そのものも、静かで、優雅であつて、万葉時代のものとは思われない。また、かささぎの橋を扱った歌は万葉集中には一首もない。家持集からとられたものであろうか。

参考 出典古今集冬(六一〇)、「題しらず」。家持集、雑歌。結句「夜はふけにけり」。作者「大伴旅人の長男。大伴家の頭梁である。天平十八年越中守として五年間越中に下り、帰京、感傷的な歌風を大成した。延暦二年中納言、四年に没。万葉集編集の完成者といわれる。

七
 天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも
 安倍仲麿

筆為泉冷



口歌 空を遠くながめると、いま出ている月は、遠い故郷の大和の春日にある三笠の山に、以前に出た月であろうかなあ。

語釈 天の原は空。原は広い場所をいう。ふりさけ見ればは「ふり」は強意の接頭語。「さけ」は「離け」で、遠く離れる意。つまり遠くを眺めること。春日なるは「なる」は「にある」という意味の指定の助動詞である。春日は大和国添上郡、現在は奈良市春日神社付近の地である。三笠の山は春日の東方にある。山の形が笠に以ている。出でしは過去の助動詞で、以前に出た。以前というのは日本にいた頃である。月かも「か」は疑問、「も」は感動の助詞。

古今集「羈旅」の部にあるこの歌の左注によると、昔、仲麿を学問させに中国にやったところ、永年帰ることができなかつたが、日本の国からまた使がいったので、一緒に帰ろうとて出発したところ、明州という所の海岸で中国人が餓別をした。夜になって月が趣深く出たのを見てよんだと語り伝える。そういう伝説を持った歌である。この歌は「ふりさけ見れば」といって、現在出ている月をいわず、突然「三

笠の山に出でし月かも」と過去の回想の方だけをいっている。二つを対照させることによって、当然他の一方も分かるものとして省略したのである。これは調べを整える必要から当然要求された表現であろうが、調べを重要視したことが考えられる。

海岸に立って、大空を眺めると、折から月が出てくる。これは故郷の三笠山でも見たことがある月である。今の月も昔日本で見えた月も同じである。その月を通して郷愁を感じるといのが、この歌の主意である。仲麿が帰ろうとしたのは孝謙天皇の天平勝宝三年で中国で死んだのは光仁天皇の宝龜十年である。実際彼が作ったとすれば万葉時代であるが、この技巧的な表現、洗練された軽快な調べはそれらしくない。また、逆に日本に帰り得なかつた彼の歌が日本に伝わったとするのもやや無理がある。

参考 出典古今集・羈旅(四〇六)。左注「この歌は昔なかもろを、もろこしに物習はしに遣したりけるに云々」。土佐日記に初句を「青海原」として書いてある。作者は安倍仲麿(七一七)は元正天皇の代に十六歳で留学生として唐に渡り、帰ろうとしたが舟が難破して果たさなかつた。

口歌 私の庵は都の東南にあつて、私はこのように全く安楽に住んでいる。それなのに、ここを世の中が憂い宇治山だと世間の人がいっていることだよ。

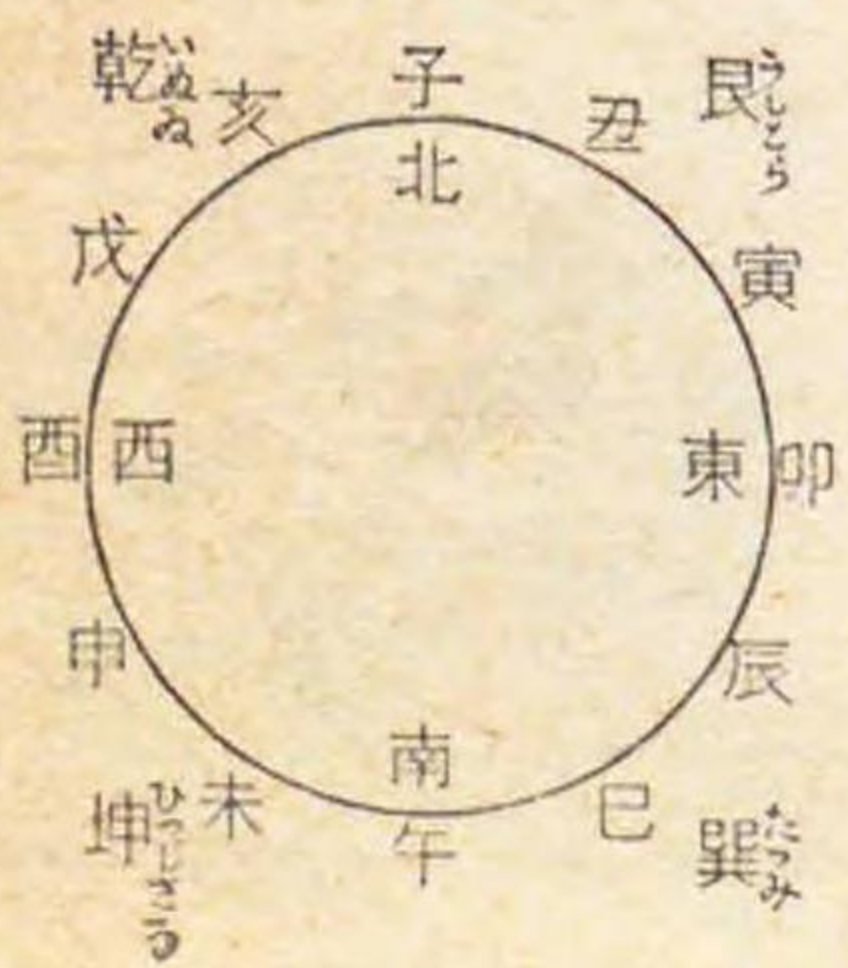
語釈 庵は粗末な家。修行者である僧は、そのような家に住んだ。都のたつみは東山。京都の東南だといっている。この第二句で切れていて、「よ」を省略している。しかぞすむは「すむ」は「ぞ」の結び。「しか」は、「そのように」の意で、副詞。下の「世を憂し」との対照から、安楽に暮している意味をふくめている。世をうち山は「うぢ」は「憂し」と「宇治」をかけている懸詞。宇治山は山城国(京都府)宇治郡にある。人世間の人。いふなりは伝聞、感嘆のどちらとも文法的にはとれるが、歌の意味からは感嘆がよい。「いふ」は連体、終止形が同じ形であるからどちらにもとれる。感嘆の場合は連体形を考える。

鑑賞 作者は京都の東南にあたる宇治郡の宇治山に庵を結んで修行者の生活をしている。修行者であるから、それなりに目的を持って、満足して生活しているのである。それなのに世間人は、宇治山を世間が辛い山、すなわち、辛い生活

をしているのだという。そういう人に対する実状の説明をした歌である。この歌には二つの対照されたものがある。京都から東南の安楽な生活の地と、世の憂い宇治山の生活がそれである。この二つの対象から、安楽な生活を説明する方は「しかぞ」と軽く、暗示的にしている。人間の心理を心得たいい方である。また、「世をうち」と懸詞を使っているなど技巧的で、知的であるのは古今集時代らしいやり方である。内容は相当複雑なものだが、これを三十一字の中に含めているのは作歌の技術だと思われる。

参考 出典古今集・雑下(九八三)、「題しらず」。古今六帖では初句は「わが宿は」結句は「人はいふらむ」とある。作者は諸説があるが、伝記不明である。清和天皇が出家されたという説もある。平安時代の六歌仙の一人で、当時では重んじられた人らしい。歌学書撰式の著者ではないかともいわれている。参考古今集の序文に「宇治山の僧喜撰は」とばかすかにしてはじめをはりたしかならず。いはば秋の月をみるに、あかつきの雲にあへるがごとし」とあるが、作者の歌の中の思想が漠然として捕えにくい事をいっている。

八
 わが庵は都のたつみしかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり
 喜撰法師



九
花の色はうつりにけりないたづらにわ
が身世にふるながめせしまに 小野小町

信実筆



口訳 桜の花の色は、あせてしまったよ。咲いたかいもなく。私の生活を考えて嘆く、それと同じ名の長雨が降った間に。

語釈

花||こういう場合は大体として桜の花を表わす。

うつりにけりな||「うつる」は変化する意で衰えることをいう。花の場合は色があせる意。「に」は完了、「けり」は感動のそれぞれの助動詞。「な」は感動の終助詞。いたづらに||かいがないこと。この句はここで切れていて、第一句にかかる倒句になっている。わが身||自分。世に経る||世を渡ってゆくという意。「経る」はまた、「降る」の意味を懸けて「長雨」の縁語になっている。ながめせしまに||「ながめ」は上からは「眺め」で続き、下には「長雨」でかかっていく懸詞である。「せ」は動詞で、「長雨す」、すなわち長雨が降る意で、「し」は過去の助動詞である。「まに」はその間にの意である。

語賞

桜の花が咲いたので、見たいと思っっているうちに雨が降り出して幾日も続き、そのうちに花の色があせてしまった。「いたづらに」は惜しむ気持を強く表わしている。平安

口訳

これがまあ、この世間でいう、都から行く者も帰る者も、お互いに別れてゆき、知っている者も、知らない者もお互いに逢う逢坂の関だよ。

語釈

これや||「や」は感嘆の助詞。これは、逢坂の関をさす。この||代名詞に助詞が付いたもので強く指し示す語である。ここでは世間でいっている、即ち「いわゆる」の意を強く表わしたものである。行くも帰るも||行く、帰るは共に連体形で、「者」が省略された形。「行く」・「帰る」は、逢坂関は京都に近いから都を中心にしていっているのだから。しるもしらぬも||行く、帰ると同じである。あふ坂の関||「あふ」は、「逢う」と、「逢坂」を懸けている。関は近江と山城の国境にある逢坂山の上にあった。鈴鹿(すずか)、不破と共に昔の三関の一である。

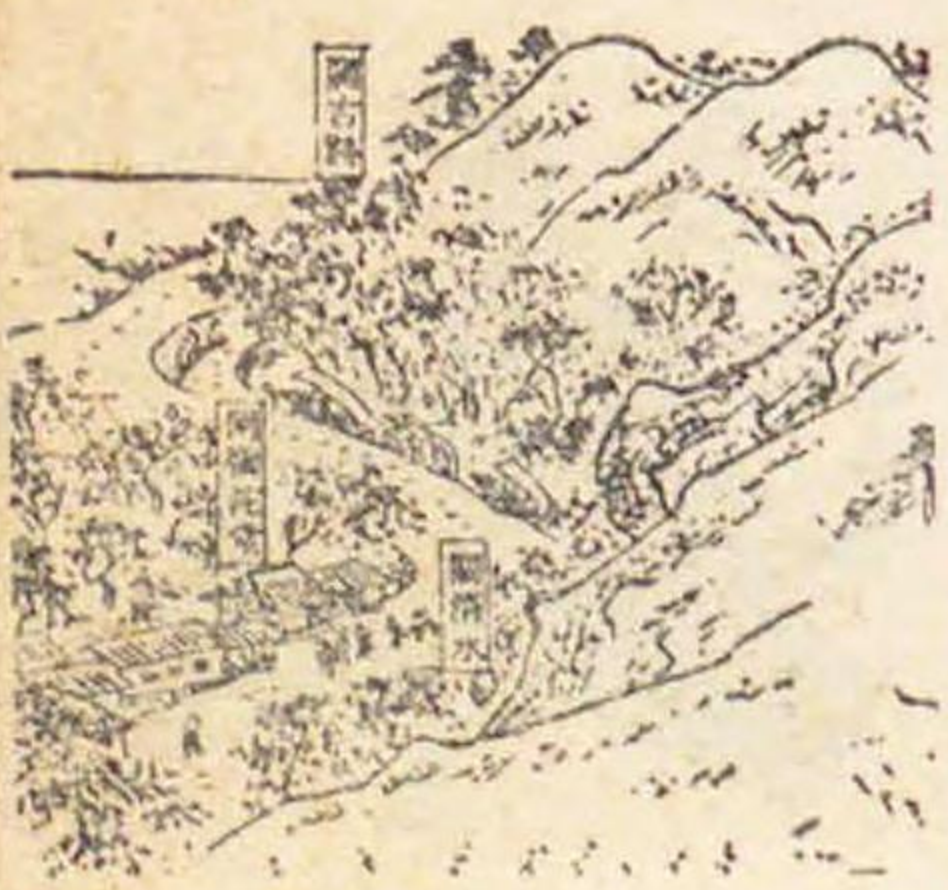
語賞

後撰集によると、作者は逢坂関のかたわらに庵室を造って住んだが、行き交う人を見てこの歌を詠んだのである。都から東海、北陸の方へ出る近江へ越えていく人もあり、近江の方から都へ帰って来るのでこの関を通る者もあり、お互いに、知る人も、知らない人も、別れたり逢うたりする。作

これやこの行くも帰るも別れてはしる
もしらぬもあふ坂の関

蟬丸

逢坂関<東海道名所図絵>



参考 出典||古今集・春下(一一三)・「題しらず」。小町集。作者||仁明、文徳帝頃の人らしいが、伝記は不明である。六歌仙の一人で重んじられた女流歌人である。絶世の美人だったという伝説もある。歌風は情熱的で、理知一方に傾いた古今集盛期の歌風と違っている。参考||古今集序「小野小町は古への衣通姫(そとおりひめ)の流(りゆう)なり。あはれなるやうにて強からず。いはばよき女の悩めるところあるに似たり。強からぬは女の歌なればなるべし」。

者はこの様を見て感動したのである。「これやこの」はその感動を示している。毎日見ていることであろうが、時あってこのように改めて感動したのであろう。お互いに知る知らないに関係なく、別れ、また逢う、そこに人生的なものを感じたのであろう。知る知らぬ人も、行き帰る人も、別れては逢うという事実を、この様に二つに分けていっているところにこの歌の技巧があり、平安朝的知的な分解がある。しかしまた一面からいえば、この分解は、織るような人の行き来を効果的に表わすものになっている。

参考

出典||後撰集・雑(一〇九〇)、「逢坂の関に庵室を造りて住み侍りけるに、行きかふ人を見て」。第二句は「わかれつつ」とある。素性集にもある。作者||伝記は明らかでない。今昔物語(こんじゃくものがたり)には、宇多天皇の皇子敦実(あつざね)親王の雑色(ぞうしき)で、逢坂山に住み、博雅三位に琵琶の秘曲を授けたとある。また、逢坂関の明神は蟬丸が住んでいた跡だともいわれている。また、盲目だったとも伝えられていて、伝説の人になっているが、後撰集にある通り、逢坂の関に庵室を作っていた歌人であったことは間違いない。

わたの原八十島かけてこぎ出でぬと人
 にはつげよ蟹のつり舟

弘仁寺藏



口訳 広びろとした海の、多くの島を伝って舟を漕ぎ出したと、家の人に伝えてくれよ。漁夫の魚釣り舟よ。

語釈 わたの原は広い海。「わた」は海で、原は広い面をいう。八十島かけて八十島は多くの島。かけては、引っかけての意で、多くの島を伝っていくことをいう。こぎ出でぬ海に舟を漕ぎ出した。「ぬ」は完了の助動詞。人古今集の詞書には「京なる人のもと」とあるからこれは家の妻を漠然とさしている。人は、この場合は自分以外の他人の意だが、詞書から家妻になる。この第四句で切れている。蟹のつり舟は漁夫。漁夫の乗っている魚釣り舟である。これは海上にいる眼前のものである。

を妻にいい送りたいと思う。いま頼りになるものは、海上に浮かんでいる釣舟だけである。それに伝えてもらおうほかはない。そこで釣舟に向って呼びかけた歌である。しかし、これは事実としてなし得ることではなく、詩的真実として、心理状態として表現しているのである。詞書によれば、心のなかの状態として、想像として、乗船前に詠んだことになる。しかし、そのことは、この場合問題にすべきではなく、歌は歌として鑑賞すべきである。舟は既に大海の真中に漕ぎ出した。そしてそこには釣舟よりほかはない。これらの映像を描かせながら、家妻を思う抒情を果たしているという歌である。

鑑賞 この歌は古今集の詞書によると、小野篁が隠岐の国へ流された時に、舟に乗って出発する時に京にいる家人に送ったとしている。しかし歌ではすでに海上に出してしまったことになっている。港は難波で、海は瀬戸内海である。広々とした海の多くの島の間を一つづつ伝うようにして舟を漕ぎ出していった。もうここまで来ると、この様子を家の妻にいい送ることもできない。心細くなって妻を思い出し、このこと

参考 出典古今集、羈旅(四〇七)。和漢朗詠集下・今昔物語。作者小野篁(八三三)は小野岑守(みねもり)の子で漢詩人であるが、この歌のように歌にも優れていたことが知られる。仁明天皇の承和五年(八三三)に遣唐使が出ることになり、彼は副使に任ぜられた。大使藤原常嗣(つねつぐ)が副使の船と交換したことを怒って辞職したので罰せられた。三年後に許され、文徳天皇の代に、参議左大臣三位で没した。参古今集詞書「隠岐の国に流されける時に、舟に乗りて出で立つとて、京なる人のもとにつかはしける。」

口訳 天上の風よ。雲の中の天上へ通う道を吹いて通れないように、閉めてくれ。天上から下りて来た美しい天女の姿を、もうしばらく留めておこう。

語釈 天つ風天を吹いている風。作者としては天上の国を想像している。雲の通ひ路雲の中にある、天上へ通う道。天上の国は雲の中を通過していくものと想像している。吹きとちよ雲を吹いて通れないようにせよ。雲の中の道だから、雲を吹けば閉じられると想像した。をとめの姿をとめは若い娘で、これは天から下りて来た天女を意味し、特に「姿」といっているのは、その美しい姿を印象づけるためである。この天女は毎年、宮中で十一月の丑(うし)の日から四、五日にわたって豊明節会(とよあかりのせちえ)が行なわれる五節(ごせち)の時の舞姫を見立てていっている。この時の舞姫は五人である。とどめむ「む」は意志の助動詞である。天女は舞い終わると天上へ上ってしまうと見て、地上にとめて置いてその姿を見たいという意。

んだものである。五節の舞は元来、天武天皇の御代に、天女が吉野山に下りて舞ったという伝説によって始められたもので、遍昭の心のなかにはすでに天女という觀念があったはずである。舞姫を天女に見立てたことはあながち誇張ともいえないものがある。美しい姿をもうしばらく見ていたいという願いを述べているのだが、舞姫が天女に譬えられているので、単純なおとめの姿という語が優美なものに思われ、従って作者の恍惚状態も、「雲の通ひ路」の表現と共に自然で切実なものに感じられる。明るく美しい歌である。

参考 出典古今集・雑上(八七二)。遍昭集「五節のころ舞姫を見侍りて」の詞書。第三句「吹きとめよ」結句「しほし見るべく」。古今六帖・一。和漢朗詠集・下雑。作者僧正遍昭(八六一八)は桓武天皇の皇子良岑安世の子で、出家前の名は良岑宗貞(よしみねのむねさだ)。素性法師はその子である。仁明天皇に愛され藏人頭になったが、崩御されたので出家して僧正になった。三十五歳。雲林院・元慶寺の座主などになり、六歌仙の一人。参古今集には「五節の舞姫を見てよめる、良岑宗貞」とあり、出家前役人時代の作である。

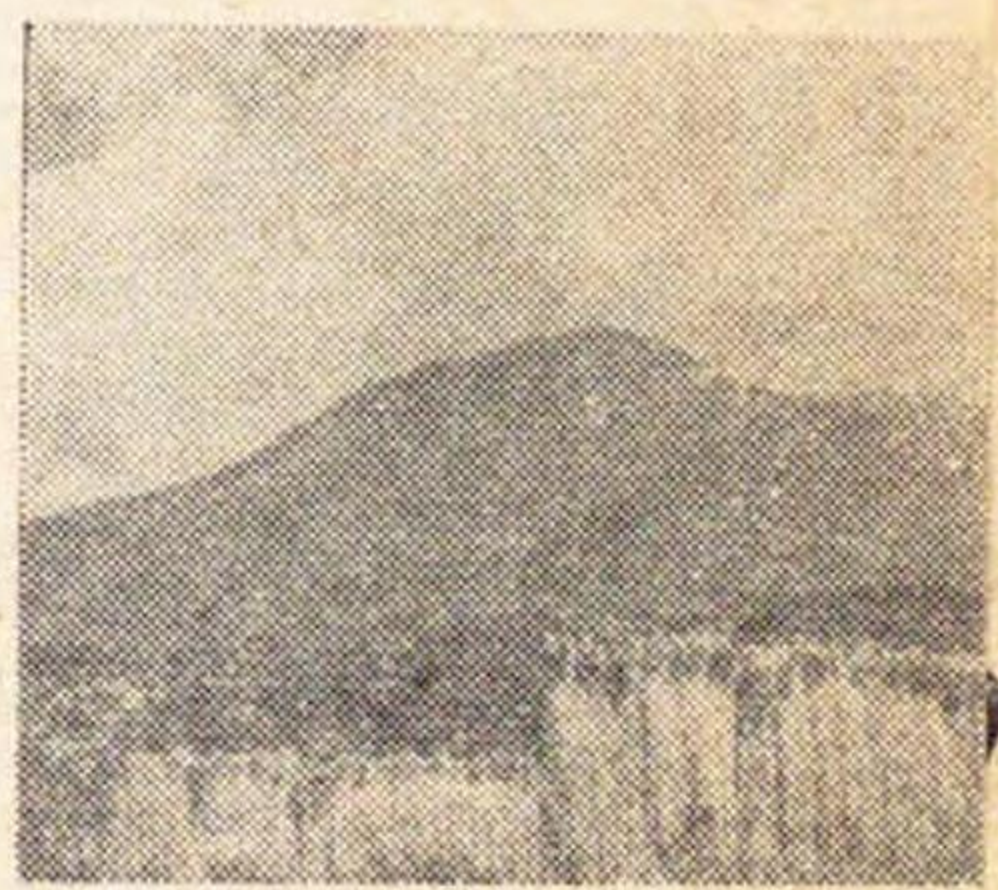
天つ風雲の通ひ路吹きとちよ
 姿しばしとどめむ
 をとめの
 僧正遍昭

五節の舞



一三
つくばねの峰よりおつるみな
の川 恋ぞ
つもりて淵となりぬる

筑波山



口訳 筑波山の峰から流れ落ちる男女川(みなのがわ)が、流れる水が積もって後には深い淵になるように、私のあなたを恋する心も、永い間に積もり積もって淵のように深くになりました。

語釈 つくばね 筑波山。常陸国、現在茨城県にある。男女の両峰があり、古代から歌垣(かがい)、すなわち男女交際のための踊りが催された所として有名である。峰よりおつる 川峰から流れ落ちる。急流だから「落つる」という。深い山には山を流れる谷川の急流が多い。みなのがわ 男女川と書き、筑波山の麓を流れる。桜川ともいい、霞が浦に入る。恋ぞ 私のあなたに対する恋心。この歌は釣殿のみこ、すなわち光孝天皇の皇女綏子(すいし)内親王に送ったものである。淵となりぬる 淵は水が深く流れない所、それは水が積もってできたものとして、段々強くなって来る恋心の比喩にしている。「ぬる」は「ぞ」の結びで完了の助動詞。

鑑賞 相手に対する恋しさが段々激しくなって、いまはどうにもならなくなった。これをそれとなく相手に知らせるために、川の淵を比喩に使ったのである。初句から三句までは

比喩でかかる「淵」の序詞と考えられるものである。暗喩で三句までいい下しているのは大胆である。しかし、これは強い調で一気にいっているのが、壮快さがあり、強さがある。四句で恋に転じている転じ方が突飛であるが、これも川に淵を関係させて一気にいい下しているのが、あつ気にとられながら胸がすく思いである。恋の悩みを訴える歌だが明るい歌である。筑波山のみながわを比喩に使ったのは、この山が古代の恋愛に関係する所であったからであろうか。そうとすれば突飛だとはいえないものである。

参考 出典 後撰集・恋三(七七七)。古今六帖では三句は「恋ぞたまりて」とある。作者 陽成院(八六九)は第五十七代の天皇で、父は清和帝、母は二条后の藤原高子。貞観十九年十歳で即位され、母の兄基経が関白となったが、精神病にかかって乱行が多かったという。そのため、在位八年で光孝天皇に位を譲られた。時に御年十七歳。八十二歳で崩御になった。勅撰集にはこの一首しか入っていない。参考 後撰集の詞書「釣殿のみこに遣(つか)はしける」とある。釣殿のみこは、光孝天皇の皇女綏子内親王のことで、後に院の後宮に入った。

口訳 陸奥(むつ)の国の信夫で作られるもじり染の布のように、あなた以外のどの人のために心が乱れ始めた私ではないことだ。(私の心が乱れ始めたのは、全くあなたのためだ。)

語釈 みちのく 陸奥の国で、東北地方の総称であった。

しのぶもぢずり しのぶは地名で信夫。今の福島県にある。もぢずり 忍草(しのぶぐさ)を摺りつけて染めた布であるが、もじれた乱れ模様がつくので、「もぢずり」と称した。乱れ模様であるところから、一、二句は比喩で「乱れ」の序詞にした。誰ゆゑに あなた以外の誰のためにの意。会話の場合に、強調的に省略的に使われる語、今日も残っている。乱れそめにし 心が恋のために乱れ始めた。「に」は完了、「し」は過去の助動詞。「にし」と続くのは強調的に使われる。なくに なくは打消「ず」の未然形。「く」は名詞形にする接尾語。「に」は感動の終助詞。ないことよの意。

鑑賞 恋する女に、心を打ち開けた歌である。その打ち開け方は「乱れそめにし我ならなく」と余裕を持ったいい方で、熱情的なものではない。一、二句の序詞は特殊な

みちのくのしのぶもぢずり誰ゆゑに乱
れそめにし我ならなくに

河原左大臣

乱

筆理為泉冷



一五
君がため春の野にいでて若菜つむわが
衣手に雪は降りつつ
光孝天皇



筆為泉冷

【口歌】 あなたに贈ろうと思つて、春の野に出て若菜をつんで私の袖に雪が降り続いています。

【語歌】 君がため君は、男性にも女性にもいった。君に贈ろうために。春の野春といつてもこの場合は正月である。旧暦では春は正月から始まる。若菜は食べられる草をいう。若草。春の七草等。正月七日に、七草を粥に入れて食べた。無事を祈るためである。衣手袖。雪は降りつつ「は」は特に他と区別して強くいう助詞。「つつ」は継続をあらわす助詞。

【鑑賞】 この歌は作者が、人に若菜を贈った時に添えたものである。特に野に出て食用の草を摘むのは、正月の若菜である。正月では草はまだ芽を出したばかりだから若菜である。正月七日に七草の粥を食べるのは行事になっていたが、若菜摘み出るのも一つの行事であった。この事は枕草子にも書いてある。この歌の場合は、特に人に贈るために摘み出したのである。正月であるから雪が降っていて、作者の着物の袖にしきりに雪が降りかかるのである。袖は着物のなかでも、最も目立つところであるから、袖をいうのが習慣的になつて

いた。旧暦では、春は一月から始まるから、旧暦であってもまだ寒く雪が降った。この歌の三句までは自分の状態で、説明にすぎず、一首の眼目は「わが衣手に雪は降りつつ」にある。これは摘む苦勞を具体的にいつたものである。平安朝時代では、人に物を贈る時には、歌を書いた短冊を添える習慣になっている。これもその歌で、若菜が誠意のこもったものであることを説明しているのである。作者自身が野に出たかどうかは分からない。誠意を見せるにしても「君がため」というだけで、あくどくならずすりとした歌である。

【参考】 出典古今集・春上(二二)。題詞「仁和(にんな)の帝、皇子におはしましける時に、人に若菜を賜ひける御歌」。古今六帖・一、「若菜」。作者光孝天皇(六三—六七)は五十八代の天皇で、時康親王といひ、仁明天皇の第三皇子であった。この歌は「皇子におはしましける時」とあるから、時康親王時代の歌である。古今集撰集の時、天皇の名にしたのである。小松の帝、仁和の帝ともいつた。小松は御殿、仁和は年号の名である。五十五歳で陽成天皇の後をつぎ、五十八歳で崩御になった。幼いころから英明の質があり、学を好まれ、仁慈を垂れ給うたので、人々に慕われたといふ。

一六
立ち別れいなばの山の峰におふるまつ
としきかば今帰りこむ
中納言行平



筆為泉冷

【口歌】 私が別れていったならば、稲羽山の峰に生えている松の名と同じくあなたが私を待っていると聞いたら、すぐに帰ってきましょう。

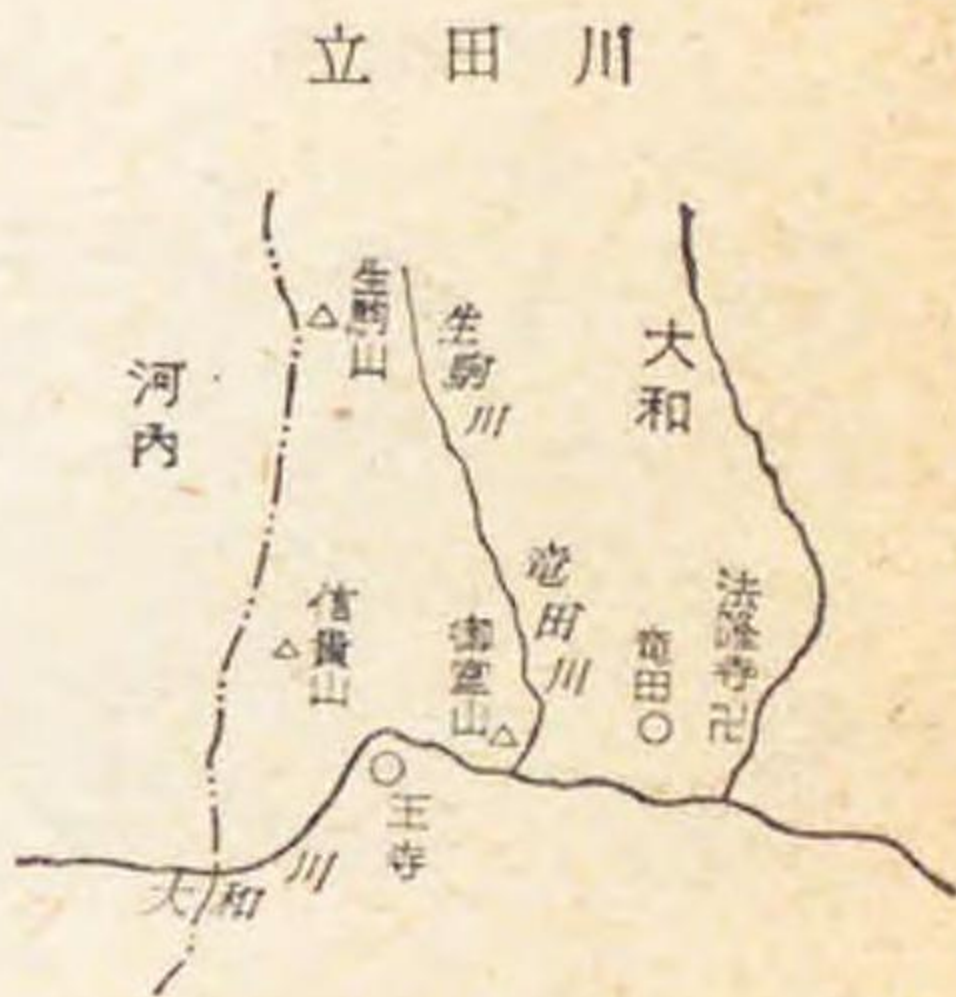
【語歌】 立ち別れ「立ち」は意味を強めている。いなばの山の「いなば」は「去(い)なば」と、「稲羽の山」を懸けている。稲羽山は因幡国(いなばのくに)(鳥取県)稲羽村にあった山らしい。おふるは生えている。上二段活用連体形まつとしきかば「まつ」は、「松」と「待つ」を懸けていて、「いなば」から「生ふる」までは、「待つ」にかかる序詞である。上からは松で、下へは待つでかかってゆく。因幡の国へ国守となつていくので、稲羽の松を序詞に使ったのである。「し」は強めの助詞。きかば「ば」は仮定の助詞。今帰りこむは、もうすぐ。

【鑑賞】 まさに因幡守となつて出発しようとする時に、残っている者にいう言葉として残っている。別れていつても、都に残っている者が待っているなら直ぐ帰ろうというのだが、国守がそう簡単に帰れるわけのものでもない。これは別れを惜しむ者への慰めに過ぎない。また、自分への慰めに過ぎないもの

である。二つの懸詞と序詞を使っている技巧的な歌で、「去なば」を「稲羽」にかけたのは、非常に知的だといえる。更にそれに助詞を続けている複雑さであるが、歌の内容は極めて感情的な、むしろ弱々しいものである。

【参考】 出典古今集、離別「題しらず」、古今六帖・二、「国」。作者中納言行平(六二—六三)は在原氏。平城天皇の皇子阿保親王の第二子で業平の異母兄にあたる。天長三年に在原姓を贈わって臣籍に下つたのである。蔵人頭、因幡守、太宰権帥(ださいのごんのそち)を経て、中納言に昇り、民部卿を兼ねたので、在原部卿、在中納言などといわれた。政治上の功績が多かったが、七十六歳で没した。参考文徳実録第七に、「斉衡二年春正月壬午の朔丙午の日、従四位下在原朝臣行平を因幡守になす」とある。歌はこの時出発に際して詠んだものである。現存日本最古の歌合せである在原部卿家歌合(仁和元年)は、行平の家で行なわれたものである。古今集雑に、「田村の御時に事にあたり津の国の須磨とふ国にこもり侍りけるに云々」として「わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶと答へよ」とある。謡曲「松風」はこの二首に取材されている。

一七
ちはやぶる神代もきかず竜田川からく
れなるに水くくるとは
在原業平朝臣



口訳 神代にもあったということ聞かない。竜田川は水を、まっ赤なくくり染めにするということは。

語釈 ちはやぶる神の枕詞。神代もきかず神代は、神秘なことがあった時代としていっている。神代にもあったことを、の意を省略的にいっている。竜田川これが主語になるので、竜田川は、の意になる。大和国(奈良県)生駒郡の竜田山の麓を流れる川。竜田神社に属する川である。からくれる中国から渡来した紅で、真紅(しんく)の色である。水くくる「くくる」は、くくり染めにすることである。水の上を真紅の紅葉が流れるのを、くくり染めにしたとたとえたのである。

銘 古今集の詞書によると、二条の後(きさき)が東宮の御息所(みやすんどころ)と申し上げた時に、御息所の御屏風に、竜田川に紅葉が流れる画が描かれているのを題にして詠んだとあり、いわゆる題画の歌である。画を題にして歌を詠むことは、平安朝では、かなり流行していた。そして、屏風歌というのは、屏風の絵を題にして詠んだ歌で、画と共に混ざり混ぜにするものと呼んだのである。そのように、竜田川に

赤い色の紅葉が流れている画面を捕えて、くくり染め、すなわち今日の絞り染めにしたと見たのである。絞り染めは所々を色で染めた染め方で、紅葉も水の所々に散っていてそれに似ている。自然から人間世界のものを連想するのは知的な在り方だが、自然と人間の混融だともいえる。作者はそれを極めて神秘的な美だと考えて神代も聞かずといっている。作者は画に一つの解釈を加え、その美に最大級の感嘆の声を放っている。これは御息所の屏風を称賛することでもあったが、場所が竜田川だから神代をいい出すに不自然ではない。

参考 出典||古今集・秋下(二九四)。伊勢物語・一〇六段。作者||在原業平(六三—八〇)。父は阿保親王、母は桓武天皇の皇女伊登内親王。五男で行平の異母弟。在五中將と呼ばれる。左近衛中將、藏人頭等に任ぜられ、多感な歌人であった。伊勢物語の主人公は業平をモデルにしたものである。六歌仙の一人で、情熱的な歌風を持つ。参考||古今集の詞書「二条の後の東宮の御息所と申しける時に御屏風に竜田川に紅葉ながれたるかたを書けりけるを題にてよめる」。業平の代表歌「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」(古今集)。

口訳 住の江海岸に寄る波、それと同じ音(おん)の夜(よる)までも、どうしてこんなに夢の中の通路で他人に見られるのを避けようとしているのだろうか。

語釈 住の江||現在の大阪住吉。古くは住の吉(え)であった。夜さへや||「住の江の岸に寄る波」までは「夜」にかかる序詞である。即ち夜をいい出すための語である。この場合は、「寄る」と「夜」は同音で、同音を繰返しながら他の意味に転じていく方法である。「さへ」は昼は勿論だが、人に見られにくい夜までも意味。この語は或るものに或るものを添加する助詞である。「や」は感動をこめた疑問の助詞。夢の通ひ路||夢のなかの路。夢の中で思う人のところへ通う路。人め||人の見る目。人に見られること。よくらむ||「よく」は避ける。

鑑 他人に知られたくない恋をしているので、思うままに逢うことができない。せめて夢の中でも恋人に逢おうと期待しているが、昼はもちろん、夜の夢でさえ他人に遠慮して行き来できないのだと自分の恋を嘆いているのである。一、二句の序は、この歌を美化するに役立っている。住の江の海

岸は古代から名所とされている所である。自然美が人間の生活に近づいていることを示している。ここに扱われているものは、夢というロマン的なものであって見れば、この序は内容に適切なものといえる。「人めよくらむ」と、推量にしているのは、作者自身自分の心理を疑っているのである。なお、古今集恋の部に、小野小町の「うつつにはさもこそあらめ夢にさへ人目をよくと見るがわびしさ」という同様の歌がある。

参考 出典||古今集・恋二(五五九)「寛平の御時後の宮の歌合の歌。寛平御時后宮歌合。古今六帖・四。作者||藤原富士麿の子。母は紀名虎の孫。少内記、大内記太宰大貳、藏人頭、従四位右兵衛督等を歴任した。古今集に死を悼んだ紀友則の歌が掲げられている。三十六歌仙の一人で当時優れた歌人であった。また書道の名家でもあって、小野道風が空海と並べ称したという。延喜七年没。また、昌泰四年没ともいわれている。参考||寛平の御時後の宮は宇多天皇の皇后の七条后温子である。紀友則が敏行の死を悼んだ歌「寝ても見ゆ寝でも見えけり一方はうつせみの世ぞ夢にはありける」。敏行は古今集撰者たちの先輩であった。

住の江の岸による波よるさへや夢の通
ひ路人めよくらむ
藤原敏行朝臣



冷泉為恭筆

一九
 難波^{なにわ} 瀉^{がた} みじかき 芦^{あし} のふしの間^まも あはで
 この世を過^すしてよとや
 伊勢



口訳 難波瀉に生えている芦の、短かい節と節との間のよ
 うに短かい間であっても、あなたに逢わないでこの人生を空
 しく過せよとおっしゃるのですか。

語釈

難波瀉 大阪附近の海。難波は大阪の古名。みじ
 かき芦のふしの間も 海辺に生える芦の節の間は短かい。「ふ
 しの」は、ふしのように。「の」は比喩を表わす助詞。「間」
 は、「短かい間でも」の意。「も」は意味を強める助詞。
 あはで 打消中止の助詞。あわないで。この世 自
 分の人生。「この」は現在あるものを強調していつている。
 「世」は節(よ)を懸けて芦の縁語。過してよとや 「すぐ
 す」は、過す。「て」は完了の助動詞で、この場合は意味を強
 める。「と」は伝聞の助詞で、「という」の意。「や」は感嘆
 を含めた疑問。

鑑賞

恋愛関係を絶とうと 来た男に贈った歌である
 う。今後死ぬまで逢わないで人生を過してゆくというのは作
 者自身が、関係を絶つことについて考えたのであろう。今後
 逢わないということは結果として、そういうことになる。そ
 れで、感嘆をこめてはいるが、疑問の形にしたのであろう。
 そして、この生涯というものは短かいものである。平安朝

では生涯を玉の緒にたとえて短かいものとしていたが、作者
 も、その時代の思想に従って、短かい間であってもと、条件
 を付けたのである。そして、その不利な条件を克服して相手
 の不信をなじったのである。恋を裏切られた怒りと、結句に
 は不幸をかみしめる悲しみが表わされている。使われている
 比喩は難波瀉であって、名所であるが、水辺の芦は美しいけ
 れども、一種の哀感を含んでいる。乱れ芦等ともいわれ、秋
 の枯れ芦は一層さびしいものである。この歌の内容にふさわ
 しいものといえよう。

参考

出典 新古今集・恋一(二〇四九)、「題しらず」。伊
 勢集。作者 父は伊勢守藤原経隆。父の「伊勢」を取って
 宮中での名とした。宇多天皇に仕えて皇子を生み「伊勢の御
 (こ)」と呼ばれた。「御」というのは、宮中女官女房の高位
 のものを呼ぶ名である。娘に歌人中務がある。これは宮を退
 いて五条の家に行った時に敦慶親王との間に生まれたものであ
 る。古今集時代一流の女流歌人であって、多感の女性だった
 らしく、藤原仲平と関係があったこともある。源氏物語にも
 亭子院(ていじのいん)が「伊勢、貫之によませ給へる」と
 あるほどの当代表の歌人であった。

わびぬれば今はた同じ難波^{なにわ}なる
 くしても逢はむとぞ思ふ
 元良親王

二〇

口訳 思い悩んでいるのだから、今はまた身を捨てたのと
 同じです。難波にあるみおつくしと同じ言葉の身を尽くし
 通り身を捨てても、あなたと今後逢おうと思えます。

語釈

わびぬれば 「わぶ」は、悩んで困ること。今は
 た同じ 「今」は、今となっては。「はた」は、二つ並べる
 意。「同じ」は、下に「みをつくし」があるので略して
 ある。みをつくしたのと同様だ。難波なる 難波にある意
 で、これは、「みをつくし」にかかる序。五音だが序詞とみ
 るべきだろう。みをつくしても 「みをつくし」は、懸詞
 で、舟の航路を示す杭の標(みおつくし)と、身を尽し、即
 ち身を捨てるの意をかけている。歌の本意は、後の意である。
 逢はむ 逢うは、恋愛の上での逢う意。歌の上では、恋愛関
 係が暴露した今から後も逢おうの意。「む」は意志の助動詞。

鑑賞

後撰集の詞書によると、事件が起きて後に京極の御
 息所に送ったとある。事件というのは、宇多天皇の妃(きさ
 き)である御息所との恋愛関係が他に発見された事件をさす
 のである。そのために思い悩んだのである。その辛さは死ん
 だも同様である。もうこれ以上の辛さはなく、それはすでに

与えられているのだからこの恋愛をあきらめても苦しみは取
 返しがつかないのである。どうせ同じ苦しむなら、身を滅し
 てもかまわない、あなたと逢うことを続けていこうというの
 である。二句切れでいい難したのは、それを悟った時の強い
 感動を表わすためである。翻然と気付いた時の感情の動きが
 そのままに力強く歌われている。それから思考は発展し、ま
 まよと破滅の思想を起こして、邪悪の恋に徹しようと思ひ
 するのである。四、五句は、その強い決意を示している。事実
 に即した激情的な歌である。「難波なる」の序詞は、あまり
 にも強い破滅思想を柔げようとして使ったものである。

参考

出典 後撰集・恋五(九六一)、「事いできて後に京
 極の御息所につかはしける」。元良親王御集。古今六帖・三。
 作者 元良親王(八九一―九四三)は陽成天皇の第一皇子で、三品
 (さんぼん)兵部卿にのぼった。天慶六年、五十四歳で急逝
 した。大和物語にはこの親王の逸話が多く載せられている。
 元良親王御集があつて、作歌に優れていたが、この歌にも示
 されているように、色好みの親王としても有名であった。「陽
 成院の一宮元良のみこいみじき色ごのみにおはしければ世に
 ある女の云々」(御集)。

みおつくし<標>



今こむといひしばかりに長月の有明の
月を待ち出でつるかな
素性法師

冷泉為恭筆



口訳 もうすぐに来ようとあの人がいったばかりに待っている、夜の長い九月の夜明けの月に、待っていたように出逢ったことですよ。

語釈 今こむと「今」は、もうすぐの意。「こむ」は動詞来(く)の未然形に、意志助動詞の「む」が付いている。いひし「し」は過去助動詞。長月旧暦九月の異名。ここでは、夜の長い意味を持たせ、男が来るのをいかに長く待ったかの意を含ませている。有明の月夜遅く出て、夜明けまで残っている月。十六日以後の月である。待ち出でつるかな「待ち出で」は、待っていて、その物が出て来て逢う意。「待ちえて」(待っていて逢って)という言葉も当時にあった。

鑑賞 女の立場になって詠んだ歌である。恋の歌であるから待っているのは女で、通って来るのは男である。男は、今日は早くゆくと言って来たので、いまかいまかと待っているが、一向に来ない。男の言葉を信じて待っていると、とうとう夜明けになってしまった。夜明けになって始めて女はあきらめざるを得ない。折から夜明けの月が出て来た。いかにも

この月を寝ないで待っていたように。この情景にはあわれがある。ところが、待っていた男は来ないで待ってもいない有明の月が出て来た。これを「待ち出でつるかな」といっているのは皮肉である。作者としてのここには機知と批評がある。女としては愚かな自分を自嘲している趣がある。長月の有明の月は、いかに長い時間を待っていたかを示している巧みである。「有明の月を待ち出でつるかな」と、待ってもいない月を待っていたように大胆にい下しているいい方はあまりに皮肉なのでユーモラスでもある。その明るさは時代的なものである。

参考

出典古今集・恋四(六九一)、「題しらず」。素性集。古今六帖・五。和漢朗詠集・下雑。作者俗名を良岑玄利(よしみねのはるとし)と云って僧正遍昭の子である。右近将監に任せられたが出家した。京都雲林院に住み、寛平八年、権律師に任せられ、後には石上(いそのかみ)の良因院に移り住んだ。昌泰元年に宇多上皇が宮滝に行幸になったときには、特に良因朝臣と名乗り、俗人として前駆に加わった。三十六歌仙の一人で、素性集がある。延喜六年には、醍醐天皇の命で、襲芳舎の屏風に歌を書いた。

吹くからに秋の草木のしをるれば
山風をあらしといふらむ
文屋康秀

二二

冷泉為恭筆



口訳 吹くので、秋の草木が傷つき弱るから、なるほど、山から吹く風をあらしというのであろう。

語釈 吹くからに「吹くのは山風である。「から」は原因を表す助詞。故に、ので。「に」はやはり理由を表す助詞。しをるれば「しおれる。すなわち傷ついて弱ること。むべ」副詞で、なるほど。「いふらむ」を修飾する。山風「山から吹いてくる風。京都の風は大体山風といってもよい。あらし」荒く吹く風、嵐。いふらむ「らむ」は推量の助動詞。

鑑賞 秋の草木は風に吹かれると傷つきしおれる。特に京都では風は山風だといってもよい。山に囲まれているからである。その風は草木を荒すのである。あらしという名は、荒らすという動詞の名詞形と考えてもよい。とにかく、作者はどのように解釈したのである。だから山風を嵐というのだと言葉の語源を自己流に解釈して、自ら満足し、興味を感じその知的興味を歌にしたのである。こうした素材を歌にするというところに時代の傾向がうかがわれる。しかし、この方はまだ実感的で秋の草木が傷つけられる有様を見て、言葉の語源

を考えるとということも知識人には自然なことである。しかも、「むべ」といって、いかにも感動としていっているが、もう一つの知識、すなわち山の字と風の字を重ねて嵐という字が出来ている。この歌は、こういう字の分解の興味も持たせている。こういう興味にいたっては全く知的遊戯になって来る。しかし、古今集は調べの歌といわれる通り、よどみのない韻律で実感のように感じられる歌である。

参考

出典古今集・秋上(二四九)、「是貞のみこの家の歌合の歌」。是貞親王は光孝天皇の第二皇子である。古今六帖では第二句は「なべて草木の」とあり、また康秀の子の朝康の作とある本もある。作者宗子(むねゆき)の子。山城大掾(たいじょう)、縫殿助等に任せられた。三河掾になるとき小野小町を誘ったことが古今集に見えている。六歌仙の一人、知的な歌を得意とした。参考古今集序「ふんやの康秀は詞は巧にてそのさま身におはず。いはばあき人のよき衣(きぬ)着たらむが如し」。小野小町の歌の題詞「文屋の康秀が三河のぞうになりてあがた見にはえ出で立たじやといひやれりけるかへりごとによめる」。

二三
 月みればちぢに物こそ悲しけれ
 一つの秋にはあらねど
 わが身
 大江千里

冷泉為恭筆



【口歌】 月を見ると、この上もなく悲しいことだ。私一人だけの秋ではないけれど。

【語歌】 ちちに限りなく。この上もなく。「干」に数の接尾語「ち」が付いている。物こそ悲しけれ「物」はいろいろな物についてという意味で、添える言葉となった。「けれ」は感動の助動詞で、「こそ」の結び。悲しいことだの意。わが身一つの「私一人だけの」。秋にはあらねど「秋は悲しいものとして」に「に」は断定の助動詞「なり」の連用形。「ね」は打消の助動詞。

【語歌】 秋になって、月を見ると、ひどく悲しい気持がする。自分一人だけが悲しいように、ひどく悲しいが、思い返して見ると、秋は自分一人だけに来るものではない、他の人も同様悲しいのだと思う。けれど、やはり自分一人だけの秋のように思われて悲しく思われる。秋の月に対する感傷であって、それは叙情的な形で表わされている。しかも、悲しく感じる自分の心に対して反省する。四、五句がそれである。これは当時の理知である。この歌は、白氏文集の「燕子楼中霜月ノ夜、秋来只一人ノタメニ長シ」の句を翻案したものだといわ

れている。彼は漢詩の句を題にして多くの歌を作っている。これも影響を受けたものの一つであろう。しかも、千々と一つを対照させる技巧を施すことを忘れない。

【参考】 出典古今集・秋上（一九三）、「是貞のみこの家の歌合によめる」。古今六帖、一。作者音人（おとひと）の子。父と同じく漢文学者であった。中務少丞、兵部大丞に任ぜられた。和歌にも長じていて、宇多天皇の命によって、漢詩の句を題にした短歌を詠んで献上した。参考歌合というものは、現存最古のものから考えると古今集時代から始まったもので、歴史は古く、新古今時代に最高潮に達した。何人かの作者を左右に分けて、左右一人ずつの作品を一對として優劣を争った作歌上の遊びである。それには判者があって、勝負の判定をし、それに対する批評を行なった。また、作者全員で勝敗を決める決め方もあった。貴人の面前で行なわれることが多い。それが、寛平の後の宮の歌合とか、是貞のみこの家の歌合とかいうものである。この歌合の発生は和歌批評や歌論を発達させたり、題によって歌を作る題詠の気運を助成したりして、和歌史の上に重要な地位を占めるものである。

このたびは幣もとりあへず手向山紅葉
 の錦神のまにまに
 菅家

二四

【口歌】 この旅行には、私の幣はみすばらしいので差し上げられません。素晴らしい、手向山の散る紅葉の錦を、神の心の通りにお受け下さい。

【語歌】 このたびこの旅。いまの行幸に従っている旅をいう。幣も五色の絹を細く切ったもので、神に捧げるもの。旅行の時には、道の神に捧げるために持っていた。「も」は強意の助詞。とりあへず手に取ることができない。「取り」は、どんなものでも、手に取ること。あへずは、しようとしても出来ない。「ず」は打消。幣を手に取って差上げることができない。それは、手向山の紅葉の幣にくらべてみすばらしいからである。手向山道の神を祭った山。国境を越える山に祭られている。その神に旅行者が旅の安全を祈って手向けをする、すなわち物を差上げるから出た名。ここは奈良の手向山で、山城から奈良に入る奈良山だといわれている。紅葉の錦紅葉を錦の織物にたとえている。ここは錦を更に幣として見るのであるから、散る紅葉をさしているの心そのままに従って。神は道の神。

【参考】 作者は昌泰元年十月に、宇多上皇の吉野宮滝（みや

だき）御見物の行幸に従って奈良の手向山にさしかかった。折から紅葉が美しく散っているのを見て神に捧げる幣を連想した。自分が捧げようとする幣の比ではない。手向の神ももちろんその方をとられるだろうと考えて、私の幣は差上げられないから、散る紅葉を幣として受けて下さいと、神に申し上げたのである。これは、作者の心情の問題で、紅葉の美しさを賛嘆したから考えたことで、歌の部類も旅に入っているように、神を主としたものでなく、紅葉の美しさを表わしたものである。自然を人間世界のものに比喩するのはこの時代の風である。

【参考】 出典古今集・麗旅（四二〇）、「朱雀院の奈良におはしましける時に手向山にてよめる」。古今六帖・四、「たむけ」。新撰和歌・三、「別旅」。作者菅原道真（八四一—九〇三）。菅家はその尊称。参議是善の子。漢学者で、漢詩人として優れていた。菅家文章、菅家後草の詩文集、類聚国史（史書）新撰万葉集（有名な歌人の歌を集めて、漢詩を添えたもの）等の著がある。宇多天皇の信任を得て、昌泰二年右大臣になったが、左大臣藤原時平のざん言（げん）のために太宰権帥に左遷されて、そこで没した。歳五十九歳。

高野山宝積院蔵



二五
 名にしおはば逢坂山のさねかづら
 しられでくるよしもがな
 三条右大臣 人に



逢うという名を持っているなら、逢坂山のさねかづらは、他の人に知られないでた繰り寄せるように、人に知られないで来て逢う方法があればよいがなあ。

語釈

名にしおはば名を持っているなら。「し」は強意の助詞。「名におふ」は、名を持っている意。逢坂山京都から大津へ出る国境の山。逢うという名を持っている山関所があった。さねかづら蔓草、五味子という。「さね」は「さ寝」の意をかけて、逢うの縁語。人に知られて「人」は他人。「れ」は受身、「で」は打消中止の助詞。くる蔓を繰ると、来るをかけている懸詞。来るのは女の家。初句から三句までは「くる」の序詞で、上から繰る、下へは来るでかかると。よしもがな「よし」はたてで、方法。「も」は強意の助詞。「がな」は願望の助詞。

語釈 女の家に行くといわないで、来るといっているところを見ると、女に贈った歌である。すると、さねかづらに付けてやったのであろう。寝るという意も持っているさねかづらだが、逢坂山のは、逢う意を持っている山のものだから特に意味が深い訳である。それを比喩に使って、逢うために、

他の人に知られないで来る方法が欲しい、ということも、親をも含めて、他の人に知られないで逢う方法を考えてくれということに暗にほめかけたのである。平安朝時代の夫婦関係は男が女の家に通うことが多かったのだが、女が承諾すれば親に隠れてでも逢うことができたのである。この場合は、その点がまだ不十分だったようである。その点を十分手配してくれと暗に希望しているのである。逢うは当時の意味では、男女関係を意味している。当時としては歌に付けてやる物を比喩に使う形通りの歌である。

参考

出典後撰集・恋三(七〇一)、「女のもとにつかはしける」。古今六帖・六。作者藤原定方(六三三)。三条右大臣というのは、右大臣の位にいて、三条に家があったからである。内大臣藤原高藤の二男である。延喜九年参議、延長二年右大臣になった。三条右大臣集があって他にも勅撰集の歌がある。贈従一位。承平二年、歳五十七で没した。参考「さねかづら」は「さなかずら」・「まさきのかずら」・「美男かずら」などともいって、山野に自生する常緑の蔓性の植物で、夏になると淡黄白色の花が咲く。

小倉山峰のもみぢ葉心あらば
 たびのみゆき待たなむ
 眞信公

拾遺集によると、亭子院(ていじのいん)、すなわち宇多法皇が大堰川に御幸(みゆき)になつて、天皇も行幸になるべき美しい所だと仰せられるので、帰つて、この事を天皇に申し上げようとして詠んだ歌である。天皇の行幸をお願いするについても、紅葉が散ってしまったのでは困る。そこで、紅葉に同意を求めたのである。「心あらば」というのは、この事柄は風流に属するものだからである。散らないでほしいという前提として、「心あらば」と、風流の上から同意を求

語釈 小倉山の峰のもみぢ葉よ。優雅な心があるならば、もう一度の天皇の行幸を待って、それまで散らないでいてほしい。

もみぢ葉峰の紅葉は最も目に立つものだから山の代表としてそれを描えている。心あらば「ば」は仮定の助詞。「心」は情趣を知る心。いまひとたびの「も」一度の。「いま」は、副詞。みゆき天皇の行幸。天皇は醍醐天皇である。待たなむ「なむ」は願望の助詞。これは未然形に接続する。待ってほしい。散らないでほしい意が含まれている。

参考 出典拾遺集・雑秋(一一二八)、「亭子院の大井川に御幸ありて、行幸もありぬべき所なりと仰せ給ふことよし、奏せむと申して(小一条太政大臣)。拾遺抄雑上。大和物語上。大鏡下。古今著聞集、十四。作者藤原忠平(六六一) 齋公。眞信公は死後の名。関白基経の四男、時平の弟である。承平六年太政大臣、摂政関白に上り、歳七十で没した。菅原道真と親しく、兄時平のざん言(げん)によって道真が流されたからと交際を続けていた。歌人としても才能のある人であった。参考忠平の歌は後撰和歌集が初出で六首ある。新古今集には一首等勅撰集には十二首ある。後撰集では太政大臣の名である。同集秋上八師尹朝臣のまだわらはにて侍りける時床夏の花を折りて持ちて侍りければ此花につけて内侍のかみの方におくり侍りける「撫子は何れともなく匂へども後れてさくは衰れなりけり」同集、賀・八題しらず「今年より若菜にそへて老の世に嬉しき事をつまむとぞ思ふ」。



二七
 みかの原わきて流るるいづみ川
 ぎとてか恋しかるらむ
 中納言兼輔



口説 みかの原をかき分けて流れる「いづみ川」よ、その川の名のように、あの人を何時見(いつみ)たというのでこんなに恋しいのであろうか。見もしないのに。

話釈

みかの原(瓶)の原。京都府相楽郡。わきて川分けて。「湧き」を懸けて泉川の縁語にしている。いづみ川(泉川)。相楽郡を流れ、その北岸がみかの原になる。後には木津川と呼ぶようになり、現在の木津川である。ここまでは、「いつみ」に同音異義で懸る序詞。いつみきとてか何時見たというのか。「き」は過去助動詞。「と」は伝聞助詞「て」も助詞である。「か」は疑問助詞。恋しかるらむ(相手の人が恋しいのだろう。「恋しかる」は、形容詞「恋し」の、カリ活連体形である。「らむ」は推量助動詞。

鑑賞

三句までは、同音異義で「いつみ」を引き出すための序詞になっているが、この調べが美しく流れ、同音の繰返して突然意味を転じるために、その間の変化が自然に感じられ、従って、現実感がまして、泉川を眺めながら、ふとまだ見ぬ人を恋しく思い出し、遂げられぬ恋の苦しさを感じて自省するという情景を想像させる。この歌は、まだ見ぬ恋の苦しさを反省的に表出したもので、その叙情を美しくするため

に、自然の情景を序詞として使った歌である。技巧としては序詞が中心になっていて、それが見せ所になっている平安朝的短歌であるが、形が単純で、調べが流れるように美しく、主意への転じ方も、同音の繰返しであるために美しく、技巧の不自然さを忘れさせるものがある。

参考

出典(新古今集・恋一(九九六)、「題しらず」。古今六帖・三。兼輔集にはないので、契沖は兼輔の歌ではないだろうといっているが、勅撰集の撰者はそれと認めているのだから根拠はあるのだろう。作者(藤原兼輔(七七一-七三三)。藤原冬嗣の曾孫で紫式部の曾祖父。利基の子。延喜二十一年参議、延長八年中納言、右衛門督を兼ねた。承平三年、歳五十七で没。加茂川堤の近くに住んでいたので堤中納言と呼ばれた。三十六歌仙の一人で紀貫之とも親しく、兼輔集がある。参考(兼輔の歌では「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」(後撰集・雑一)。A序詞についてV||序詞はある語を引き出すために使われるもので、五音のものを枕詞といい、五音以上のものを序詞という。万葉時代も多く使われたが、平安朝以後は更に巧妙になった。

口説 山に近い村は、冬は特にさびしさがひどくなったよ。来る人もなくなり、草も枯れたので。

語釈

山里は(山近くの村。「は」は他と区別して強い助詞。これは都と対照していつている。冬ぞ(冬を強調している)、他の季節とは違って特別であることなっている。まさりける(「ける」は「ぞ」の結びで、過去で感嘆を含んでいる助動詞。人目(人の見る目。かれぬと思へば(「ぬ」は完了の助動詞。「かれ」は、「離(か)れ」と「枯れ」の懸詞。人目も離れ、草も枯れ。人目が離れるのは人が来なくなったことをいつている。「思へば」は、本居宣長の説によると、添えただけで、特別の意味はない。

鑑賞

冬になると、山村には、たずねて来る人もなく、草も枯れてしまうので、たださえさびしい村はなお一層さびしくなってしまう。山村に住んでいる人が、冬になってさびしくなった状態を叙情的にいつたのである。「冬ぞさびしさまさりける」は叙情の頂点で、観念のない方は古今集時代の特長の一つである。四、五句はさびしくなった理由をいつたので、これも観念的な表現にいつている。そうして見れば、この歌は全体が観念的な叙情からいつている。また、さびしさ

に理由を考えると、これは理知的な面を表わしているのだが、観念的な表現からは自然に表われる現象である。古今集時代の叙情は、観念がリズムによって表わされたものといえる。

参考

出典(古今集・冬(三一五)、「冬の歌としてよめる」。宗于朝臣集「歌合に」、古今六帖・二、「山里」。同六・「冬の草」。和漢朗詠集下巻、「山家」。作者(源宗于(光孝天皇の皇子是忠親王の子で臣籍に下って源氏の姓を賜った。兵部大輔、右馬頭、右京大夫等になって、天慶二年(九三九)没した。三十六歌仙の一人であり、宗于朝臣集がある。寛平御時后宮歌合の作者も勤め、大和物語にはこの作者の説話が書かれている。参考(宗于集は全歌数二十九首で、中に、他人のものが三首ある、全く集というに値しない集である。しかし、この少数の歌はこの作者の特色を伝えている。「東路のさやの中山中々に逢見て後ぞわびしかりける」「我が恋の数にしたらば白妙の浜の真砂もつきぬべらなり」(はらからなる人の恨めしきことある折にV「我妹子に相坂山のしの薄ほには出でずも恋ひ渡るかな」「年月は昔にあらず成りゆけど恋しきことは変らざりける」。

山里は冬ぞさびしきまさりける
 草もかれぬと思へば
 源宗于朝臣

二八

筆為泉冷



二九
心あてに折らばや折らむ初霜のおきま
どはせる白菊の花
凡河内躬恒

冷泉為恭筆



【口訳】 あて推量に折るならば折ろうか。初めての霜が置いて、ある所を分からなくしている白菊の花を。

【語釈】 心あてに「は」は「は」きり分らないのであて推量に。

折らばや折らむ「は」は假定、「や」は疑問の各助詞。「む」は意志の助動詞。あて推量でもかまわないから折るといいうなら。正確に折ることは不可能ということをも前提にしている。初霜「今年初めて降った霜。珍らしい意味が含まれている。

おきまどはせる「おき」は初霜が置いて、「せ」は使役助動詞。「り」は完了助動詞。「まどは」は、まどうで、分らない意。置いて分らないようにしている。白菊の花「は」または「を」が省略されている名詞止め。

【鑑賞】 菊の花を折ろうと思つて庭に出て見ると、今年初めての霜が置いてある。そして、そこら一杯に置いてあるので昨日まで咲いていた白菊の花がどこにあるのか分からない。そこで、正確には到底折られないけれども、あて推量にでも折つて見ようかというのである。「おきまどはせる」というのはもちろん誇張である。しかしその誇張は、霜と菊の花を一つにして美しくしようとするためである。そして、それは、白菊がいかに白い色であるかを強調している。「心あてに折

らばや」というのもそれに続く誇張である。耽美のためには誇張を辞しないのが古今集時代の風である。誇張は耽美のためと、もう一つは知的な要求を満足させるものである。当時の歌人は、誇張が奇抜であることを競つた面もあったのである。それは、上流貴族に流行していた時代の風である。歌が一面においては趣味的に考えられて来た証拠である。この一首はよく調べの張った歌である。

【参考】 出典「古今集・秋下(二七七)、「白菊の花をよめる」。

古今六帖・六、「きく」。新撰和歌・一「春秋」。和漢朗詠集、上秋、「菊」。作者「父も祖先も不明。生年、没年も不明。甲斐少目(しょうさかん)、延喜七年丹波権大目、延喜十一年和泉大掾(だいじょう)となり、位は六位。微官である。古今和歌集撰者の一人。貫之と並んで、当時一流の歌人である。三十六歌仙の一人。家集に躬恒集がある。勅撰集には百九十四首とられている。参考「誇張の歌を古今集から一、二抜いて見る。「袖ひぢてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ」(紀貫之)「雪のうちに春は来にけりうぐひすの水れるなみだ今やとくらむ」(二条の后)「花の香を風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふるべにはやる」(紀友則)。

有明のつれなく見えし別れより
りうきものはなし
壬生忠岑

三〇

【口訳】 有明の月が、夜が明けても、夜にかまわずに空に残つて薄情な様子をしているように、私に辛く当たった女と逢わないで別れをした時から、その時の様子を思い出しては、夜明けほど辛いものはない。

【語釈】 有明の「有明」は、有明月で、夜遅く出て夜明けまで残っている、十六日以後の月。「の」は、の如く。比喩を表わす。つれなく見えし「薄情に思われた。「つれなし」は連(つ)れなしの意で、相手の意思に同意しないこと、薄情である。「し」は過去の動助詞。連体形で「別れ」にかかる。有明月がつかれないとは、夜明けまで残っていることを表わす。それは、夜の意思は従わないからである。人の方では、逢いに来た男の意思に反して女が逢わないことをいう。別れよりの「別れ」は、名詞。別れをした時から今まで。暁ばかり「夜明けほど。暁は男が女と別れて帰る時刻だが、この場合は、女を口説いていたがいうことをきかず、夜明けになつてしまつて、もうこれ以上いることが出来なくなった時刻である。うきものはなし「うき」は、辛い。

【参考】 男は、恋している女に求婚するために逢いにいった

が、どうしても逢つてくれず、家の前に永く立っているうちに夜明けになってしまった。夜明けは女の家に泊っている男たちも帰る時刻で、もうこれ以上立っていることができないので女の無情を恨んで帰つて来た。その辛さがいまだに忘れられず、夜明けになると女の仕打ちを思い出してぞつとする。平安時代は男が直接女の家にいって求婚したのである。それは夜で、侍女たちを味方につけて、その手引きで家に入り逢うので、親にも許しを受けなかった。男女双方の話がついてから親の許しを受けるのである。そうした結婚様式を背景にした歌である。有明月は比喩であるが、別れた時にそれが出たのであろう。そうでなくても、実際出ていたような気分を起こさせる。有明月は白く冷たく、あわれで、女の状態を気分として感じさせる。「別れより」は長い時間を歌に与えている。歌は平安朝式に説明的叙情的であるがその割りに情景が思い浮かべられ、物語的な興味を感じさせる。

【参考】 出典「古今集・恋三(六二五)、「題しらず」。古今六帖・一「有明」。古今六帖・五。新撰朗詠集、下雑、「暁」。作者「安綱の子。忠見はその子。摂津大掾となり六位。古今集撰者。三十六歌仙の一人。忠岑集がある。

冷泉為恭筆



朝ぼらけ有明の月とみるまでに
 吉野の
 里にふれる白雪
 坂上是則

雪の吉野<西行物語絵巻>



夜明けに外を見ると、有明の月の光が照っているのかと思うほどに白く、吉野の里に降っている白雪であるよ。

朝ぼらけ夜明け。このあとに、見る意味が省略されている。それは「みるまでに」の語からも考えられる。

有明の月夜明けまで残っている月。みるまでに「見る」は思う動作をとまなう場合は、思うと同じ意味に使われる。「までに」は、程度に。助詞。吉野の里奈良県吉野山の麓の村。現在、吉野郡吉野町。ふれる降っている。「る」は完了の助動詞。これは夜中に降っていたのである。白雪最後に感動の「よ」が省略されている。

作者が吉野へ行った時の実感を歌っている。夜明けに目が覚めて外を見ると、明るくて、有明の月が照っているのかと瞬間思った。ところが、もう一度よく見るとそれは雪であった。それは夜の中に積もったのである。白雪よ、と感動的にいっているのは、一夜の中に降った雪に対する驚きの表白である。有明の月と間違えうほどの状態は、朝早く、まだうす暗い頃を暗示し、また、その光は淡く、さびしく、美しいものであるから、雪がそのように美しいものであることを

暗示している。実情に即してはいるが、「見るまでに」と主観的な語を加えているのはこの時代の特徴を見せているものである。微細な面と主観性と、合わせて実感性を持った歌である。古今集の題詞によると、大和の国に行った時に、雪が降ったのを見て詠んだ歌である。

出典古今集・冬(三三二)、「大和の国に罷れりける時に雪の降りけるを見てよめる」。是則集。古今六帖一、「雪」。元永本古今集等には四句が「吉野の山に」となっている。作者父は、坂上田村麿の曾孫、好蔭。後撰集の撰者坂上望城はその子である。醍醐、朱雀の二代に仕え、官は延喜八年大和権少掾、同大掾、大内記を経て五位下加賀介。亭子院歌合に作者として参加し、三十六歌仙の一人では是則集がある。蹴鞠(けまり)に巧みでもあった話が伝わっている。参考八奈良の京にまかりて宿る所に「三吉野の山の白雪積るらし故郷寒くなりまさるなり」(古今集、冬)。この歌は前の歌に続くものである。八亭子の院の歌合、柳「浅緑そめてみだれる青柳の糸をば春の風やとくらむ」(是則集)「我が恋をくらぶの山の桜花まなく散るとも数はまさらじ」(同集、恋)。

山川に風のかけたるしがらみは
 流れも
 あへぬ紅葉なりけり
 春道列樹

冷泉為理筆



山を流れる川に、風が作ったしがらみは、流れることができない紅葉(もみじ)した葉であるよ。

山川やまがわと連濁にするのがよい。山を流れる川である。風のかけたる「かけたる」の「たる」は完了助動詞で、「かけ」は橋を架ける等と同じく、しがらみを作ること。風がかけるといふのは、風が紅葉を散らして、その紅葉がしがらみになるからである。しがらみ川の中に棒ぐいを打ち、竹や柴などをかけて水が流れないようにするもの。流れもあへぬ「も」は強意。「あへ」は強いてする意。「ぬ」は打消助動詞。「あへぬ」は出来ない。

これは志賀山の山越えをする時に詠んだ歌である。志賀山の中を流れる川に柵(しがらみ)が作ってある。それは本当の柵ではなく、流れることができないでたまっている紅葉であることが分かった。そして、それは風が運んだものであることを感じた。このように実感的にしているけれども、これは誇張で、実際は、水中にたまっていて、水をせいでいるように見える落ち葉を見て、柵だと解釈したのである。そうした自然の人間の解釈が風流だと考えられ、誇張する点は

機知だと考えられたのである。そうした理知的解釈に従って、歌の表現も全く説明的である。「風のかけたる柵は」といい、「紅葉なりけり」と更に説明する。実感の歌としては全く意味はないが、そうした耽美的な解釈としては一種の興味を感じることができ。

出典古今集・秋下(三〇二)、「志賀の山越にてよめる」。志賀山は京都から大津へ出る時に越える国境の山である。北白河から出る道である。新撰和歌、「春秋」。古今六帖・三。作者主税頭新名(ちからのかみにいな)の長男。延喜十年文章生。延喜二十年喜岐守。勅撰集では古今集に三首、後撰集に二首あるだけで、伝えられている歌が非常に少ない。参考古今集にある他の二首は、八年のはてによめる「昨日といひけふと暮して明日香川流れて早き月日なりけり」(冬歌)八題しらず「あづさ弓ひけばもとすゑわが方によるこそまさる恋のころは」。前の歌は、「昨日といひ、今日といひて日を暮らして、次に来る日は明日といって迎えるその名の通りの明日香川のように、流れて早く過ぎ去る月日である」後の歌は、「夜は恋心が一層つる」の意、この二首共に、技巧的な歌である。

三三
 ひさかたの光のどけき春の日に
 静心な
 く花のちるらむ
 紀友則



冷泉為理筆

口歌 日の光がのどかにさしている春の日なのに、落ちついた心もなく、なぜ桜の花は散るのであろうか。

語釈 ひさかたの日は、空、雨などという天体に関するものの枕詞。ここは、枕詞に続く「日」が省略されている。光は日の光。のどけき形容詞「のどけし」の連体形。春の日に春の日なのに。静心静かな落ちついた心。花の桜の花が。花は桜の花をさす場合が多い。散るらむこの「らむ」は疑問の意をとまなう推量の助動詞で特別な使い方。上に疑問助詞が省略されたと見れば連体形の結びとなる。平安時代独特の使用法である。

筆賞 春の一日、外に出て見ると、のどかな日が照り、桜の花が美しく咲いている。風もないのに、花がちらちらとせわしく散っている。作者はそこで、なぜあんなに急いで散るのかと疑問を起した。花は自分自身で急いで散ってゆく。静心なくは擬人化したいい方である。桜の花の散るのを惜しむ心から疑問を起しているのだが、四、五句の沈んだ調子からは、平安朝の人が捕えられかけた、無常思想の陰が感じられる。この感情は理知から出たものである。作者はもちろん、花の美しさに捕えられているが、それを讚美しないで、

沈静な気分で考えこんでいる。平安朝文化の進展と共に、人間の心にきざして来た、反省と思索である。この一首は、作者の反省があるために、万葉的写実主義から脱け出て、古今集時代の新歌風の歌としている。この歌は、理知的反省によって生きているものであるが、三句までの実景描写は、この歌を感性的なものにしている。この歌の理知は軽薄な機知ではなく、感動的である。また全体の調べも沈静で美しい。

参考 出典古今集・春下(八四)。「桜の花の散るをよめる」。友則集。「寛平御時后宮の歌合に」。古今六帖・六。作者は友の子。貫之のいとこにあたる。土佐掾、小内記、を経て延喜四年に大内記となる。貫之等と共に撰者を命ぜられたが、完成する前に没した。没年不明。寛平御時后宮歌合、是貞親王家歌合、寛平菊合等の作者。三十六歌仙の一人。友則集がある。参考藤原敏行の哀傷歌を詠んだ友則は、貫之と壬生忠岑に詠まれている。友則が身まかりける時よめる「あす知らぬ我が身とおもへど暮れぬまのけふは人こそ悲しかりけれ」(貫之)「時しもあれ秋やは人のわかるべきあるを見るだに恋しきものを」(忠岑)。

たれをかもしる人にせむ高砂の松も昔
 の友ならなくに
 藤原興風

冷泉為理筆



口歌 古くからの友人はみな亡くなってしまった今では、誰を私の知っている人にしようか。命の長い高砂の松も昔からの友ではない事だ。

語釈 かも「か」は疑問、「も」は感動のそれぞれ助詞。しる人「知」っている人。知人。せむ「む」は意志の助詞。高砂の松は高砂の尾上(おのえ)の松ともいう。高砂は播磨国(兵庫県)で、加古郡にある。高砂は砂が高く積もったものという。それが地名になった。古今集序には、高砂、住吉の松とあり、当時有名であつたらしい。昔の友は昔からの友。ならなくに「なら」は指定の動詞。「なく」は、打消助動詞「ず」の未然形の古形「な」に、名詞化する働きをもつ「く」が付いたもの。「く」は「あく」が縮まったものといわれる。ないことだ、の意。「に」は感動の終助詞。

鑑賞 老人になって、いままでの知人も死んで少なくなり、交際も少なくなつて新しい知人もできなくなつたので、孤独になつて来た。友人がなくては心細い。誰か友人がほしいと思ふ。しかし、そうた易く得られるものではない。そこで考えたのが高砂の松である。これは松であるから長命である。

自分といっしょに長い間生きていくけれども、自分が知って友となつたのは最近であつて、昔からの友ではない。この松は擬人化されている。だから、長命の者だからとて、昔からの友というのではない。この松は、長生きしている者でも、古くからの知人でないということの、一つの例として出されたものである。この歌は否定的な、暗さを持っている。老人の悲哀が哀調をもつて歌われている。技巧は「高砂の松も昔の友ならなくに」であつて、自分が長生きしていること、知る人は古くからの知人を意味することを暗示している。

参考 出典古今集・雑上(九〇九)。「題しらず」。興風集。新撰和歌・四。古今六帖・六。和漢朗詠集・下、雑。作者は相模掾(さがみのじょう)道成の子。歌経標式の著者藤原浜成の曾孫。相模掾、治部少丞を経て延喜十四年下総大掾となる。「院の藤太」と呼ばれて歌だけでなく、管絃にも優れていた。寛平御時后宮歌合、亭子院歌合等の作者で、三十六歌仙の一人。興風集がある。参考興風の歌「さく花は千ぐさながらにあだなれど誰かは春を恨みはてたる」(古今集、春歌下)「いたづらに過ぐる月日はおほかれど花みて暮す春ぞすくなき」(古今集、後の五十賀屏風歌)。

三五
人はいさ心も知らずふるさと
は花ぞ昔の香ににほひける
紀貫之



長谷寺
奈良県初瀬町にある

人の方はさあ、変わっていないかどうか、心の中は分かりません。ところが、故里(ふるさと)の方は、変わらな

い梅の花が咲いて普通におっていますよ。

人は「は」は区別する助詞で、人間の方は。いさ「は」さあ、どうだろうかと疑う副詞。知らずにかかる。心もしらず「も」は強意。知らずは、分らない意。ふるさと「は」は「人」と区別する意で、「人は」に對している。故里は、ここでは以前にいた地。すなわち度々泊ったからである。花ぞ「古今集の題詞によると、梅の花を折って出したのだから桜の花ではない。昔の香に「普通」のにおいで。

この歌は、古今集によると、作者が、初瀬観音に詣

る時はいつも泊る宿に、長い期間をおいて行ったところが、このように宿は変わらずにあります。(それだのあなたは宿がなくなつたように来てくれない意を含む)といったので、庭の梅の枝を折って、この歌を書いた短冊を結んで送ったのである。これは贈答の歌で、宿の主人の言葉に答えるための歌である。主人は作者が来ないことに對する怨みを婉曲にいうつもりでわが家を材料にしていた。作者は宿のある故里の

土地を材料にして、これにいい返した。贈答の歌は、一定の型が出来上っていて、相手の言葉を逆にとつて、いい負かすことになつていた。それが上手に出来ているのが達者の歌とされてきた。作者は、待っていたという主人の心を疑う形にして、「いさ」といい、本心は昔と変わらないでいるかどうか分らないといい、(断定しないのは婉曲のためである)。一方の故里の方は普通りの梅の花を咲かせて普通りの親しみ心を持つていたのだという。人は主人で、故里と對照させていて、人の心は疑わしく、自然の方は変わらなないというのだから、これは人に對する皮肉である。この對照の根本には人は変わるけれども自然は変わらないとする当時の詩的常識が使われている。そうした当時の型を機知で、とっさの場合に用いた歌である。

出典「古今集・春上(四二)。「初瀬に詣づる毎に宿りける人の家に久しく宿らでほど経て後に至れりければかの家あるじのかく定かになむ宿りはあるといひいだしてはべりければそこに立てりける梅の花を折りてよめる」。作者「望行の子。晩年土佐守となつて土佐に行き、帰途の日記が「土佐日記」。天慶八年没か。古今集撰者、序文の筆者。三十六歌仙の一人。

夏の夜は、短かくて、まだ宵の状態のまま夜が明けけたが、今ごろ雲のどこに、月は泊っているのであらうか。

夏の夜は「は」は他の季節と区別していつている。夏の夜は短かい。宵ながら「宵」は今の夜の十時頃までの時刻。「ながら」は、そのまま、の意。接続助詞。明けぬるを「ぬる」は完了助動詞。「を」は口語の「が」にあたる。軽く中止する意で順接助詞。雲のいづくに「雲は空のものであって、月が隠れる場所として。その雲のどこあたりに。月やどるらむ」は現在推量助動詞。

「やどる」は、泊る意。夜が明ければ月は見えないが、これは雲の中に泊るのだと述べている。

月が面白かった夜、眺方に詠んだと古今集にある。月が面白いので、夜中も眺めていると、急に夜が明けて来た時の歌である。「まだ宵ながら明けぬるを」は、夜が短かく、宵の中(うち)だと思つている時に明けたことを示している。そこには夜の短かいことに對する作者の驚きがある。そして、月もさぞ驚いたろうが、雲のどこに泊っているだろうと想像した。「宵ながら」は、機知に富んでいるが、感覚としては

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲の
いづくに月やどるらむ
清原深養父

三六

冷泉為恭筆



実感性のあるものである。ところが、「月やどるらむ」の方は理知的に考えられたものである。月は、昼は出ないところから、旅ができないで宿泊するのだと考えた。あまりに短かく、突然夜が明けたので、雲のどこに泊まったろうかといふだったのである。理知上の機知を作者も当時の人も面白く感じたのであろう。また、夏の夜はまだ宵ながら明けたと実際の叙述をしながら、その後は全く叙情的な歌にしている。これもこの時代の風である。

出典「古今集・夏(一六六)。「月のおもしろかりける夜眺方によめる」。新撰和歌、二。古今六帖、一。新撰朗詠集、上、「夏」。作者「房則の子。清原元輔は深養父の孫で、清少納言は元輔の子。内蔵大允、延喜八年、従五位。晩年、大原の近くに補陀落寺を建てて隠棲した。参考 深養父の歌。「花ちれる水のまにまにとめくれば山には春もなくなりにけり」(古今集、春下)「神なび山を過ぎて立田川を渡りける時に紅葉の流れけるをよめる」(同、春下)「雪のふりけるをよみける」(冬ながら空より花のちりくるは雲のあなたは春にやあるらむ」(古今集、冬)。

三七
白露に風の吹きしく秋の野は
とめぬ玉ぞ散りける
文屋朝康

草葉の白露に風がしきりに吹く秋の野には、緒で貫いてとめてない玉のような白露が散っているよ。

白露は秋の野の草葉に散っている。吹きしくは頻りに繰り返される。動詞。つらぬきとめぬ玉は、穴をあけて紐を通して留めて保存しておく。紐が通してあるのが普通である。貫くは、紐で通す。「ぬ」は打消助動詞。玉磨いた石または貝。寶石である。けるは感動を含んだ完了助動詞。

秋の野に出て見ると、草木においた露にしきりに風が吹いていて、揺ぶっては露を散らしている。白露は玉のように光っている。それは一つ一つおいてるので緒でつないだ玉ではない。露は緒でつないでないので、玉のように散る。露を玉にたとえることは一般的に行なわれていた。この作者も、白露を玉にたとえ、それは緒に貫いて留めてないから散ると考えたのである。そこに新しい知的な解釈がある。もちろんそれは、白露の散る美しさを表現しようとし、四、五句は露を暗喩とした玉が散る状態をいっている。ところが、第三句で「秋の野は」と説明脈にしているの、全体が説明

的、叙情的なものになっている。誇張的な比喩を当然のものとして考えると、露の散る美しさは十分表わされている。そして、比喩である玉が、いかにも本物のもののように見える。それは、初句で「白露に」といって、露が散ることを前もって暗示しているので、玉が比喩であることがすぐに分かるが、暗喩にしてあるので、比喩が目立たず、実感のような幻想を起す。これは目立たない細かい技巧である。

出典後撰集・秋中(三〇八)、「延喜の御時歌めしければ」。ところがこの歌は、寛平御時后宮歌合にあり、新撰万葉集にも后宮御時歌合の歌として出ているので、後撰集の題詞にも疑問がかけられる。作者は六歌仙の康秀の子。寛平四年駿河掾、延喜二年大舍人大允に任ぜられた。伝記詳細は不明である。寛平御時后宮歌合、是貞親王家歌合の作者であるが、勅撰集には三首しか入集していない。参考文屋朝康の歌。A是貞のみこの家の歌合によめるV「秋の野におくしら露は玉なれやつらぬきかくるくもの糸すぢ」(古今集、秋上)この歌も、秋の野におくしら露を玉にたとえているが、「玉なれや」と全く説明にしているし、四、五句も、知的解釈が露骨で、百人一首の歌に遙かに及ばない。

冷泉為恭筆



忘らるる身をば思はずちかひてし
人の命の惜しくもあるかな
右近

あなたから捨てられる私のことは悲しく思いません。それよりも、神かけて愛を誓ったあなたの命が神罰を受けて無くなりはないかと惜しく思いますよ。

忘らるるは受身助動詞。「忘ら」は四段活用助動詞。忘れられるのは捨てられること。身をばは自身。「ば」は意味を強めている。思はずは思わない。「ず」は打消助動詞の終止形。ここで切れている。ちかひてしは誓った。神に愛を誓ったのである。「て」は完了。「し」は過去のそれぞれ助動詞。完了の助動詞の方が強意になる。人の命は誓った人の命。相手の男の命。相手の男は大和物語によると中納言教忠ということになっている。惜しくもあるかな「も」は強意、「かな」は感動のそれぞれ助詞。人の命が惜しいというのは、誓いに叛いたために男が命を失うかも知れないからである。

神に誓いをかけて愛しあった男が、心変わりして女は捨てられた。捨てられた自分を悲しいと思って相手を怨むことはせず、かえって、心変わりしたら命を取られてもよいという誓った神の罰を受けて、命を落とすはしないかと、

男の命を惜しむというのである。この歌は、二句で強く切つて、決意の程を示しており、結句は「かな」でまた強調している。その他には技巧というものを置いていず、純叙情の歌で、まことの心から出た歌である。命を落とすことに較べれば、捨てられるぐらいは問題にならない。叛いた男だが、死にはしないかと必死に思う。その心配のためには怨みも思う暇もない。捨てられても悲しくもなければ、怒りもしないのでは本当の恋ではない。その悲しみ以上の愛が相手にかけられている。拾遺集では「題しらず」とあるが、大和物語では誓った男が忘れたので送った歌になっている。相手にして送ったのでは皮肉と取られる面もある。この場合は「題しらず」で、独り自ら詠んだ歌とする方が感銘が深い。

出典拾遺集・恋四(八七〇)、「題しらず」。拾遺抄、雑下。古今六帖、五。大和物語上「男の忘れじと万の事をかけて誓ひけれど忘れにける後にいひやる」。作者藤原季繩(すえなわ)の娘。季繩は従五位上右近衛少将で交野の少将と呼ばれ、鷹匠としても有名であり、勅撰集の歌人でもあった。右近は醍醐天皇の皇后穩子に仕え、勅撰集には九首入っている。大和物語にその恋愛談が書かれている。

冷泉為理筆



あさぢふの小野おのの篠原しのしのぶれど あま
りてなどか人の恋しき

参議さんぎ等ひとし

茅(ちがや)



口訳 野原の篠原(しのはら)、その名のように、表に出さ
ないでこらえているけれど、もうこらえ切れなくなりました。
どうしてこうあなたが恋しいのでしょうか。

語釈 あさぢふの||低いちがやが生えている場所をいい、
こは「小野」の枕詞。小野の||「小」は接頭語。野にあ
る。篠原||細い竹が生えている原。ここまでは、「しのぶ
れ」にかかる序詞。篠から同音繰返して「しのぶ」にかかる
しのぶれど||「忍ぶ」は四段活用と上二段活用の二つがある
が、これは上二段の已然形である。奈良以前は「しのぶ」し
のぶ」は意味が違ったが、平安朝では区別がなくなった。こ
こは、口に出さないでこらえている。恋しい思いをじっと心
の中におさえているのであるが。あまりに||忍ぶにあま
て。忍ぶ、それ以上になって。忍びきれないで。 ながら||
「など」は疑問の副詞。どうして。「か」は疑問の助詞。
人の||自分以外の人、すなわち相手の人。

**後撰集に、人に送ったとある。恋しい思いをしてい
るが、相手の女に伝えることができないでこらえていた。と
ころが、いよいよ恋しさがはげしくなると、我慢できなくな**

ったので、この歌を女に送ったのである。相手の女に、恋心
が押さえ切れなくなった理由を訊(たず)ねている。これは、
暗に、問いかける形で激しい恋心を訴えたのである。忍んで
いたけれど、忍びきれなくなったとするとどこに激しさを見
せている。一、二句の序は、発音の上から来た飾りで、特別
に意味内容にかかわるものはない。古今集恋一に「浅ぢふの
をの篠原忍ぶとも人知るらめやいふ人なしに」とある歌を
本歌にしている。まだ本歌取りということとは本格的に始まら
ないが、これは後の本歌取りである。本歌では忍んでいるの
で、相手に分らないという嘆きであるが、この歌は、一歩
前進させて、忍び切れなくなって恋心を訴えたのである。切
ない気持のほとばしり出た歌である。

参考 出典||後撰集・恋一(五七八)、「人につかはしける」。
作者||源等。父は中納言希(まれ)。昌泰二年、近江介頼少掾。
天慶九年、参議。天曆五年、四位、同年七十二歳で没した。
参考||源等の歌。「人のもとに遣はしける」(東路の佐野の船
橋かけてのみ思ひ渡るをする人のなき) (後撰集、恋歌二)。
その他一首が後撰集に見られるだけで、歌人として知られる
ところはほとんどなかったようである。

忍ぶれど色に出でにけりわが恋は物や
思ふと人のとふまで

平たいら兼盛かねもり

冷泉為恭筆



口訳 私の恋は、人に知られないように、外に表わさない
でいるけれど、顔色に出してしまったよ。悩んでいるのかと、
他の人が問うほどに。

語釈 忍ぶれど||「忍ぶれ」は、「忍ぶ」の上二段活用已
然形。外に表わさないで隠している。色に||顔色に。わ
が恋は||歌全体にかかる主語。物や思ふと||悩んでいるの
かと。「や」は疑問の係助詞。物思うは、悩むこと。人の
||他人が。

参 恋しい心を隠して人にいわないでいたが、恋心はい
よいよ強くなって来て、とうとう悩みが顔色に現われるよう
になって、人からは、恋に悩んでいるのかと問われるほどに
なった。第四句の「わが恋は」という主格を中心にして説明
的な叙情にしているが、初、二句が感動であるために、説明
の低調から救われている。主格になる「わが恋は」を三句に
置いて、初二句と三句から五句までを倒置にしているのは作
者の技巧である。作者としては、恋心がいや増して来る辛
(つら)さを表わしたのである。しかし、「わが恋は」という、
説明的な表現をしているので気持としては余裕があり、痛切

さの薄い明るい歌になっている。拾遺集に、天曆の御時の歌
合とあり、天徳四年内裡(だいら)歌合の歌で、次に出て来る
壬生忠見の歌と合わされた。伝えるところによると、判者左
大臣実頼は判定出来ないで判を辞退した。天皇の許しがない
ので、判を大納言高明に譲った。高明も判定できないので
天皇の考えで兼盛の勝となったという。忠見は負けたことが
もとになって病死したというのである。

参 出典||拾遺集・恋一(六二二)。「天曆の御時の歌合」。
天徳四年、内裏歌合。拾遺抄恋上。新撰朗詠集下雑恋。兼盛
集。作者||光孝天皇の皇子是貞親王の曾孫。父は太宰少貳
篤行。父の時平姓。天曆四年越前権守、山城介、駿河守等を
歴任して正暦元年没した。三十六歌仙の一人で兼盛集がある。
参考||兼盛の歌人かはらの院にてはるかに山の桜をみるV
「道遠みゆきてはみねど山桜心をやりてけふは帰りぬ」(兼盛
集)八秋の夕ぐれに虫のいとあはれになくにV「浅茅生に秋の
夕暮なく虫は我がとしたりに物や悲しき」(同集)八冷泉院の屏
風V「わが宿の梅の立ち枝やみえつらむ思ひの外に君が来ま
せる」(拾遺集・卷八)八はじめて女の許にV「同じくば告げて
を恋ひむ難波めの忍びにのみは燃えて渡らじ」(兼盛集)。

四一
恋すてふわが名はまだき立ちにけり人
しれずこそ思ひそめしか
壬生忠見

口歌 恋をしているという私の評判が、もうはや立ってしまつたよ。人に知られないで、心のなかだけであの人を恋しく思ひはじめていたのに。

語釈 恋すてふ「てふ」は、といふ。わが名「私の評判。まだき」まだ時期でない時に。人知れず「他人に知られずに。「知れ」は、知られの略。自身以外の他人だから相手の女にも勿論知らせてないのである。思ひそめしか「そめ」は、始める。「しか」は過去「き」の連体形。「こそ」の結びである。

鑑賞 他人には勿論、相手にもまだ恋をうち明けず、恋心を抱き始めたばかりである。そのようなまだ恋愛が成立しない前に、恋愛をしているといううわさが立ったのである。「まだき」といい、「立ちにけり」と感動していつているのは、自身の当惑を表わしているのである。それについて、自身で反省する。評判は、全く嘘というのではない、人には知らせないでいるがその通り私は恋い始めているのだと。評判の恐ろしさを思い、今後の処置について、都合悪さに当惑しているのである。この歌は説明的な叙情ではない。実感的に、

感動的に歌われている。四、五句も、説明でなしに、実際の歌との優劣のことは、同歌合第二十番の判者の詞に書かれている。大意をいうと、私は左右の二首の歌は共に優れている。勝負をきめることができせん。天皇が両首とも賛美すべき歌だが、それでも優劣をきめよといわれるので私は大納言源朝臣に譲った。納言も判定を下さない。左右の人々は互いに自分の組の方の歌をくちさんで勝を催促するようである。私はしきりに天皇の様子をうかがう。天皇も判定を下されない。しかし、ひそかに右の歌(兼盛の歌)をくちさされたので、源朝臣がこの歌を勝にした、というのである。判者は左大臣実頼、源朝臣は源高明である。兼盛の前出の歌は、叙情的で、目立たない技巧を持った、その上、耽美的気分を持った、時代に受け入れられる歌である。この忠見の歌は感動的で実際の歌である。

参考 出典「拾遺集・恋(六二二)、「天曆の御時の歌合」拾遺抄「恋」。天徳四年内裏歌合。作者「忠岑の子。天徳二年、摂津大目(だいさかん)。三十六歌仙の一人。歌が負けたので病氣になって死んだというのは伝説にすぎない。

冷泉為恭筆



契りきなかたみに袖をしぼりつつ末の
松山波越さじとは
清原元輔

四二

口歌 あなたと私とは以前約束をしたはずでしたね、お互いにうれし涙にぬれる袖をしぼりながら、古歌にあるとおり末の松山を波の越すことのないように、決して心変わりをすることはあるまいと。

語釈 契りきな「約束したね。「な」は感動の助詞。この句は二句以下と倒置してある。かたみに「互いに」。末の松山「宮城県宮城郡の海岸にある山。

鑑賞 作意は、心変わりをした女に恨みをいう点にあり、代作ではあるが、当時有名な古歌を踏まえて調子も高く、老手の作といえる。古歌は「君をおきてあだし心をわが持たば末の松山波も越えなむ」(古今集陸奥八みちのく「歌」で、末の松山は決して波の越えない山とされており、あなたをさし置いて浮気心を持ったら、松山を波が越えるだろうと固く契る意の歌である。突然「契りきな」と初句切にして古歌を背後に置き、相手の不実を恨む気持を述べたところは巧みである。

参考 出典「後拾遺集・恋四(七七〇)、「心変わり侍りける女に、人に代りて」。作者「深養父(ふかやぶ)の孫。父は下

野守(しもつけのかみ)顯忠(あきただ)で、娘は清少納言。河内権掾(かわちのごんのじょう)などを経、肥後守となる。永祚(えいそ)二年(九九〇)、八十三歳で没。天曆年中、源順(みなもとのしたごう)・大中臣能宣(おおなかとみのよしのぶ)らと和歌所の寄人(よりうど)となり、万葉集に訓点をつけた。いわゆる梨壺(なしつぼ)の五人の一人で、後撰集撰者。拾遺集以下勅撰集に百六十首入集。後撰集時代のすぐれた代表的歌人である。参考「この歌は知人に頼まれての代作であるが、元輔のような歌に巧みな人には決して珍らしいことではなく、他にもそういう例はしばしばあったのである。この歌の根拠となっている古今集の歌は当時歌を詠むほどの人なら誰でも心得ていたもので、もとは恐らく東北地方の人の詠んだものであるが、固い誓いの歌で、近代歌人吉井勇の「君に誓ふ阿蘇の煙の絶ゆるとも万葉集の歌ほるぶとも」という歌などは一脈通ずるところがあつておもしろい。なお、末の松山は「能因歌枕」という本によると、本の松、中の松、末の松と三列の松林があつたというので、一種の防波林で、一番奥の末の松まではどんなことがあつても決して波が越えることがなかったのでこういう誓いの歌が詠まれたわけである。

冷泉為恭筆



四三

あひ見ての後の心にくらぶれば
昔は物を思はざりけり

中納言敦忠

筆家定
あひ見ての後の心にくらぶれば
昔は物を思はざりけり

あの人に逢ってちぎりを交わした後の今の深い物思
いにくらべれば、逢わなかった昔の物思はもの数の数にはい
らないくらいのもので、まるで物思いをしなかったようなも
のだったなあ。

あひ見るに単に逢い見るのでなく、お互いにちぎりを
を交わすこと。昔ちぎりを結ばなかった以前。

ちぎりを交わしてからのちの恋愛感情を歌ったもの
で、ただその人を得ようと心をくだいていた頃ももちろん苦
しい煩悶には違いなかったのだが、こうしていよいよその人
と深い仲となった今のはげしい苦悩にくらべれば、あの頃の
物思いなどはそれほど深いものではなかったというのであ
る。ちぎってからの心理は参考の項で引く宗祇の注にあると
おり、不安・懐疑・焦燥などの入りまじった深刻なもので、
単にその人を得ようと思いつめていた頃をふり返ってみて、
われながら今の苦悩の甚しさに驚いている歌で、こうした深
い恋の心理には時代を越えた真実感がある。すらりとした調
子でいて、それでいてすぐれた歌である。

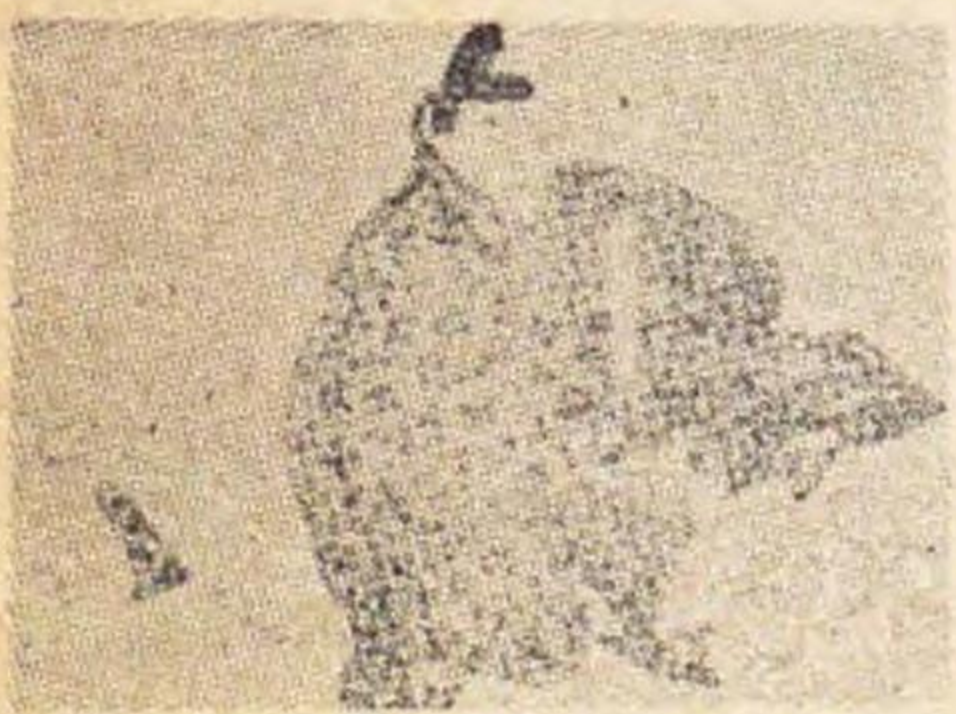
出典拾遺集・恋二(七一〇)、「題しらず」。古今六
帖には「あした」と題して出ている。これだと「きぬぎぬ」
すなわちちぎった翌朝の歌となる。作者左大臣時平の子
母は在原棟梁(むねやな)の娘だが、以前は大納言国経の妻だ
ったので、実は敦忠は国経の子であるともいう。十二歳で昇
殿、天慶六年、三十八歳で没するまでの短い生涯だったが、
歌人として楽人として知られた人。百人一首「わすらるる」
の作者右近との恋は大和物語に見える。後撰集以下勅撰集に
三十首入集。参考室町時代宗祇はこの歌に「人にいまだ
あひみぬほどは、ただいかにしてか、一度のちぎりもと思ふ
心、ひとつのおもひにて過ぎぬるを、あひみて後は、なほ其
人をおはれと思ふ心もまさり、又は世の人目をもいかなど
思ひ、また、其人の心も、いかに思ふらん、うつろひやせん
とやあらん、かくやあらんと思ふ心そへば、昔一筋に、あは
れいかなと思ひしは教ならぬことを、かくよめるなり」と
注している。類歌に「なかなかに見ざりしよりも相見ては恋
しき心ましておもほゆ」(万葉・卷十二)、「わが恋はなほあ
ひ見ても慰まらずや増さりなるこちのみして」(拾遺・恋
二)などがあるけれども、敦忠のこの歌の率直なには及ば
ないようである。

四四

あふ事の絶えてしなくばなかなかに
をも身をも恨みざらまし

中納言朝忠

筆為恭泉



この世にもしも男女相逢うということが全くないも
のとしたりば、かえて相手の人を恨みはしないし、また
わが身を嘆き恨むこともないであろうに。

絶えてしなくば「絶えて」は全然とか絶対とい
う意。「し」は強勢の助詞。なかなかに「かえて」。恨
みざらまし「恨み」は上二段活用助詞「恨む」の未然形で、
人に対してはそのつれなさを不満に思い、自身に対してはそ
のわびしさを嘆く意。「まし」は事実に対する仮定をあらわ
す助動詞。

出典拾遺集・恋一(六七八)、「天曆の御時歌合に」。
作者三条右大臣藤原定方(一名にしおはば)の子。
朱雀・村上兩帝に仕え、参議を経て中納言となり康保三年
(九六六)、五十七歳で没。笙(しょう)の名手でもあった。後撰
集以下勅撰集に二十一首入集。参考前掲の兼盛・忠見の歌
と同じく、天徳内裏歌合の折の歌で、同歌合十九番としてこ
の歌が左、元真の「君恋ふとかつは消えつつふるものをかく
ても生ける身とや見るらむ」が右として勝負を争い、結局左
の朝忠の歌が勝っている。ところで、この歌合の時この番の
題は「未逢恋」であるので、左右ともまだ逢えない恨みを主
想とした歌と考えるべきで、この歌を、逢ってからかえて
増す恋を詠んだものと見るのは当たらない。こんなに稀にし
か逢えぬのなら、かえて全く逢えない方がましなくらいで、
なまじその人と会うばかりに、その人のつれなさを身にしみ
て恨み嘆くと取るのがそれで、これは題にも添わぬし、また
元真の右の歌の内容とも違うものとなってくる。この歌は前
に述べたがように、どこまでも恋の不首尾を歌ったもので、
情の激するあまり、すべての世の男女相会をないものであ
らうと思いついたところに特色がある。

四五

あはれともいふべき人は思ほえて
いたづらになりぬべきかな
謙徳公 身の

冷泉為恭筆



私のことを気の毒にといってくれそうな人は他にあらうとも思われぬままに、こうしてわが身はあなたから見捨てられて、むなしくこがれ死にに死に果てなければならぬのかなあ。

あはれとも「あはれ」はもと感動詞。ここはかあ
いそうとかいたわしいとかいう心持。 いうべき人「べき」
は当然の意の助動詞「べし」の連体形。 おもほえて「思わ
れないで。「え」は古代における自発の助動詞「ゆ」の未然
形。「で」は「ずて」の約で、「ずして」の意。 いたづらに
なりぬべきかな「いたづらに」は、むなしく。死ぬこと。

詞書によれば、はじめ言い交わした女が後につれな
くなって全く逢ってくれなくなったという動機から歌われた
ものであることがわかる。死なばもろともと思うほどの女
でさえつれなくなって一顧もしてくれぬ上は、まして他に誰
がわが死をあわれんでくれようと、すっかり心変わりした女
を恨んだものであるが、表に恨みのことばなく、かえって感
情は浅くない—これは契沖の「改観抄」にいらるところ
であるが、今はその説に従っておいた。「あはれ」をいとし

いとかわいいたか説く説もあるが取らない。吉井勇の「百
人一首夜話」に「この歌には男の嗟嘆（ためいき）が籠って
いる」とある。

出典「拾遺集・恋五（九五〇）、「物いひ侍りける女
の後につれなく侍りて更にあはず侍りければ、一条摂政」。

作者「一条摂政藤原伊尹（これただ・これまさ）。百人一首
「小倉山」の作者貞信公（忠平）はその曾祖父、父は右大臣師
輔（もろすけ）。「君がため惜しからざりし」の作者義孝はそ
の子。天禄元年右大臣、同二年太政大臣、三年薨去。年四十
九。正一位を贈られ、謙徳公と諡（おくりな）せられた。村上
天皇が梨壺の五人に命じて後撰集を撰ばしめられた時、和歌
所の別当として編纂の指揮に当たった。後撰集以下勅撰集に
三十八首入集。 参考「作者は「大鏡」に「いみじき御集つ
くりて豊景となのらせ給へり」とあって、その「一条摂政御
集」には作者みずから大蔵史生倉橋豊景と名乗り、一種の歌
物語めいた部分がある。この歌もそこに見える。作者の他の
歌には「唐衣（からころも）袖に人目はつつめどもこぼるるも
のは涙なりけり」（新古今）「つらけれど恨みむとはた思ほえ
ずなほ行く先を頼む心に」（同）などがある。

由良の海峡を通る船頭がかじを無くして、舟がどち
らへ進むか分からないように、行く方向が分からず、どうし
てよいか分からない私の恋であるよ。

由良のと「と」は陸地が両方から迫った水路、海
峡等。由良は、紀伊（和歌山県）と丹後（京都府）の両地にある
が、好忠は丹後掾（たんののじょう）であったから丹後と考え
られる。 渡る「移動する。通る。 舟人「船頭。 かちを
たえ「かぢは、櫓・櫂（かい）の類をいう。舵とは別である。
たえは、絶えの意で、無くなる。「たえ」は自動詞であるか
ら「の」といふべきを「を」というのは一種の慣用法で、こ
の場合強意の助詞である。ここまでは比喩でかかる「行く
へも知らぬ」の序詞である。比喩でかける序詞は万葉集には
多いが、平安朝では非常にすくない。それだけ時代後れであ
る。しかし、鎌倉時代に入るとこれが象徴的用法になる。

行くへも知らぬ「行く方向が分からない。知らぬは、知られ
ない意に使われた。舟人の舟の関係から使われているが、そ
れはまた、恋の比喩である恋の道とも関係している。「も」
は強意助詞。「ぬ」は打消助動詞。

由良のとを渡る舟人かぢをたえ 行くへ
も知らぬ恋のみちかな
曾禰好忠

四六

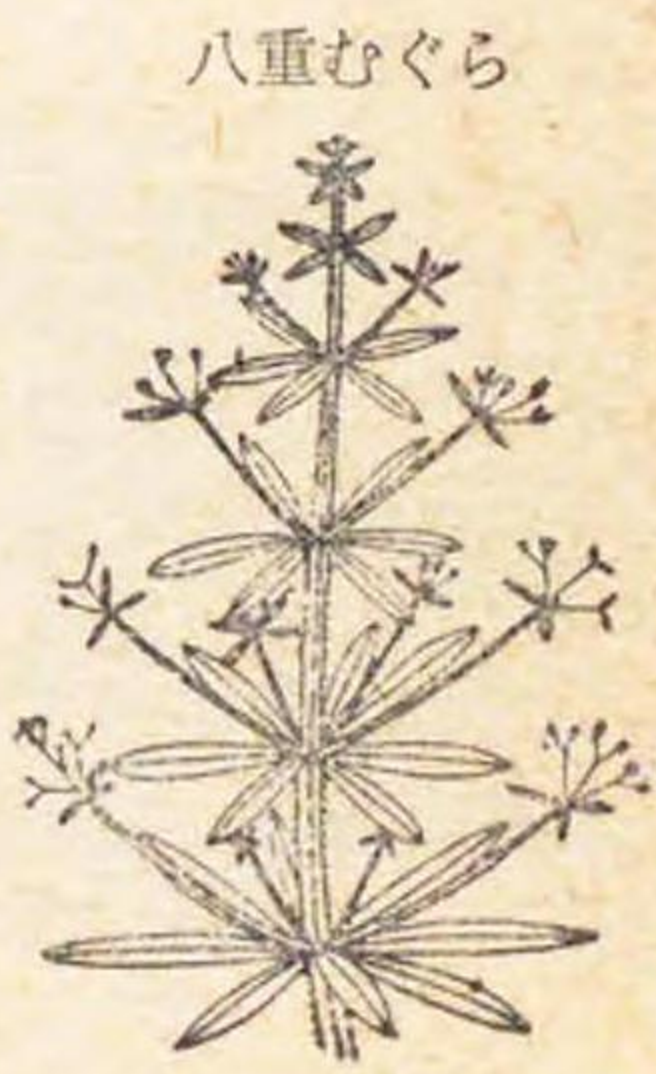
由良地方



宮津市付近の由良川の川口にある由良の門（と）を通
っていく舟を想像し、しげなどのためにかじを失ったら、も
うどこへ進むか分からなくなるだろうと考え、それは、ちよう
ど、今の自分の、どうしていいか分からずに悩んでいる恋の
ようなものだと考えたのである。そこで、この情景を比喩的
にして、序詞に使ったのである。序詞の懸り方が、古くあい
まいであるところにかえって、実景が幻想的に連想されて、
恋の気分を助けている。新古今集にとられたのは、こうした比
喩のあいまいさ、すなわち気分的な点を買われたのであろう。

出典「新古今集・恋一（一〇七二）、「題しらず」。
作者「伝記不明である。丹後掾になったので曾丹と呼ばれた。
平安朝寛和頃の人で、歌は拾遺集が初出である。三十六歌仙
の一人で好忠集がある。新古今集に十六首とられているのは、
彼の目新しい歌が注目されたのであろう。孤独で、偏狭で
あったといわれ、一般からは軽蔑されたと伝えられている。
歌は当時としては清新な風を吹きこんだが、強いて奇をてら
う点があって、難解な造語を平気で使った。他から嫌われた
のは、こういう点にも原因があった。好忠の歌「なげやなけ
蓬が柚（そま）のきりぎりす暮れ行く秋はげにぞ悲しき」。

四七
八重葎しげれる宿のさびしきに
見えね秋は来にけり
人こそ
恵慶法師



葎(むぐら)が幾重にも茂っているこの家のさびしいのに、訪ねてくる人は今では一人として見えないが、秋はやはりやって来たことだ。

八重葎ハチヘムグ 茂った葎。当時は葎は荒れ果てた家において茂るものとされていた。雑草の一種である。人こそ見えねヒト 「ね」は打消の助動詞「ず」の已然形で、上の「こそ」の結びであるが、多く逆説として下文にかかってゆく。こどもそれ。

詞書にある河原院というのは、百人一首「みちのくの」の作者左大臣源融(とおる)の教奇をこらして住んでいた邸宅で、六条坊門の南、万里小路(までのこうじ)の東にあり、池を堀り、潮水を難波の海から運ばせるなどの豪華を極めたというそうであるが、その邸宅の跡には融の没後宇多法皇が住まれたことがあり、融の亡霊が現われたという説話もある。たまたまこの作者が人々とともに訪れた時は、あるじは遠い昔に没して、すっかり荒れ果てていたものであろう。この歌は詞書にある「荒れたる宿に秋来る」という題意を具象化して強調したものであるが、人間は一時榮えてやがて衰えてゆ

くにもかかわらず、自然のいとなみは時をたがえずにめぐって来るということを対照させて、そこに感慨をこめようとしている。詞書を離れては、作者自身の家をいうともとれるが、実は眼前の河原院の有様をいっているので、歌の味わいはそこにもとづいている。

出典しゅてん 拾遺集・秋(一四〇)、「河原院にて『荒れたる宿に秋来る』といふころを人々よみ侍りけるに」。作者そ 父祖・生没未詳。花山天皇の頃の人で、一説に播磨の国の講師(こうじ)であったというから、播磨の国分寺で仏典の講義などをしていたことがあるのであろう。家集や勅撰集に載るその歌の詞書には大中臣能宣・平兼盛・源重之らの名も見えるから、相当の歌人であつたらしい。拾遺集以下勅撰集に五十四首入集。参考さんこう 同作者に「河原院にて詠み侍りける」という詞書の「草茂み庭こそ荒れて年経ぬれ忘れぬものは秋の白露(はるく)」「(続古今・秋)という歌があり、恐らくこの歌と同時の作であろう。類歌としてはすでに紀貫之に「訪ふ人もなき宿なれどくる春は八重葎にも障らざりけり(新勅撰・卷上)」というのがあり、よく似ているが、宗祇は「貫之が歌よりは猶その哀ふかかるべし」といっている。

がある。

風が激しいので岩にうちあたる波が自分だけ砕けて岩は平気で冷然としている、そのように相手はつれなく平気であるのに私だけはひとり心を砕いて思い悩んでいるこの頃であることだ。

風をいたみかぜをいたみ 「苦をあらみ」「瀬を早み」と同じ言い方。風がはげしいので意。岩うつ浪のいわたつなみ 岩を相手に、波を自分にたとえている。

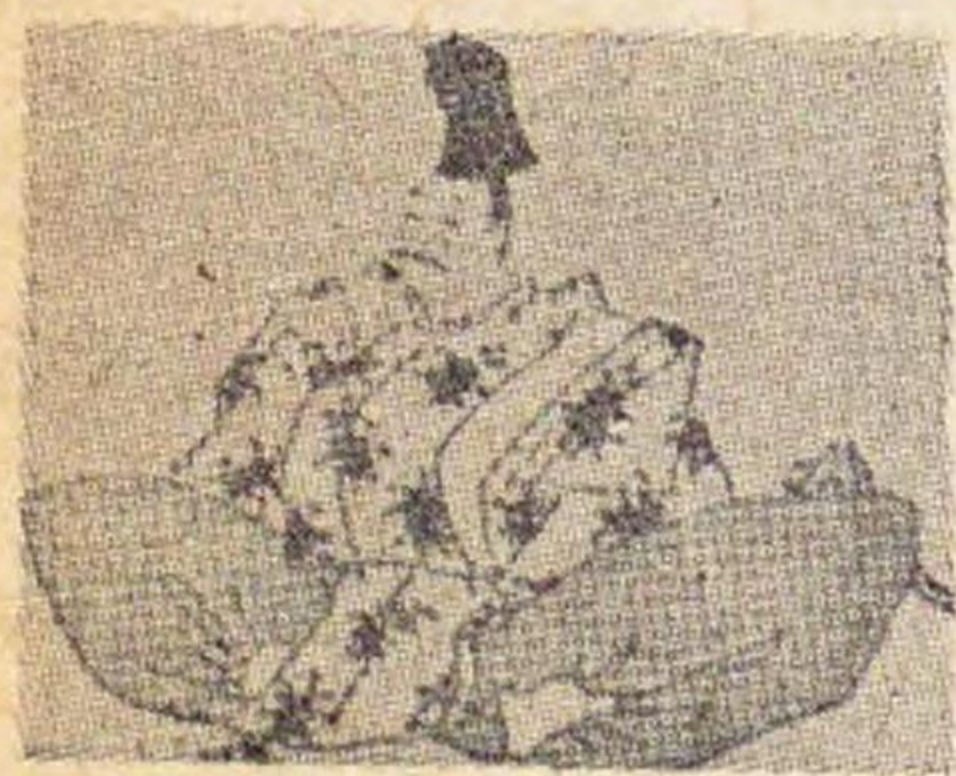
片思いの歌である。それを第一、二句を序にして、相手の冷然としているのを岩に、さまざまに心を砕き悩むわが心をむなしく打ち寄せる波にたとえたのである。「砕けて」は波のくだけのと心のくだけのとの掛けことばで、これは上の「波」の縁語となっている。巧者な歌である。契沖は「古今六帖」にある「いかにして岩打つ波の立ちかへり砕くとだにも人に知らせん」という歌をあげて、「此歌もし重之よりさきの古歌にて、本歌とせるか」といっているが、あるいはそのとおり、重之はこの古歌によつたものかとも思われる。また紀貫之の「あしびきの山下たぎつ岩波の心砕けて人ぞ恋しき(新古今・恋二)」という歌にも一部似通つたところ

出典しゅてん 詞花集・恋上(二二〇)、「冷泉院春宮(とうくう)と申しける時、百首歌奉りけるによめる」。作者そ 生没未詳。清和天皇の皇子貞元親王の孫で、従五位下兼信の子。伯父参議兼忠の養子となつた。村上天皇の康保元年(九六三)左近衛権将監(さこんえのごんのしょうげん)となり、相模権介(さがみのごんのすけ)、左馬助、相模権守等を経て、一条天皇の長保年間に陸奥掾(むつのがじょう)となり、任地で没したらしい。地方官として旅の歌を多く詠んでいる。拾遺集以下勅撰集に六十六首入集。参考さんこう 百人一首の「ながからむ心も知らず」の作者待賢門院堀川の作に「荒磯の岩にくだくる浪なれやつれなき人にかくる心は(千載・恋二)」というのがあるが、重之のこの歌をもとにしたものであろうと思われる。また、江戸時代の川柳に「くだけたも割れたも定家百に入れ」というのがある。これはこの歌の「くだけて」というのと、「瀬を早み岩にせかるる滝川の割れても末に逢はむとぞ思ふ(百人一首・七七・崇徳院)」の「割れても」というのとを、屑屋がこわれて砕けた品物や割れた品物をかき集めるかのよりに定家が百人一首にとり入れたといつて皮肉をいつたもの。

風をいたみ岩うつ浪のおのれのみ
て物を思ふ頃かな
源重之

四八

筆為泉冷



四九
御垣^{みかき}守衛士^{もりえじ}の焚^たく火^ひの夜^{よる}は燃^もえ
えつつ物をこそ思へ
中大臣能宣朝臣^{おおなかつみのよしゆのちのちのち}



冷泉為恭筆

宮城の御門を守る衛士の焚く火は、夜は燃え、昼は消えるものだが、ちょうどそのように、私は恋のために、夜は胸のうちが燃えるようで、昼はまた身も魂も消え入るようで、こうして夜となく昼となく物思いに苦しんでいることである。

御垣守 宮城の門を守護する者。衛士 諸国の軍団の兵士中、毎年交替で召し出されて宮城の外門を守護する者で、衛士府のちの衛門府に属していた。夜は燃え昼は消えつつ この句は心の状態をいう比喩で、「つつ」は動作をくり返す意の助詞。物をこそ思へ 思へは動詞「思ふ」の已然形で「こそ」の結び。命令形ではない。

初句から第四句までは衛士の焚く火のありさまを述べているに過ぎないが、結句に至ってたちまち一転してそれが恋の歌の比喩となる手際はまことに巧みである。そうしてこの比喩はまた、恋する者の日も夜も定まらぬ心の不安な状態をあらわすのに適切なものといえよう。中務集（なかつかさしゅう）に「みかき守衛士の焚く火にあらねども我も心のうちにこそ焚け」という歌があり、よく似ているが、これは

「あらねども」のあたりが理屈めいてきこえ、能宣の作には到底及ばない。

出典 詞花集・恋上（二二四）、「題しらず」。作者 神祇大副祭主頼基の子。大中臣氏はもと神祇にたずさわる家柄で、能宣ははじめ藏人所に出候していたが、後に大副祭主に進み、位正四位上に至り、正暦二年（九二一）、七十一歳で没した。村上天皇の天曆年間、梨壺の五人の一人として、万葉集訓点の事業に加わり、また後撰集の撰者に列した。五人中もっとも秀でた人物だったといわれる。百人一首「いにしへの」の作者伊勢大輔の父である。参考 この歌は能宣家集に見えたらしく、また古今六帖に作者不明の歌として「御垣守衛士の焚く火の昼は絶え夜は燃えつつ物をこそ思へ」という歌があり、途中の句に多少の違いがあるだけで、ほとんど同想である。従って、百人一首のこの歌は能宣の作かどうかは疑わしく、あるいは詞花集撰定の折に、誤まったものかとも思われる。能宣作の明らかかな歌としては「初霜も置きにけらしな今朝見れば野辺の浅茅（あさじ）も色づきにけり」（詞花・秋）「散る花にせきとめらるる山川の深くも春のなりにけるかな」（詞花・春）などがある。

君がため惜しからざりし命さへ
ながと思ひけるかな
五〇
藤原義孝



冷泉為恭筆

あなたのためには捨てて惜しくないと思っていた命までも、お逢いできた今朝はいつまでも長く保ちたいものかと思つたことです。

君がため 君は上代では女から男をさしたが、ここは相手の女をさす。この句はすぐ次の「惜しからざりし」にかかる。第四句へかけて解く説もあるが、今はとらない。命さへ 他物の物はもちろん、一番大切なわが命までもの意。ながくもがな ながは願望の助詞。

恋する人に逢うためには、何物をも捨てて惜しくない、命までも捨てて惜しくないというのは、たやすく逢うことのできない障害があつての上である。それがようやく果たされた今、恋の成就のよろこびから、かえつてこのよろこびの長くあれと望む心は、いつまでも生きていたいという願いと一転したのである。苦しい恋を経験した者のおのずからの情がすなおに詠まれている歌である。詞書によれば、いわゆる後朝（きぬぎぬ）の歌で、一夜をともに明かした朝、女のもとから帰って詠んだものであることがわかる。これより以前、万葉集には「恋ひつつも後に逢はんと思へこそ己が命を長く

欲りすれ」（卷十一）という歌があり、またこれより後、新古今集には「昨日まで逢ふに代へばと思ひしを今日は命の惜しくもあるかな」（恋三・頼忠）という歌があり、ともに類想の作である。

出典 後拾遺集・恋二（六六九）、「女の許より帰りに遣はしける」。作者 百人一首の「あはれともいふべき人は」の作者謙徳公一条撰政伊尹（これまた「これまさ」の三男、冷泉天皇に仕え、若くして右近少将となった。兄挙賢（たかかた）は左近少将であったので、兄が前少将といわれたのに対し、後少将と呼ばれた。天延二年（九三〇）庖瘡（ほうそう）をわずらい、兄は朝、義孝は夕方に相いついで病没した。二十一歳の若さであった。後拾遺集以下勅撰集に十二首入集。参考 義孝は仏教を信することすこぶ篤く、逸話が多い。眉目秀麗で才深く、常に出家の志があつたが、その子行成を見捨てがたく、世にとどまったという。また、臨終の時に「火葬にしないでほしい、また生き返りたい」と遺言したが、母が遺言を忘れたために、その夢に「しかばかり契りしものを渡り川帰るほどには忘るべしやは」と歌を詠じたという。種々の説話集に残る往生説話はなお多い。

かくとだにえやはいぶきのさしも草
しも知らじな燃ゆる思ひを
藤原実方朝臣



冷泉為恭筆

口訳 こんなに思いがれているというひとことだけでも打ちあげることができないのです。だから伊吹山のもぐさの火が燃えるように胸のうちに燃えている私の思いを、そうだともご存じないのでしょね。

語釈

かくとだに かくとだに こんなどただけでも。 えやはいぶき 伊えやはいぶ、すなわち、言うことができるものかとの意だが、「いぶ」に「いぶき」(伊吹)を掛詞にしている。伊吹山は近江・常陸(ひたち)・下野(しもつけ)にあるが、歌によく詠まれたのは下野の伊吹で、今の栃木市の北にあり、もぐさの産地だった。 さしも草 草(きゅう)に用いる艾(よもぎ)。 次の「さしも」を同音のくり返しによって言い出す序として「いぶきのさしも草」と置いた。 さしも 草(きゅう)と。 「さ」は指示する副詞。「し」「も」はいずれも強勢の助詞。 知らじな 知るまいな。「な」は感動の助詞。 燃ゆる思ひを 「思ひ」の「ひ」は「火」の掛詞で、上の「さしも草」の縁語。

箋賞

はじめて女に求婚する時の歌である。当時の貴族間では結婚前に顔をあわせることはなく、その交渉はまず贈答

の歌からはじまる。従ってその歌は技巧を凝らしたもので、この歌などはその巧みなものである。序と二つの掛詞を用いた技巧的なもので、訴えるところは「燃ゆる思ひを」知ってほしいというだけであるが、屈折の多い表現構成に作者の才をうかがうことができる。

参考

出典 後拾遺集・恋一(六一二)、「女にはじめてつかはしける」。作者 左大臣師尹(もろただ)の孫。侍従定時の子だが、叔父濟時(なりとき)の養子となった。一条天皇に仕え、従四位上左近衛中将となったが、長徳元年(元翌)陸奥守(むつのかみ)となり、同四年その地で没した。歌人として上加茂の末社にまつられている。拾遺集以下勅撰集に六十四首入集。 参考 類歌として「あぢきなや伊吹の山のさしも草おのが思ひに身をこがしつ」(古今六帖)「契りけん心からこそさしも草おのが思ひに燃えわたりけれ」(同)などがある。実方は清少納言と恋愛関係にあり、また行成と争い、その冠を叩き落し、天皇の怒に触れ「歌枕見て参れ」といって陸奥守に左遷され、任地では笠島の道祖神の前を乗馬の儘通ろうとして神罰を受け、馬に蹴られて死んだなど、さまざまの逸話を残している。

明けぬれば暮るるものとは知りながら
なほ恨めしき朝ぼらけかな
藤原道信朝臣



冷泉為恭筆

夜が明けたら、やがて日が暮れるもので、またあなたと逢うことができるとはわかっていながら、やはりあなたと別れなければならぬ恨めしい夜明け方だなあ。

語釈

なほ 朝ぼらけ 夜あけがた。

箋賞

いわゆるきぬぎぬの歌で、男が朝女のもとから帰って詠んだものである。当時の貴族間では、男が宵に女のもとをおとずれて朝は辞して家に帰らなければならなかったものである。従って夜になればまた男は女のもとへ来ることは予想されているのだが、恋する者の感情として、しばし女のところを離れたくないというのがこの歌の主旨となっているのである。理ではわかっていながら、情としてのびがたいというのである。きぬぎぬの情として、当時は一般性のある歌であったであろう。契沖は「さし当りて憂き事のあれば、後うれしかるべき事をもいはずして悲しぶ事、人の心のならひ皆然なり」といっている。

参考

出典 後拾遺集・恋二(六七二)、「女のもとより雪ふり侍りける日かへりてつかはしける」。作者 九条右大臣

師輔(もろすけ)の孫。太政大臣為光の子。はじめ摂政兼家の養子となり、後兼家および実父為光とともに先立たれ、やがて粟田右大臣道兼の養子となり、左近衛中将従四位上に至って没。二十三歳の若さであった。父の喪の果てた時に「限りあれば今日脱ぎ捨てつ藤ごろもはてなきものは涙なりけり」(拾遺集・哀傷)の一首を詠んだ。孝心深く、また歌にも秀でていたという。拾遺集以下勅撰集に四十九首入集。 参考 後拾遺集には、前に引いた詞書の下に「帰るさの道やは変る変らねど解くるに惑ふけさの淡雪」という歌が出ている。この歌も同じ折にできたものと思われる。あなたのもとから帰る道は来る時と変りはないのに、今朝の淡雪がとけるように、あなたがうちとけたので、こうして帰り路に心まどうことだの意。なお、詞花集にはこれらの歌に並んで、伊勢大輔の「今日暮るるほど待つだにも久しきにかで心をかけて過ぎけん」という歌がある。これも、今日の日が暮れるわずかの間を待つのでさえ待ち遠しいのに、今日を心にかけて来た長い間をどうして過ぎて来たのであったらうというのである。また、少し前には藤原隆方の「暮るる間は千年(ちとせ)を過ぐす心地して待つはまことに久しかりけり」という歌もある。「待つ」に松がかけてある。いずれも類想の歌。

嘆きつつひとり寝る夜の明くる間は
かに久しきものとかは知る
右大将道綱母

冷泉為恭筆



口歌 あなたのおいでにならないのを嘆き嘆き、ひとり寝る夜の明ける間はどんなに長くつらいものだと、あなたのご存じでしょうか。おわかりにはならないのでしょうか。

語釈 寝(ぬ)る||下二段活用の動詞「寝(ぬ)」の連体形。明くる間||夜の明けるまでの間。ものとかは知る||「かは」は反語。

鑑賞 詞書によれば、夫の兼家がかよって来た時に、門の扉を締めてあって、手間どってあげたら、立って待っているのに難儀だったと、取次ぎの者に言わせて来たので、返事として詠んだという歌で、即座の口頭の返事がわりの作であったことがわかる。夫のとがめた小言(こごと)に対し、その「門を遅くあげ」の語をとらえて「夜のおくる間」と言い返し、ちょうど贈歌への返歌のようにして、孤獨の恨みを述べたもので、才智のほどの知られる歌だが、歌そのものとしては無技巧のうちにかえて真情のこもった作である。

参考 出典||拾遺集・恋四(九一二)、「入道撰政まかりたりけるに、門をおそくあげければ、立ちわづらひぬといひて

言ひ入れて侍りければ」。作者||藤原倫寧(ともやす)の娘で、兄に歌人長能がいる。撰政藤原兼家の妻。その蜻蛉日記(かげろうにっき)は夫が通い始めた頃からおよそ二十一年間の、主として夫と自身との交渉を記したもので、その間、彼女は一子道綱を生んだが、夫には正妻時姫があり、道隆・道兼・道長が生まれ、なお他にも何人かの女性があって、作者の苦難の生涯を知ることができる。やがては道綱の成人によって、わずかに生きがいを見出すが、日記は一人称の小説に近く、赤裸々な告白体の自叙伝ともいえるものである。没年は長徳元年(九三〇)か。歌人としてすぐれ、また「本朝第一美人三人内也」といわれるほどの佳人であった。更科日記の筆者は彼女の姪(めい)にあたる。拾遺集以下勅撰集に三十七首入集。参考||蜻蛉日記によれば、この歌は翌朝夫に贈ったことなる。すなわち、「さればよ(思)った通りだ」と、いみじう心憂しと思へども、言はんやうも知らであるほどに、二三日ばかりありて曉方に門を叩く時あり。さなめり(夫が来たようだと)と思ふに、憂くてあげさせねば、例の家(夫が通う例の女の家)とおぼしき所にもしたり。つとめて(翌朝)、なほもあらじ(そのままますますまい)と思ひて」として、この歌が出ている。

忘れじのゆく末まではかたければ
を限りの命ともがな
儀同三司母

口歌 いつまでも忘れまいというあなたのお言葉通りの将来まではお忘れにならないことはむずかしいので、お心が変わらないでいる今日のように死にたいと思います。

語釈 忘れじの||「じ」は打消の意志を表わす助動詞で、忘れないでおこうという決心である。「じ」は終止形で、「忘れじ」は一つの完結した事柄である。「の」は、名詞や、一つの完結した事柄に付いて、次の語の連体修飾語を作る助詞である。この場合は、「忘れじ」という事柄についてのゆく末で、「忘れじ」という言葉通りのゆく末の意である。かたければ||「かたけれ」は、「難し」の已然形である。むずかしいので。「忘れじ」ということがむずかしいのである。上に「忘れじ」があるので、主語としての「忘れじ」を省略したのである。「ば」は順接条件の助詞で、理由を表わす。今日を限りの||今日だけの。命ともがな||「と」は、という状態。「も」は強意の助詞。「もがな」と続けて使われることが多い。「がな」は願望の助詞。

鑑賞 新古今集によると、中関白、すなわち、藤原道隆が通って来はじめた頃というのだから、結婚した早々、道隆に

贈ったものである。作者は道隆の妻であった。平安朝時代では、実際として、男に捨てられる妻が多かった。女はそれ程不安な地位に置かれたのである。男は、将来まで決してあなたを忘れたりしませんという。しかし、一般的状態として、女は絶えず不安な心を抱いていた。当然、将来は忘れられるかも知れないという不安が作者の心をかすめた。今が幸福であればある程、当時女性は今後に対する暗い陰を感じないわけにはいかない。将来の不幸を考えれば、いま死んでしまっただ方が幸福だと考える。贈答の歌には型があるけれども、この時代を考えると、真実味のある歌である。男からは恐らく、「忘れじ」という歌を贈ったのであつたらう。

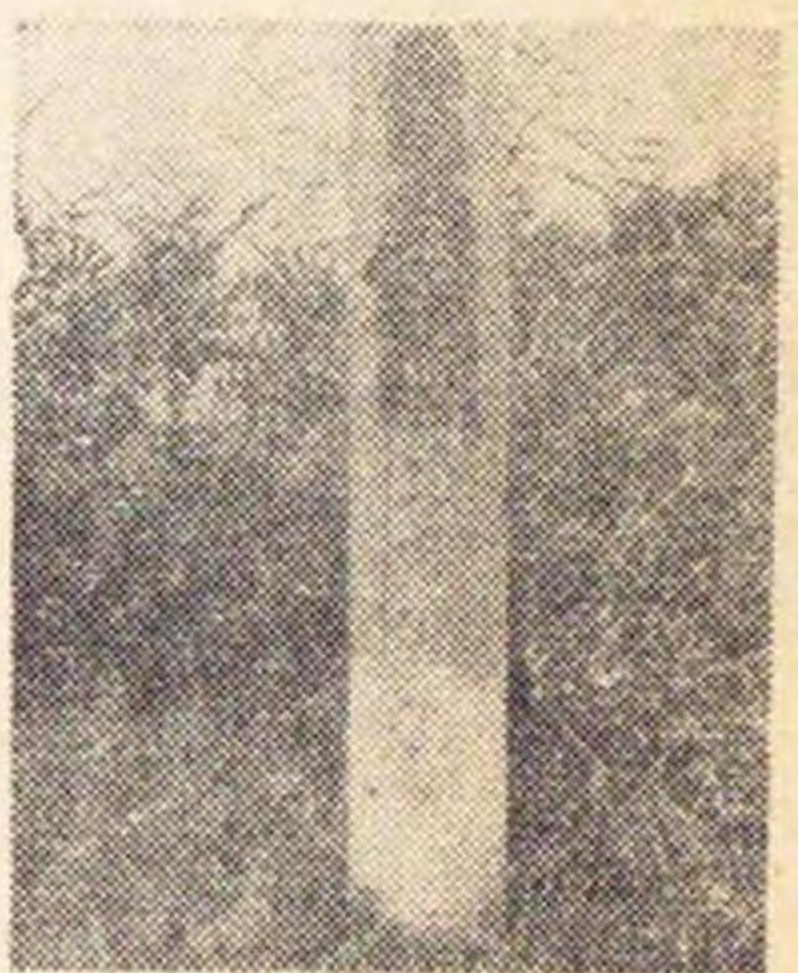
参考 出典||新古今集・恋三(一一四九)、「中関白かよひそめ侍りけるころ」。作者||儀同三司藤原伊周(これちか)の母で中関白藤原道隆の妻である。父は、従二位式部高階成忠(たかなしなりただ)。名は貴子、高内侍(こうのなし)ともいう。儀同三司伊周、太宰帥隆家、一条天皇の皇后定子を生んだ。儀同三司は準大臣の称である。伊周のために初めて作られた官名である。皇后定子一族については枕草子がよく語っている。

筆家定
忘れじのゆく末
まではかたければ
を限りの命ともがな
伊れとてまらば

五五

滝の音は絶えて久しくなりぬれど
そ流れてなほ聞えけれ
大納言公任 名こ

大沢池、名古曾滝跡



口訳 この滝の水がかれて、その音は絶えてからもう久しくなってしまうが、評判だけは流れ伝わって、今も名高きこえていることだ。

語釈 滝 詞書にある北嵯峨大覚寺の滝。 名 評判。うわさ。

鑑賞 大覚寺は洛西嵯峨にあり、もと嵯峨上皇の離宮で、上皇は滝を作り、滝殿を作らせてご覧になったという。のちに離宮は淳和天皇の皇后が勅許により寺とされて大覚寺となったところ。作者が人々とともにここを訪れた時は、滝はすでに水もかれ、その跡だけが残っていたのである。この歌は単にそのことを詠んだもので、内容に特色はないが、「滝」に対して「流れ」、「音」に対して「聞え」はそれぞれ縁語となっており、また「たき―たえて」のタ音、「なりぬれど名こそ流れてなほ」のナ音の繰り返しに一首の技巧が見られる。

参考 出典 拾遺集・雑上(四四九)、「大覚寺に人々あまたまかりたりけるに、ふるき滝をよみ侍りける」。千載集・雑上(一〇三二)、「さが大覚寺にまかりて、これかれ歌よ

み侍りけるによみ侍りける」。作者 小野宮藤原実頼の孫で、三条太政大臣頼忠の子。官位の進むこと早く、大納言に至り、四条大納言といわれた。後朱雀天皇の長久二年(一〇四二)没。七十六歳。和漢の学あり、音楽に長じ、書、歌を能くし、多芸多才の人物で、最高の教養人として仰がれていた人物である。著に北山抄・和歌九品・新撰植脳・金玉集・和漢朗詠集など多くの述作がある。百人一首「あさばらけ宇治の河霧」の作者定頼はその子。拾遺集以下勅撰集に九十二首入集。参考 此の歌は拾遺集にも千載集にも採られており、定家がそのどちらから採って百人一首に入れたかは不明。大覚寺の滝はその後何人も歌人によってその水の絶えていることが詠まれている。赤染衛門に「あせにける今だにかかる滝つ瀬の早くぞ人を見るべかりける」(後拾遺・雑四)の作がある。関白道長が大井川に川道遙を催し、作文(漢詩)・管絃(音楽)・和歌の三船を用意し、それぞれ有能の人を乗せた時、遅参した公任はすでに岸を離れた三船のどれでも寄せてほしいといひ、結局和歌の船に乗り、「小倉山嵐の風の寒ければ紅葉の錦着ぬ人ぞなき」の歌を詠んで喝采を得たが、後に「漢詩の船に乗ればも」と名譽を得たであろうに」といったという。「三船の才」といわれた逸話である。

口訳 死んでゆくであろうあの世での思い出に、もう一度あなたにお目にかかりたいものでございます。

語釈 あらざらむ 此の世にいなくなるであろうということとで、病気で死んでゆくであろうの意。この世のほかの世、来世のこと。 思ひ出 此の世に対しての思い出。もがな 願望の助詞。

純情な作である。詞書の「心地例ならず」というのは気分がひどく悪くというので病氣のことである。

鑑賞 詞書によれば、病気が重くなって、もはや死を覚悟していたころの歌で、末期(まつご)の願いをこめて、恋する人にあてた作であることがわかる。いつのころのことかもわからず相手の男が誰であるかもはっきりしないが、その人ははじめの夫和泉守橘道真ではなかったろうか。純真で、素朴で、それでいて、しみじみとしたあわれの深い歌である。同じ後拾遺集には同じ作者の「黒髪の乱れも知らず打ち伏せば先づ掻きやりし人ぞ恋しき」という歌がある。これは、黒髪の乱れたのも気づかず泣き伏していると、黙ってまずその乱れた髪を掻きやって直してくれた人の恋しいことよという意味で、この歌での恋しい思い出の人というのも、初めて逢った男道真であろうかと思われる。百人一首のこの歌とともに

参考 出典 後拾遺集・恋三(七六三)、「心地例ならず侍りけるころ、人のもとにつかはしける」。作者 越前守大江雅致(まさむね)の娘。はじめ和泉守橘道真の妻となり、小式部内侍(こしきぶのいし)を生んだが、後離別。冷泉天皇第三皇子為尊(ためたか)親王に愛されたが、親王没後はその弟敦道(あつみち)親王に愛された。和泉式部日記はこの弟宮との事情を記したものだ。そしてこの弟宮もやがて世を去り、道長に召されて一条天皇の中宮彰子に仕え、そのころ伊勢大輔や紫式部らと歌の贈答が見られる。宮仕中に藤原保昌(やすまさ)と結婚、夫に従ってその任地丹後や大和に下ったこともある。晩年は小式部にも先立たれ、保昌とも離れてわびしい生涯を終えたいらしい。拾遺集以下勅撰集に二百三十八首入集。参考 家集「和泉式部集」には「憂きことも恋しきことも秋の夜の月には見ゆるこちこそすれ」「夕暮は物ぞ悲しき鐘の音を明日も聞くべき身とし知らねば」「つれづれと空ぞ見らるる思ふ人あまくだり来むものならなくに」など、自由清新な歌が多く見られる。

五六

あらざらむこの世のほかの思ひ出に
ひと度の逢ふこともがな
和泉式部 今

冷泉為恭筆



めぐりあひて見しやそれともわかぬまに
雲がくれにし夜半の月かな

紫式部

石山寺蔵



【口訳】 思いがけなく出会って、形を見たのかどうか分らないうちに、雲の中に隠れてしまった夜中の月のように、少し振りに出合って、お姿を見たか見ないか分からないうちに、早くもお帰りになってしまうたあなたですね。

【語釈】 めぐりあひては久し振りに偶然に出会うこと。見しやそれともは疑問の係助詞で、結びの「なる」が省略されている。「と」は結果を示す助詞。「も」は強意の助詞。わかぬまには区別する。「ぬ」は打消助動詞。「まに」は「間に」。時間の短かさを具体的にいつている。雲がくれにしは完了、ここは強意、「し」は過去の各助動詞。雲にかくれた。比喩された人間の方では帰っていった意。夜半の月夜半は現今の十時以後から夜明けまでをいう。月は帰った人を比喩している。

【語釈】 新古今集によると、長い年月逢わなかった幼い頃からの友だちに、偶然出会ったが、ゆっくり話しあうこともなく七月十日の頃、西に傾く月と共に帰ってしまったといっている。永年振りに偶然出会ったので、なつかしさが一杯で、相手の姿をよく見極める余裕もないうちに早く帰ってしまった。

たので、別れて後に、友の姿を思い浮かべようとしても、はつきり浮かんで来ない。我ながら会ったのか会わないのか分からないくらいである。それは、友だちが帰っていく時に出た月が、急に雲に隠れたときのような思いである。作者は、歌全体を友だちの比喩とした。それに都合のよいのは「めぐりあふ」の語で、月も、一月をめぐって再び会うのである。いかにもめぐりあいであるが、それは擬人的匂いのする語で、比喩に使うには好都合である。当時の贈答の歌は、全体を比喩にした歌が多い。これも、作者は贈答の歌にならって、歌全体を夜半の月にしたのである。もちろん、早く別れてしまった友を惜しむ歌である。

【参考】 出典は新古今集・雑上(一四九七)、「早くよりわらはともだちに侍りける人の、年ごろへて行きあひたる、ほのかにて、七月十日ごろ月にきほひてかへり侍りければ」。作者は藤原為時の女。父は兼輔の孫。父為時につれられて幼時越前に下り、京に帰ってから藤原宣孝と結婚して大式三位賢子を生んだ。夫に死別後上東門院に仕え、この間源氏物語を書く。紫式部集、紫式部日記がある。

【口訳】 有馬山の猪名野(いな)の笹原に風が吹くと、そよと音を立てる、そのそよではないが、それそれよ、その事ですよ、あなたが私の心を頼りないとおっしゃるけれど、私はあなたを忘れなでしょうか。忘れはしませんのに。

【語釈】 有馬山は兵庫県にある山。猪名は猪名川下流の原の名。有馬山から猪名野の笹原へ風が吹きわたるとそよそよと音を立てるといので、上三句は下句の「そよ」をいうための序。いでそよは感動詞で、「それ」とか「さあ」とかいう意。「そよ」は「それよ」とか「その事よ」の意で、男が「おぼつかない」といって作者を恨んだ語をさしでいった。人々相手の男。やはは反語の助詞。

【口訳】 近頃遠くなっていた男が来たので、作者が恨みをいふと、男はそういうお前の心だ当てになつたものではなうと言ひ返したのに対し、女が口頭でいうところを歌で訴えたものである。相手のことばを捉えて「それ、その事ですよ」と逆さまに、忘れなどするものと抗議しているところ、ひらめくような才智を思わせる歌である。上三句の序も機敏であるとともに余裕のあるものである。有馬山猪名の地は都

にいた作者にとつては、単に歌枕として使われたものであるが、或いは男に關係のある土地であつたかも知れぬ。詞書の「かれがれる男」とは作者から足遠になつていた男、「おぼつかなく」はその男の女に向かつていったことばで、女の心の頼りないことをいつているのである。

【参考】 出典は後拾遺集・恋二(七〇九)、「かれがれる男の「おぼつかなく」などいひたりけるに詠める」。作者は藤原宣孝(のぶたか)の娘。母は紫式部。名は賢子。正三位太宰大式高階成章(たかしな)のしげあきらの妻となつたので、大式三位と呼ばれた。はじめ越後の弁とも呼ばれたことがあり、これは祖父為時の官名による。後拾遺集以下勅撰集に三十七首入集。参考は契沖はこの歌を「此歌、有馬山を男によせ、猪名野の笹原をわが身にならずらへて、男の物いひおこせたるを有馬山より風の吹きおろすにたとへ、風にもよほされて篠のそよぐ心をもて、いでそよとつづけたり」といつているが、いささか作為を曲げた解のようである。古今集、恋二に凡河内躬恒の歌「ひとりして物を思へば秋の田の稲葉のそよ」といふ人のなき」といふのがある。独り物思いをしていると、そうだとつて同情してくれる人もいないという意。

有馬山猪名の笹原風吹けば
を忘れやはする

いでそよ人
大式三位

有馬山



やすらはで寝なましものを小夜更けて
 傾かたぶくまでの月を見しかな
 赤染衛門あせぞゑもん

筆為泉冷



口訳 ためらわずに早く寝てしまおうものを、おことばを頼りに、おいでをお待ちしているうちに、夜がふけて西に傾くまでの月を見てしまいました。

語釈 やすらはで＝躊躇をしないで。「やすらふ」は躊躇する意の動詞。寝なましものを＝もしそれと知っていたら寝てしまおうものを。「を」は詠嘆の助詞。小夜＝小(さ)は接頭語。

鑑賞 詞書によれば、中の関白藤原道隆がまだ近衛少将であったころ、作者の姉妹(多分妹の馬内侍)のもとに通いつづけていたが、今夜は来ようと頼みに思わせながら来なかつた翌朝、その代わりの立場で詠んだ作であることがわかる。「はらから」は姉妹ということ。「頼めて」というのは信頼させてという意である。歌の主旨は、たずねて来ると待たせておいて遂に来なかつた男への怨情である。いっているところは結局女の愚痴(ぐち)であって、この歌はそれをくわしくつぶさに述べることによって、男に対するうらみを現わしているのである。その点、強いと言いまわしもなく、素直で具體的であり、あらわに男の態度をなじろうとしていないとこ

ろに自然の情がこもっている。このものやらかな調子は、当時歌才をもって並称された和泉式部の歌とは対称的である。なお、赤染衛門にはこのほかにも代作がかなりあって、その歌才のほどを知ることができる。

参考 出典＝後拾遺集・恋二(六八〇)、「中の関白、少将に侍りける時、はらからなる人に物いひわたり侍りけり。頼めて来ざりける翌朝(つとめて)、女に代りて詠める」。作者＝赤染時用(ときもち)の娘となつてゐるが、実は平兼盛の娘という。父時用が衛門尉(えもん)の(じよう)であつたので、その官名で衛門と呼ばれた。道長の妻倫子に仕え、また道長の娘上東門院彰子にも仕えたらしい。後、学者大江匡衡(まさひら)の妻となつた。歌才に富み、和泉式部や紫式部らとともに名があつた。栄華物語の著者であるというが確かではない。拾遺集以下勅撰集に九十三首入集。参考＝後拾遺集に載る同じ作者の歌に、「春や来る人や訪(と)ふとも待たれけり今朝山里の雪を眺めて」「明日ならば忘らるる身になりぬべし今日を過ぎぬ命ともがな」などある。前のは屏風の絵を見ての作、後のは来ないといつて去つた男が或る昼頃におとずれた折に詠んだ歌である。

大江山いく野の道の遠ければ
 も見あまず天あまの橋立はしだて
 小式部内侍こしきぶのちんし まだふみ

口訳 丹後の母のいるところは、大江山とか生野とかを越えていってまだまだ遠いことゆえ、私はまだあの国の天の橋立はいつてみたこともありませんし、もちろん母からの手紙もまだ見ていません。

語釈 大江山＝京都府与謝郡。一説に乙訓(おとくに)郡大枝(おおえ)村あたり。いく野＝京都府天田郡六人部(むとべ)村あたり。「行く」が掛けてある。ふみもみず＝「ふみ」は「踏み」と「文」とを掛け、また、「踏み」は下の「橋」の縁語。天の橋立＝京都府与謝郡宮津湾にあり、日本三景の一。義父保昌の任地はこの地に近く、母の和泉式部も共に都からかの地に下つていた。

鑑賞 詞書によると、和泉式部が丹後にいたころ、都に都合があり、作者もその仲間の一人に定められていたが、藤原定頼が女房のいる部屋へ来て、「歌合の歌はどうなさるか、母上のいる丹後へ人を遣わしたか、その使はまだ来ませんか、どんなに待ち遠しいことでしょう」と戯れて立ち去ろうとしたのを引きとめて、即座に詠んだ歌だといふ。作者の歌は歌人として名高い母のお蔭とあなどつた定頼に対し、当意即妙

の一首をもつて報い、三つも地名を入れ、掛詞・縁語を自在に用い、しかもウイットをもつこの歌は当時の歌壇にもはやされたらしく、後に多くの説話集に載せられている。十訓抄では、定頼は「袖をひきはなちて逃げられにけり」と、この話の尾ひれまでつけている。

参考 出典＝金葉集・雑上(五八六)、「和泉式部保昌に具して丹後国に侍りけるころ、都に歌合のありけるに、小式部内侍歌よみにとられ侍りけるを、中納言定頼つばねのかたにまうで来て、歌はいかがせさせ給ふ、丹後へ人は遣はしけむや、使はまうで来ずや、いかに心もとおぼすらむ、などはぶれて立ちけるを引きとどめて詠める」。作者＝橋道貞の娘。母は和泉式部。小式部の名は母の召名(めしな)からの称。母に先んじて若くして没。後拾遺集以下勅撰集に八首入集。参考＝鎌倉時代の無名草子には「折につけては、いとめでたかりけりところ推し量るるれ」とたえ、江戸時代の戸田茂睡は「当意即妙の秀歌也」と評し、江戸の川柳作者はまた、「おとなをやりこめた歌も定家入れ」「定頼の顔紅葉する大江山」などと作つて、この逸話をひどくおもしろがっている。

大江山、生野、天の橋立



六二
いにしへの奈良の都の八重桜
にほひぬるかな
伊勢大輔 今日九重

冷泉為理筆



昔の奈良の都の八重桜が、今日この平安の都の宮中で、ひときわ美しく咲きかがやいたことです。

奈良の都元明天皇から光仁天皇までの七代七十余年間の古都。今日上句の「いにしへ」に対していたもの。九重宮中。もと中国で帝王の住居に城門が九重あったことからいう。上の「八重」の縁語で、また「いっそう」の意を含め、さらに「この辺へ」に掛け、奈良に対して京都の地をさしている。句ひぬるかな「句ひ」は色美しく咲く意で、香を放つ意はない。

即興の歌であることは詞書からもわかるが、技巧に富んだものである。すなわち、「いにしへ」と「今日」と、「八重」と「九重」と、「奈良の都」と「平安の都」と、それぞれ対照の妙があり、当時の歌としては、もてはやされたものである。すばやく、しかも才智のあふれた歌を詠むことがそのころの社交界の手がらであったのである。この歌の詠まれた事情は袋草子はじめ十訓抄などにくわしいが、伊勢大輔集の詞書には、「女院(上東門院彰子)の中宮と申しける時内(宮中)におはしましたしに、奈良から僧都の八重桜を参らせ

たるに、「今年の取り入れ人は今まのり(新参の人)ぞ」とて、紫式部のゆづりしに、入道殿(道長)聞かせ給ひて、「ただには取り入れぬものを」と仰せられしかば」とあるので、その折の様子がよくわかる。時にとつての名誉であつたらう。袋草子には「万人感嘆、宮中鼓動」とある。

出典「詞花集・春(二七)、「一条院の御時奈良の八重桜を人の奉りけるを、そのをり御前に侍りければ、その花を題にて歌よめと仰せごとありければ」。作者「百人一首

「御垣守」の作者能宣の孫で、伊勢祭主輔親(すけちか)の娘。その召名は父の官名による。上東門院に仕え、紫式部・和泉式部・清少納言・赤染衛門らとその才をきそつた。後、高階成順(なりよし)の妻となつた。後拾遺集以下勅撰集に五十一首入集。参考「契沖は「昔奈良の京にみかどあまたましましけれども、今上(きんじょう)の徳それにはまさらせ給ふが故に、此の御前に来りては、花も昔より句ひまされりといふ心を下にこめたるなり」といっているが、そういう寓意もあつたであらう。川柳作者は例によつて「大和の桜山城で伊勢はほめ」「大輔は奈良の桜を京で書き」などと興がっている。

夜をこめて鳥のそら音ははかるとも世
に逢坂の関はゆるさじ
清少納言

六二

夜深く、にせの鶏の鳴声でだまして通ろうとしても、中国の函谷関(かんこくかん)ならばともかく、そんなことで決してあなたと私の間の逢坂の関は許しません。

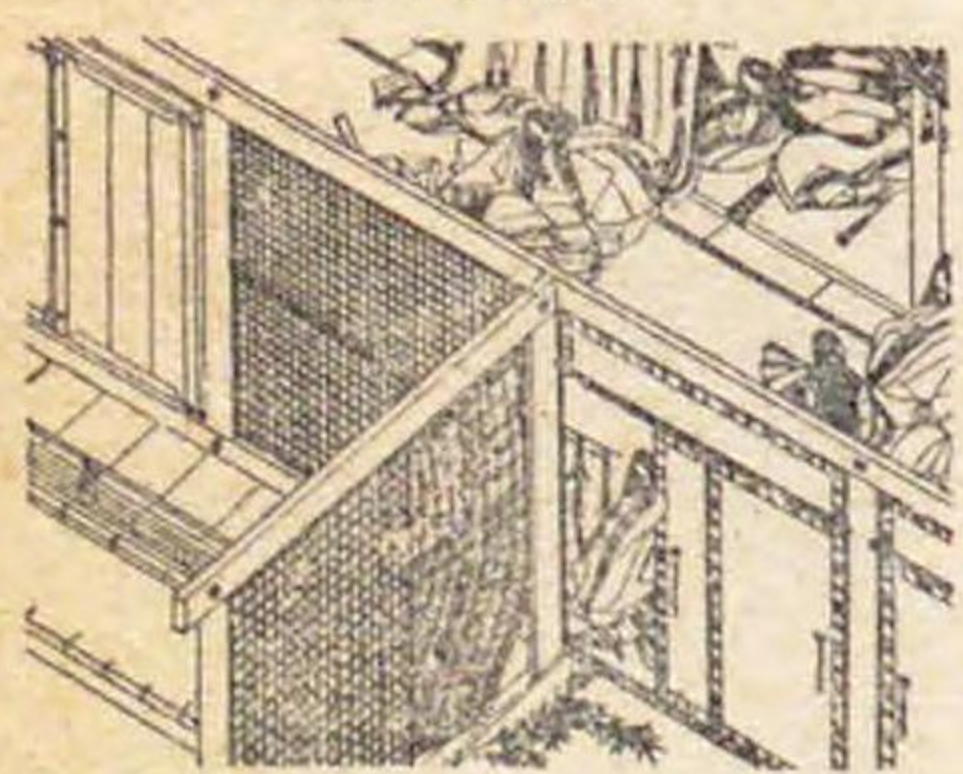
夜をこめて「まだ夜のあけぬうちに、深夜に。鳥のそら音ははかるとも」「そら音」はいつわりの鶏の鳴声。「はかる」はだますこと。孟嘗君(もうしようくん)が部下に鶏の鳴声をさせて、鶏鳴の声をもって開くはずの函谷関を夜中に開かせて通り、秦国からまんまと逃げ出したという故事による。世に「決して。逢坂の関」百人一首十番の歌参照。男女が逢う意を掛けてある。

詞書によれば、作者と話をしていた大納言行成が、「宮中の物忌(い)みにこもらねばならぬ」といって急いで帰っていった翌朝、「昨夜は鶏の声に催促されて急いで帰りました」といってよこしたので、「深夜の鶏の声というのは函谷関のことですか」といってやると、またすぐ使が来て「いや私のいうのは、あなたに逢いたいという逢坂の関なんです」といって来たので、この歌を詠んだという。相手は当時才人で名高い行成である。史記の孟嘗君の故事をもつてする

才智はさすがの行成をも驚かしたに違いなからう。当時頓才をもつてする歌のやりとりとしてはその極端なものである。

出典「後拾遺集・雑二(九四〇)、「大納言行成、物語などし侍りけるに、「内の御物忌にこもれば」とて急ぎ帰りて、つとめて、「鳥の声にもよほされて」といひおこせて侍りければ、「夜深かりける鳥の声は函谷関の事にや」といひつかはしけるを、立ち返り、「これは逢坂の関に侍り」とあればよみ侍りける。作者「百人一首「夏の夜は」の作者清原深養父の孫で、同「契りきな」の作者元輔の娘。一条天皇中宮定子に仕えて愛せられ、枕草子はその著。和歌は得意でなかつたらしい。参考「枕草子によれば、この歌に對し行成はまた折り返し「逢坂は人越えやすき関なれば鳥も鳴かねどあけて待つとか」という返歌が届けられたと記されている。才氣縦横の作者の歌に對しては、いささか見劣りするようである。なお、契沖は「夜をこめて」の歌について、「愚かなる女は男の言(こと)よきにたばかられて、逢ふまじき人に逢ふものもあれども、我はさやうに空言(そらごと)する男などには、はからるまじとなり」といって付言をしている。

枕草子絵巻



今はただ思ひ絶えなむとばかりを 人づ
てならでいふよしもがな
左京大夫道雅

筆為為泉冷



あなたに逢うことを禁じられた今はただ、あきらめてしまおうというだけのことを、人を通してでなく、じかにあなたにいう方法があればよいがと願うばかりである。

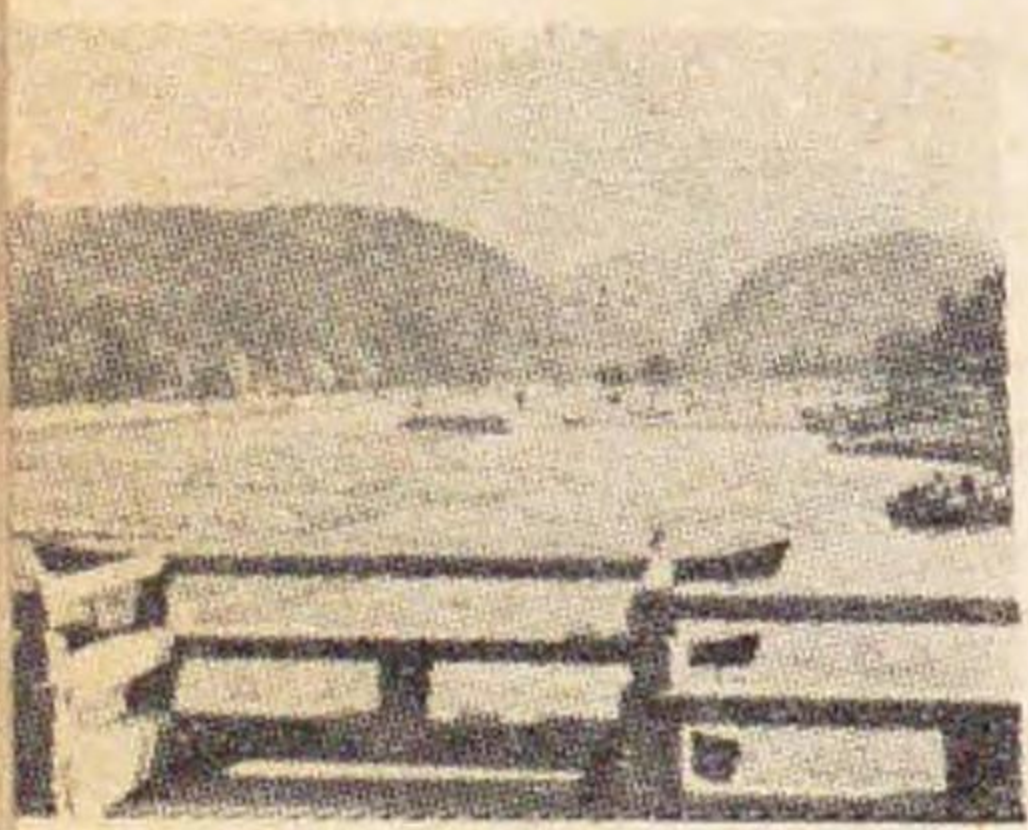
思ひ絶えなむ思ひ切ってしまう。 「なむ」は完了の助動詞「ぬ」の未然形と、意志の助動詞「む」の結合した形。 人づてならで伝言でなく直接に。「で」は「ずして」の意。 いふよしもがな「よし」は方法・手段。「もがな」は願望の助詞。

事情は詞書でわかる。伊勢神宮から上京中の齋宮にひそかに通じた男が朝廷の知るところとなり、監視の付添い女などつけて、内密にも通えないようになったので、詠んだ歌である。齋宮というのは天皇即位ごとに選ばれて伊勢神宮に奉仕した未婚の皇女で、この場合は三条天皇の第一皇女常子(じょうし)内親王で、このような齋宮に対しての恋はあるまじき非行であって、相手の女性が齋宮であることを意識すれば「思ひ絶えなむ」とひとたびは決意をするが、同時に一女性としての相手を思えば「人づてならでいふ」心を抑えられない、そうした矛盾した衝動が自然に歌として述べられて

いる。境遇から来る悲恋の叫び声で、あわれの深い作である。
出典 後拾遺集・恋三(七五〇)、「伊勢の齋宮わたりよりまかりのぼりて侍りける人に忍びて通ひけることを、おほやけもきこしめして、守り女(め)など付けさせ給ひて、忍びにも通はずなりにければ、詠み侍りける」。作者 儀同三司伊周(これちか)の子。従三位左中将から左京権大夫(ごんのだいぶ)となり、天喜二年(一〇五二)、六十三歳で没。後拾遺集以下勅撰集に七首入集。 参考 後拾遺集には同じ詞書でこの歌の前に同じ作者の「逢坂は東路(あずまじ)とこそ聞きしかど心尽しの関にぞありける」「榊葉(さかきば)の木綿(もわた)四手(よっし)でかけしそのかみに押し返しても渡る頃かな」の二首が出ている。前のは、逢坂は東路の関と聞いていたが、今の自分には二人の仲をさかれた心尽くしの関だという意、後のは二人の逢えなくなったこの頃は、神前に木綿四手を榊葉(さかきば)にかけたなどしていた当時の齋宮におし返してしまつたようなものなどの意、あわせてその悲痛な心を知ることが出来る。 兩人のことは栄華物語にくわしい。なお、後撰集に敦忠の「いかにしてかく思ふてふことをだに人づてならで君に語らむ」の一首があり、同想の歌だが、道雅作には及ばない。

朝ぼらけ宇治の川霧たえだえに あらは
れわたる瀬々の網代木
権中納言定頼

宇治川



夜明け方、宇治川の川霧がとぎれとぎれに消えてゆき、その絶え間から、一带にあらわれてくる、あちこちの川の網代木よ。

朝ぼらけ 夜がほのぼのとあけてくる頃。三十一番の歌参照。 宇治 琵琶湖に発し、瀬田から宇治を通り、淀川に入る川。 あらはれ渡る ずっと向こうまであらわれてくる意。 瀬々の網代木 川の浅い所、淵に対する語。「網代木」は網代の杭で、網代は魚をとるために川中に竹の簀(す)を張ったもの、宇治川では冬の氷魚(ひお)をとるために仕掛けた。だから枕草子に季節はずれのものとして「春の網代」の一句がある。

いかにも清新な叙景の歌である。人事に関する作品のつづいた百人一首の配列からすると、この歌はうって変わってすがすがしい世界に出たような趣がある。冬の朝はやく、瀬田川のほとり、しるじろとした川霧が今晴れゆくとともに遠近の網代木の眼前に見えてくる情景はまことに印象鮮明で、しかも夜のあけてゆく時間の移りをも巧みにとり入れた秀吟である。戸田茂睡が「夜のほど、立ち渡りし霧の、ほのぼの

と明けゆく比(ころ)、川霧もはれゆくに従って、その霧の絶々の間に、瀬々の網代木もあらはれて見ゆる眼前の景気、そのまま云出せるなり。かやうに上下の句調、やすやすとつくろふ所もなく、面白き景気とその儘云出して、景気感情見るやうに読める、是等が歌の上といふものなるべし」と称賛し、契沖は「さびしうもをかしうも見ゆる眺望を見るままに詠まれたり」といい、賀茂真淵も「得もいはれぬ景色」といったが、諸評みなもつともである。

出典 千載集・冬(四一九)、「宇治にまかりて侍りける時よめる」。作者 百人一首「滝の音は」の作者公任の子。右近衛少将から権中納言となり、正二位、寛徳二年(一〇四五)、五十歳で没。和歌に秀で、書にもすぐれていた。小式部の「大江山」の歌をよんだ相手はこの人。後拾遺集以下勅撰集に四十六首入集。 参考 前引の評語につづけて茂睡は「芦の丸屋の秋風」、「もれ出る月の影」、「霧たちのぼる秋の夕暮」、いづれも眼前の景気絶言語一歌也、風体のかはりたる故、今はかやうなる歌なし」といって、後世このような写実風の歌の絶えたことを嘆いているが、当時としてもむしろこの傾向の歌は珍らしかったのである。

恨みわびほさぬ袖だにあるものを
 朽ちなむ名こそ惜しけれ
 相模 恋に

口歌 つれない人を恨み悩んで、涙に濡れて乾くひまのな
 い袖だけでも朽ちてしまうのが口惜しいのに、その上、この
 恋ゆえに浮名を流し朽ちてしまう私の名こそ口惜しく残念な
 ことだ。

語釈 恨みわび二人のつれなさを恨んでつらい思いをする
 こと。ほさぬ袖だにあるものを「ほさぬ袖」は、涙で乾
 かぬ袖。「あるものを」は、袖が涙で朽ちてしまうのが口惜
 しくあるのという意。恋に朽ちなむ上句の濡れた袖の
 縁語「朽ち」をもって来て、名が朽ちる意にかけている。
 「名」は名前というより、名誉、評判という意である。

語釈 第一句「恨みわび」には、契沖が「年月へたる心こ
 もれり」といっているように、作者の夜ごとに流す涙も今で
 は久しいもので、そのためにわが袖も朽ちようとしているの
 だが、作者の嘆きはこの涙の袖ばかりではなく、世間の人に
 とやかく言い立てられる浮名のくやしきなのである。それも
 実ることなくむなしく恋い死にに終わるかも知れぬ恋なれば
 こそ、作者にとってはいかやしいかぎりだということである。率
 直に単純な感情を述べるといよりは、複雑な心情を曲折の

ある表現にこめようとしている。巧みな作である。

参考 出典||後拾遺集・恋四(八一五)、「永承六年内裏の
 歌合に」。作者||源頼光の娘という。後冷泉院のころ、祐子
 内親王家に仕え、大江公資(きんすけ)の妻となった。公資が
 相模守であったところから相模と号して奉仕した。才媛の誉
 高く、順徳院の「八雲御抄」に「女歌には赤染衛門、紫式部、
 泉式部、相模、上古にはぢぬ歌人なり」とあるほどである。
 後拾遺集以下勅撰集に百八首入集。参考||この歌は永承六
 年五月五日、殿上(てんじょう)歌合の五番、左の歌で、その
 日の右の歌は源経俊の「下もゆる嘆きをだにも知らせばや焚
 く火の神のしるしばかりに」というのであったが、この両首
 判定の結果は相模の作が勝となった。この歌合の模様は栄華
 物語の根合の巻に見えている。万葉集巻四には、大伴坂上大
 嬢(さかのうえのおおいらつめ)が大伴家持に贈った歌に「わ
 が名はも千名(ちな)の五百名(いおな)に立ちぬとも君が名立
 てば惜しみこそ泣け」があり、これに対して、家持は「今し
 はし名の惜しけくも吾は無し妹(いも)によりては千度立つと
 も」と答えている。古い時代の恋と名の参考歌として引いて
 おく。



冷泉為理筆

もろともにあはれと思へ山桜
 かに知る人もなし
 前大僧正行尊 花よりほ

口歌 この山の奥に咲く山桜の花よ、私もこんな所に思い
 がげずに咲いているお前をしみじみとなつかしいものと思う
 が、お前も今のこの私をなつかしいもの思ってくれ、花よ
 りほかに私を深く知ってくれる人とならない身なのだから。

語釈 もろともに||互いに。あはれ||もと感動詞。ここ
 はしみじみとなつかしい気持をあらわしている。

鑑賞 詞書によれば、作者が大和の大峯山に登った時、そ
 んなさびしい深い山中にひとり山桜の咲いているのを見て詠
 んだというのである。大峯山は今の奈良県吉野郡十津川と北
 山川の間の山で、古くから山伏の修行の霊場で、作者も修行
 者としてある年の春この山奥に山入りをした折、ふと見た山
 桜のありさまをあわれと思ひ、道心堅固であるべき求道者と
 しての自分のうちに、おのずから発した人間感情をそのまま
 偽わずに歌ったものである。万山寂として埋める常盤木の
 中に、ひそかにひとり咲く山桜の一本を見ては、さすが求道
 者である作者も人間としての孤独を感じたものであろうか。
 深いさびしさをもった歌である。

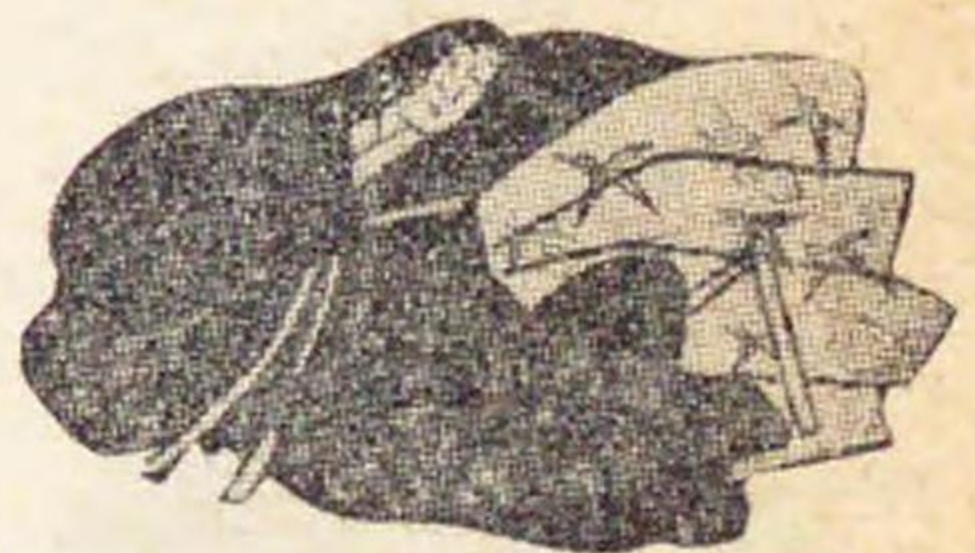
参考 出典||金葉集・雑一(五五六)、「大峯にて思ひもか
 げず桜の咲きたりけるを見て詠める」。作者||百人一首「心
 にもあらで」の作者三条院の曾孫。参議源基平の子。十二歳
 で出家、近江三井寺にいたが、出て諸国を遍歴修行し、延暦
 寺の座主(ざす)となり、天治二年(二二五)大僧正。宮廷の信任
 あつく、白河・鳥羽・崇徳三帝の護持僧となった。保延元年
 (二二五)没、八十一歳。和歌、音楽に秀でていた。参考||
 「思ひもかけず」という詞書の一句については二説ある。契沖
 は「此の思ひかけずと有るを、卯月ばかりの事かといふ説然
 らず。是は深山木はおほかた常盤木にて有る中に、桜の稀に
 有るをいふなり」といって、他の木が山中では皆杉やひのき
 のような常盤木ばかりの中であるから、桜を思ひがけずとい
 ったといひ、賀茂真淵はこれに反対し、「四月に吉野より入
 ることなれば山の花もみな青葉となれる頃に一本咲きて有る
 故とこそ見ゆれ」といっている。歌の真意にかかわるところ
 である。今は契沖説に拠っておく。また、今鏡(巻八)にこの
 歌は後冷泉院崩御、後三条院即位の後、召しがあった時の詠
 として出ており、これにより、思ひもかけず云々は後三条院
 の即位をいい、歌では僧正の身の盛衰、花の開落をもろとも
 にといったという説もある。



冷泉為理筆

春の夜の夢ばかりなる手枕たまくらに
 立たむ名こそ惜しけれ
 かひなく
 周防内侍すおうのちゆうべい

冷泉為理筆



口訳 あなたの腕を枕にせよとおっしゃいますが、短い春の夜の、それもはかない夢ほどのかりそめの手枕のために、何のかわいもなく浮き名が立つのは残念でございます。

語釈 春の夜はかなく明ける短い春の夜。かひなく立ちがいてもなく。ここは腕(かいな)が掛けてある。名評判。

箋賞 詞書によると、春二月ごろ月のあかるい夜、二条院で女房たちが夜あかして雑談をしていた折、作者が物に寄り臥して「枕があればよいが」とこっさりいうのを聞いて、大納言忠家が「これを枕になさい」といって、腕を簾の下からさし入れて来たので詠んだ歌だという。もちろん即興の吟であって、さほど深い心持のあるものではないが、例の即座に機智をもって一首に仕立てた手際はまことにおもしろい。口頭でいふべきところを歌をもってするのは当時の風であったのである。春のおぼろ夜、王朝宮廷のはなやかな一刻がしのばれる一首である。

参考 出典 千載集・雑上(九六一)、二月ばかり月のあ

かき夜、二条院にて入々あまた居明かして、物語などし侍りけるに、周防内侍寄りふして、「枕もがな」と忍びやかにいふを聞きて、大納言忠家「是を枕に」とて、腕(かひな)をみ簾(す)の下よりさし入れて侍りければ、よみ侍りける。作者 周防守平棟仲(むねなか)の娘。一説に平継仲の娘とも宗仲の娘ともいう。本名仲子。父の官名と、後冷泉天皇に仕えて内侍であったところから「周防内侍」と呼ばれた。後、後三条・白河・堀河三帝にも仕えたという。後拾遺集撰者藤原通俊と親しく、しばしば歌合に参加、「恋ひわびて眺むる空の浮雲や我が下萌(したもえ)の煙なるらむ」の一首で、「下萌の内侍」という異名を得たという。これは寛治七年の郁芳門院歌合に提出した歌である。当代評判の女流歌人としての逸話が多くある。その住んでいた冷泉堀川の西北隅の家が長く残っていたのを、後に多くの歌人がおとずれて歌を詠んだという。西行法師の山家集にもそのことが記されている。後拾遺集以下勅撰集に三十五首入集。参考 この歌を詠みかけられた大納言忠家はこれに答えて、「契りありて春の夜深き手枕をいかがかひなき夢になすべき」と返歌した。この歌は千載集にすぐつづいて収められているが、順直過ぎて、あまり曲がなく、周防内侍の歌には圧倒された気味がある。

心にもあらでうき世にながらへば
 恋し
 かるべき夜半よわの月かな
 三さん条院じょうのいん

冷泉為恭筆



口訳 不本意ながらもこのつらい世にもし生きながらえろとしたならば、その時はきつと恋しく思うにちがいないほどの今夜のこの夜半の美しい月よ。

語釈 心にもあらで不本意に、心にもなく。うき世 っらいこの世。ながらへばもし生きながらえろならば。下二段活用の動詞「ながらふ」の未然形に助詞「ば」の添った形。仮定条件。恋しかるべき 恋しくあるはずの。「べき」は当然の意の助動詞「べし」の連体形。

箋賞 詞書にある「例ならずおはしまして」とはご健康がすぐれず、殊に眼病(今いう内障眼)をこひVなどの類かをわづらっておられたことをいい、同じく詞書にある「位などさらむとおぼしめしけるころ」とは、その眼病のためご退位を決意なさったころということで、或る夜、月の明るかったのをご覧になって、この歌を詠まれたというのである。もう生きながらえる希望もないこの世ではあるが、もし心ならずも生きていて、その上失明でもしてしまつたら、いつかさぞかし今夜のような美しい月を恋しく思う時があるのではあるまいかという、そんな悲痛なご心情の深くこめられた歌である。

参考 出典 後拾遺集・雑一(八六一)、「例ならずおはしまして位などさらむとおぼしめしけるころ、月のあかりけるを御覧じて」。作者 冷泉天皇の第二皇子、居貞(すえさだ)親王。御母は兼家の娘超子。天延四年、兼家の東三条邸にご出生。寛和二年、十一歳で立太子、寛弘八年、三十六歳で即位、五年後には病のため皇位を敦成親王(後一条)に譲位された。在位中、眼病あり、再度の皇居炎上に加えて道長の政治干渉などもあり、難儀の多いご経歴で、寛仁元年(一〇三三)にはご出家、同年四十二歳で崩御。後拾遺集以下勅撰集に八首入集。参考 詞花集(秋)には、「秋にまた逢はむ逢はしも知らぬ身は今宵ばかりの月をだに見む」という一首もあって同じころの作かと思われる。これもまた悲哀に満ちたご心中をしのばせるものがある。当時の院の模様は大鏡などに記されているが、栄華物語には、「かかる程に、年はいくばくもあらねば心あはただしきやうなれど、いと悩ましくのみ思し召さるるにぞ、いかにせましと思しやすらはせ給ふ、十二月の十余日、月のいみじうあかきに、上の御局(みつぼね)にて、宮の御前(中宮)に申させ給ふ」(玉の村菊)とあって、この歌をお詠みになった折のことがわかる。

七
夕されば門田の稲葉おとづれて
芦のま
ろ屋に秋風ぞ吹く
大納言経信



冷泉為恭筆

口訳 夕方になると、門の前の田に茂る稲葉を、まずさらさらと音させて、それから芦葺(ふ)きの小屋に秋風が吹いて来るよ。

語訳 夕されば夕方になると。門田川家の門の前にある田。おとづれて音立てて。訪(おとず)れる意もかけてある。この動作の主は下の「秋風」。芦のまる屋川葺で屋根をふいた飯屋。

ある。同じ作者のこのような清新な歌には「荒小田(あらおだ)に細谷川をまかすれば引くしめ縄にもりつつぞゆく」「白雲とよそに見つればあしびきの山もどろにおつる滝つ瀬」「おのづから秋は来にけり山里の葛(くず)はひかかる榎(まき)の伏屋(ふせや)に」「月清み瀬々の網代(あじろ)に寄る水魚(ひお)は玉藻にゆゆる氷なりけり」などの作があり、いずれも金葉集に収められている。

鑑賞 「田家秋風」という題詠ではあるが、詞書によれば梅津の山里に来ての作であるから、実景に触れて作られたものであることがわかる。戸田茂睡が「此歌、夕さればと言ひ出したるより、門田の稲葉おとづれて芦の丸屋に秋風ぞ吹く」とつぎたる詞すなほにして、時節の景気あはれにも、さびしくも、感情骨髓にしみて、まことに身にしむやうなる歌」と評しているのもっともで、この清新な叙景は、すでに古今集時代の知巧な歌風を離れたものを示している。すがすがしくまたあわれにわびしい境地がどこおることなく直叙されている。これはこの作者の歌風の一つの特質であるが、またこの歌を載せている金葉集の新風をも代表するものでも

参考 出典川金葉集・秋(一八三)、「師賢朝臣の梅津の山里に人々まかりて、「田家秋風」といへる事をよめる」。作者川右大臣源重信の孫。民部卿道方の六男。後一条天皇から堀河天皇の六代に仕えた。三河守になってから累進して権中納言、大納言となり、太宰権帥(だざいのごんのそち)を兼ねたが、八十二歳で太宰府で没。博学多能、殊に琵琶に長じていた。別荘を洛西桂の里に構えていたので、「桂大納言」という。俊頼はその子。後拾遺集以下勅撰集に八十七首入集。参考川詞書の師賢(もろかた)は源氏。梅津は京都市右京区、作者のいた桂に程近い。作者は「後鳥羽院御口伝」「古来風体抄」「八雲御抄」等において高く評価され、その歌風が中世歌人に与えた影響はすこぶる大きい。

七
音に聞く高師の浜のあだ浪は
かけじや
袖の濡れもこそすれ

祐子内親王家紀伊



冷泉為恭筆

口訳 うわさに高いとして聞く高師の浜の、むなく寄せては返すあだ波は身にかけてすまい。そのように名高い浮気者のあなたには思いをかけますまい。あだ波で袖が濡れるように、あなたに思いをかけたなら、きつと後に捨てられた悲しみの涙で袖が濡れるにきまつてますから。

語訳 音に聞く評判として聞く。次の「高師」の「高」にかけてある。評判にきくことの高い。高師の浜川和泉の国(大阪府)泉北郡高石(たかし)町の浜。今の浜寺海岸の辺。あだ波川むなく寄せて返す波。ここは浮気な人にとえてある。かけじや川かけまいよ。「や」は感動の助詞で「よ」に同じ。波をかけまいという意と思いをかけまいという意がかけてある。濡れもこそすれ 濡れるということ を強めていったいい方。

鑑賞 この歌の表面の意味だけをたどれば、単に浜の波に袖を濡らしたくないというだけのことであるが、内に恋の心をたくみに含めてあり、掛詞や縁語を用いて、すこぶる技巧的な歌になっている。詞書に艶書合(えんしょあわせ)の歌だとあれば、こうした手練のわざは当然だと思われるもので、

それだけ遊戯的ともいえるものである。艶書合というのは懸想文合(けそうぶみあわせ)というもので、男女の歌人が恋の歌の贈答をする宮中遊戯である。

参考 出典川金葉集・恋下(五〇一)、「堀川院の御時、艶書合によめる」。作者川祐子内親王は後朱雀天皇の第一皇女。この方は頼通の高倉邸に住まれたので、高倉の宮といひ、また一の宮ともいわれ、作者はこの祐子内親王家の女房で、平経方の娘、紀伊守重経の妹。兄の領地によって紀伊と呼ばれた。歌人として度々の歌合作者にえらばれている。この艶書合のころはすでに七十歳に達していたといわれる。後拾遺集以下勅撰集に二十九首入集。参考川この艶書合の折に、はじめ作者に男から贈られた歌は「人知れぬ思ひありその浦風に波のよるこそ言はまほしけれ」というので、この作者は中納言俊忠朝臣(藤原俊成の父)である。俊忠の歌は、人知れぬ思いを荒磯の浦風に乗せてあなたに伝えたいという心であるが、この贈歌を受けて、作者の歌は「荒磯の波」を「高師の浜のあだ波」とし、そのような波を受けるわけにはいかないと、これをね返しているのである。贈歌に比して、その技巧の才は一段すぐれているようである。

七三
高砂の尾上の桜咲きにけり
たずもあらなむ

外山の霞立
権中納言匡房

筆為泉冷



口歌 高い山の、峰の桜が美しく咲いたことだ。せっかくのこの眺めをさまたげないように、こちらの里近い山の霞よ、どうか立たないでほしいものだ。

語釈 高砂は高い山という意。ここは地名ではない。百人一首三十四番の歌参照。尾上は山の峰。外山は奥山に對して端山、すなわち里近い山。立たずもあらなむは「あらなむ」は、動詞「あり」の未然形に、願望の助詞「なむ」のついた形で、立たないでほしいという意。

箋賞 詞書によれば、内大臣藤原師通の邸に人々が集まって、酒を飲み、歌を詠みあったが、その時「遙かに山の桜を望む」ということを題として詠んだ歌だということである。「内のおほいまち君」というのは内大臣のことである。古今集、春の歌に「山桜わが見に來れば春霞峰にも尾にも立ちかくしつ」という歌があり、作者の脳裡にはこの歌があったかと思われるが、この匡房の歌は表現に技巧をこらさず平明単純で、いやみがない。はるか山の峰に今をさかりと咲く桜に深い愛着があって、手前の低い山のあたりに霞が立たないでほしいと望む心は耽美の情といってよいものである。

一刻の花のすがたを惜しむのは、しばしのうちに霞みやすい春の空を知っているからである。宗祇が「心明らかなり。ただ詞づかひさはやかに、たけある歌也」といっているのもっともである。「たけある」というのは品位の備わっていることをいう。

参考

出典は後拾遺集・春上(二二〇)、「内のおほいまち君の家にて、人々酒たうべて歌よみ侍りけるに遙かに山の桜を望むといふ心をよめる」。作者は大江匡衡(まさひら)の曾孫。信濃守成衡の子である。権中納言、太宰権帥(ださいのこのそち)を経て、天永元年(一一九二)、大蔵卿となり、同年没。七十一歳。博学多識、万葉集の訓点を付け、詩歌をよくし、漢学では当代第一の学者で、江家次第・江談抄その他の著があり、兵法を源義家に講じたという話は有名である。参考は香川景樹はこの歌について、「題の遙に望むといふにかかはりて、実景を忘れられしもの歟(か)。此卿の歌にはさしも秀逸の多きを、中にも此歌を出せるは撰者のあやまち也」といって批難している。特に下句が実景をいわずに理屈になっているのをとがめたものであろう。これもひとつの見解である。

口歌 私につれなくしていたあの人が私にどうかなびいてくれるようにと初瀬の観音に願をかけたが、かえってその人はちよつどの初瀬の山風が烈しいように一層はげしくあたるようになってしまった。私はこんなにはげしくあるようにとは祈りはしなかったものを。

語釈 うかりけるは「憂くありける」で、私につれなかつたという意。人恋の相手の女。初瀬は奈良県磯城郡(しきぐん)初瀬。初瀬観音のある初瀬寺は初瀬川に沿う山の中腹にあって、古くから信仰あつく、京からはるばる参詣にゆく人が多かった。百人一首三十五番参照。山おろしは山から吹きおろしてくる山風。「初瀬の山おろし」の句は下の「はげしかれ」をいうための序。

箋賞 詞書によれば、この歌は「神仏に祈っても恋人に逢えない恋」という題で詠んだ歌であることがわかる。本意は恋の相手の自分にやさしくなびいてほしいことをいうのだが、遂げられぬままに祈る観音をも恨んでいるのである。歌としては内容が複雑で、無理に一首に詠みこもうとしたところに難がある。もっとも定家はその「近代秀歌」の中で、「心ふ

かく、言葉心にまかせて、まねぶともいひ続けがたく、まこととに及ぶまじき姿也」と絶賛して、かぶとを脱いでいるが、こうした複雑な歌の仕立て方が定家好みであったのであろう。なお、初瀬観音に恋の成就を祈ることは住吉物語などにも見える。

参考

出典は千載集・恋二(七〇七)、「権中納言俊忠の家に、恋の十首の歌よみ侍りける時、祈れども不逢恋といへる心を」。作者は百人一首「夕されば」の作者源経信の第三子。堀河・鳥羽・崇徳三帝に仕え、右近衛少将・木工権守(もくのごんのかみ)・右京大夫等を歴任、晩年は退いて近江国(滋賀県)栗田郡の田上(たなかみ)に閑居。父と共に歌壇の重鎮であり、特に藤原基俊ら旧派に對抗し、新派歌人として活躍した。金葉集の撰者で、家集に「散木弃歌集」のほか、「俊頼髓脳」という歌論があり、多くの歌合の判者をつとめた。歌人俊恵はその子。参考は作者の歌には「風吹けば蓮の浮葉に玉越えて涼しくなりぬひぐらしの声」「うづら鳴く真野(まの)の入江の浜風に尾花波よる秋の夕暮」「山桜咲きそめしより久方の雲居に見ゆる滝の白糸」(以上金葉集所収)のような清新な作が多くある。

うかりける人を初瀬の山おろしはげしかれとは祈らぬものを

七四

源俊頼朝臣

宇かききれいせむ
紫は路乃山字人志
定家筆
よ波計え示禮とて
修家存ぬえ乃書

七五
 契り置きしさせもが露を命にて あはれ
 今年の秋もいぬめり
 藤原基俊

冷泉為筆



口歌 お約束して下さい。たおこばを命の頼みとしており
 ますが、その望みもかなわず、ああ今年の秋もむなしく過ぎ
 てゆくようでございます。

その年も洩れたので忠通に遣わした歌、というのである。復
 雑難解のようだが、詞書に添って味わえば、その感情は率直
 切実で親の愛情がしみじみとして感じられる佳作である。

語釈 契り置きし約束しておいた。「置き」は下の「露」
 の縁語。させもが露「させも」は「させも草」でもぐさ。
 前に「さしも草」とあった。(百人一首五十一番参照)。「露」
 は次の「命」の縁語。虫などは露を命として生きていること
 からいう。「させも」には「あれほど」の意の「さしも」を
 含めている。命にて命と頼んで。去ぬめり「去ぬ」
 は「行く」。「めり」は推量の助動詞。

参考 出典「千載集・雑上(一〇二三)」「僧都(そうず)光
 覚、維摩会(ゆいまえ)の講師の請(しょう)を申しけるを、
 たびたび洩れにければ、法性寺入道前太政大臣に恨み申しけ
 るを、「しめぢが原」と侍りけれど、又その年も洩れにけれ
 ば遣はしける」。作者「右大臣俊家の子。道長の曾孫。家柄
 の割に不遇で従五位下左衛門佐(さえもんすけ)で終わっ
 た。後出家して覚舜という。俊頼と比肩される歌人であった
 が、度量が狭く、人望に欠けるところがあつた。俊頼の革新
 的なのに対し、その歌の傾向は保守的で、一面には歌学者風
 の人だつたようである。漢詩にも長じ、また万葉集次点者の
 一人。「悦目抄」「新撰朗詠集」などの著がある。康治元年
 (二四三)没。八十七歳。俊頼撰進の金葉集にはわずか三首入集。
 金葉集以下勅撰集に百七首入集。参考「清水観音が詠んだ
 歌というのは「ただ頼めしめぢが原のさしも草われ世の中に
 あらむかぎりは」(新古今・釈教・一九一七)というのであ
 る。

語釈 詞書は、作者の子光覚が、毎年十月に奈良興福寺で
 行なわれる維摩経(ゆいまきよう)を講ずる会の講師になりた
 いと願っていたが、今まで度々その選に洩れたので、作者が
 法性寺(ほっしょうじ)入道前太政大臣藤原忠通(百人一首七
 十六番作者)に恨みごとをいったところ、しめぢが原だから
 安心してまかせよ(「しめぢが原」の歌は清水観音詠と伝え
 られるもので、歌意は、ただ頼みにせよ、このように私が世
 にあるかぎりはの意)という忠通のことばだつたが、また

口歌 海原に船を漕ぎ出して、はるかに見ると、空の雲と
 見まちがうほどの、沖の白波よ。

事也」ともいって、結局茫漠とした水天一体の状を歌つたも
 のと見ているが、要約し過ぎたうらみがある。

語釈 わたの原海原のこと、百人一首十一番に「わた
 の原八十島かけて」とあったのと同じである。久方の「雲
 の枕詞。雲るにまがふ」は雲のことをいう。「ま
 がふ」は、まぎれて区別のつかぬこと。沖の白波と空の白雲
 とが一体となって見わけがつかぬことをいった。沖つ白
 波「つ」は「の」の意で格助詞。「滝つ瀬」「天つ風」「国
 つ神」などと同じである。

参考 出典「詞花集・雑下(三八〇)」「新院、位におはし
 ましし時、「海上遠望」といふ事をよませ給ひけるに詠める」。
 作者「藤原忠通。知足院関白忠実の子。嘉承二年元服、正五
 位下。以後累進して保安二年、二十五歳の若さで関白となつ
 た。鳥羽・崇徳・近衛・後白河四帝に仕え、摂政および太政
 大臣にそれぞれ二回就任、従一位に昇つた。康治元年、関白
 を辞し、法性寺に入つて出家した。それより二年後、長寛二
 年(二四八)没。六十八歳。和歌をはじめ、詩文に長じ書も妙手。
 その子に兼実・慈円がいる。金葉集以下勅撰集に六十九首入
 集。参考「今鏡」に「未だ幼くおはしましし時より、歌
 合など朝夕の御遊にて、基俊・俊頼など云ふ、時の歌よみど
 もに、人の名隠して判ぞさせなどせさせ給ふ事絶えざりけり。
 御歌など多く聞き侍りし中に、わたの原漕ぎ出でて見れば久
 方の雲居にまがふ沖つ白浪、など詠ませ給へる御歌は、人丸
 が「鳥隠れ行く舟をしぞ思ふ」など詠めるにも恥ぢずやあら
 むとぞ人は申し侍りし」とある。「鳥隠れ云々」の上句は「ほ
 のぼのと明石の浦の朝霧に」で、人麿作というのは疑問。

わたの原漕ぎ出でて見れば久方の雲る
 にまがふ沖つ白波
 法性寺入道前関白太政大臣

七六

冷泉為筆



七七
 瀬を早み岩にせかるる滝川の
 われても
 末にあはむとぞ思ふ
 崇徳院

白峰寺藏



口訳 瀬が早いので、岩にせきとめられる滝川が両方に分かれ分かれになっても末にはまた出会うように、我々二人の仲も今は人目にさまたげられて分かれていても、末にはきつと会おうと思う。

詞書 瀬を早み「瀬」は「淵」に對していう。「早み」は早いのでという意。百人一首「昔をあらみ」と同じ言ひ方。せかるる「せく」はせきとめる意。滝川の「急流」のように。初句からこまでは比喩になっている。

箋賞 詞書の「新院」とあるのは、崇徳院が鳥羽院に對して、新しい院というからの稱である。歌の表は岩にせかれてはげしく流れる滝川が分かれてもやがては再び末には合流してひとつになる自然の勢を叙しているのが、結句に至って恋の意に一転するのである。人目の繁くある世に、恋する者同志の今は仲をへだてられていても、いつかは合体する時のあることを心に期待している切実な思いなのである。効果のある比喩である。一気に詠みくだしている気迫はこの比喩を十分に生かしているといえる。

参考 出典「詞花集・恋上(二二八)、「題しらず」。作者 鳥羽天皇の第一皇子。保安四年、五歳で即位されたが、白

河法皇が院中で執政、つづいて鳥羽法皇が政權を握られ、その上皇太弟体仁親王(近衛天皇)を擁立されたので、不満の中に位を去られた。近衛天皇が崩御されたのちも、御子重仁親王の即位が認められるところとならず、ご不平のあまり、保元元年七月鳥羽院崩御を機として、左大臣藤原頼長らと謀って兵を挙げられたが、事は失敗に帰し、剃髪、仁和寺に入った。後、讃岐(香川県)に流された。世に讃岐院と申し上げる。都への思い断ちがたかったが、遂に容れられず、悲憤のうち長寛二年(二四)八月、崩御された。髪を剃らず、爪を切らず、激怒の相を改められなかったという。御年四十六。白峰山陵に葬られた。讓位後、藤原頼朝に命じて詞花集を撰進せしめられ、また公能ら十三人の歌人に百首の歌を奉らしめ給うた。いわゆる「久安百首」である。参考「院は性質聰明で、特に和歌を好み、藤原俊成に恩顧をかけ、崩御に際し宸筆を俊成に送られ、俊成もまた長歌一編をものしたという。その御製にはすぐれたものが多いが、「思ひきや身を浮雲となし果ててあらしの風にまかすべし」とは、「憂き事のまどろむほどは忘れられて覚むれば夢の心地こそすれ」「浜千鳥跡は都へ通へども身は松山にねをのみぞ泣く」などの詠に悲痛なご心境をうかがうことができよう。

口訳 淡路島へ飛んでかよってゆくあわれな千鳥の声に、幾夜も幾夜も寝覚めたことか。須磨の関守よ。

話釈 淡路島は四国と大阪湾との間にある島で、古来歌枕として名高い。もと「あはじ」は四国阿波国(徳島県)への路という義から来ている。その北端は明石海峡をへだてて、須磨・明石の海岸に相對している。寝覚めぬ「夜、目をさます意の動詞「ねざむ」の連用形に、完了の助動詞「ぬ」の終止形のついた形。従って文はここで切れる。「ぬ」は打消「ず」の連体形ではない。須磨の関守「須磨」は神戸市須磨区の南海岸で、源氏物語にもわびしい舞台となっており、古くはここに関所があった。「関守」は、関所の番人。

箋賞 この歌も題によって詠んだものであるが、所は人里遠いわびしい須磨、都から派遣された関守が、対岸の淡路島にかよって鳴く千鳥の声に、夜の眠りをしばしば覚まされる境涯を思つて、あわれをこめて歌つたもの、情趣浅からぬものがある。もちろん実景によつての詠ではないが、その所を得た雰囲気はよくとらえられている。恐らく源氏物語、須磨の巻にある「千鳥いとあはれに鳴く」などの場面が作者の脳

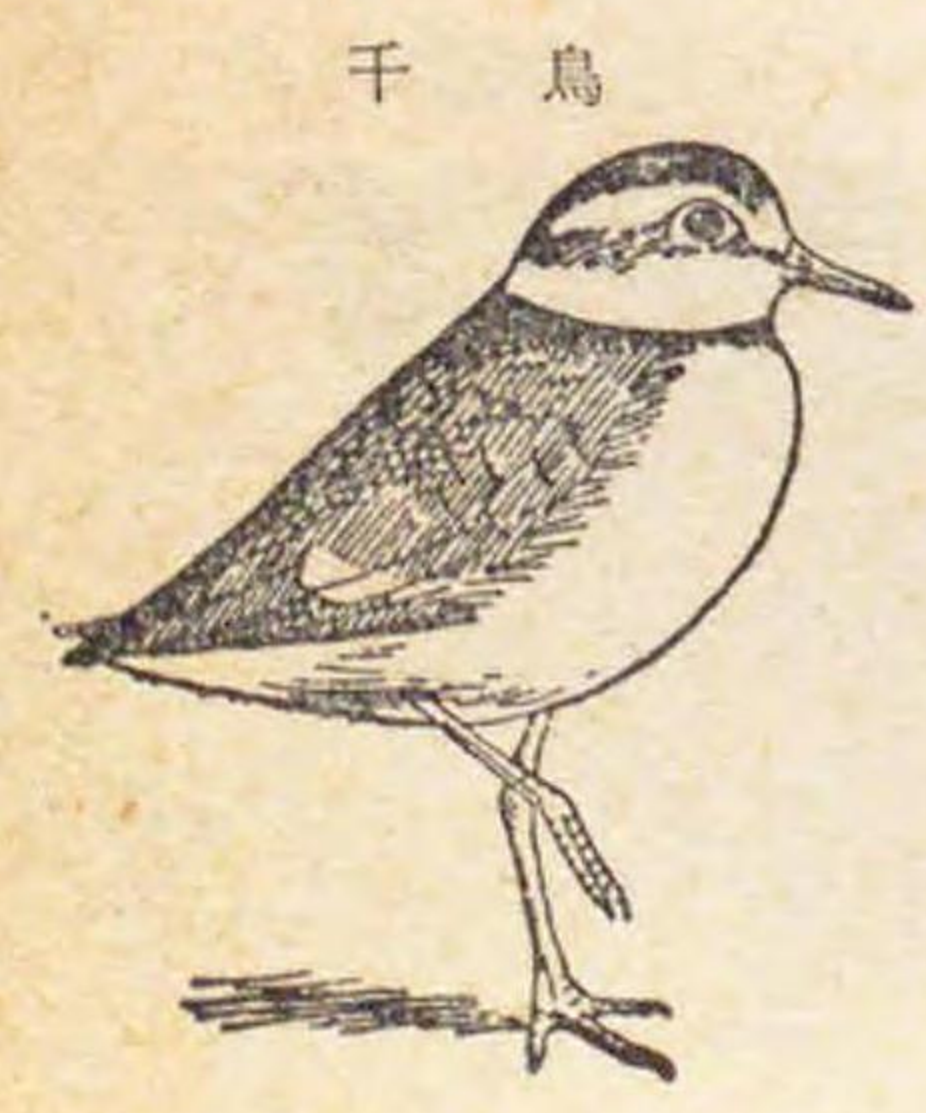
裏に深く刻まれていたことによるものであろう。

参考 出典「金葉集・冬(二八八)、「関路千鳥」といへる事をよめる。作者「美濃守俊輔の子。伝はよくわからぬ。従五位下皇后宮大進であつたらしく、堀河次郎百首・内大臣家歌合・住吉歌合などにその名が見え、晩年は出家したらしいというぐらゐで、没年も享年も不明である。金葉集以下勅撰集に七首入集。参考「契沖は「幾夜寝ざぬ」の「ぬ」は、「寝ざぬ」といふ義なり、「ぬる」の略語也」といひ、俊成の「霞たち雪も消えぬや」とか、清輔の「いく世になりぬ水のみななみ」などの例を挙げている。「幾夜」というような疑問表現のことばを受ける結びは連体形になるのが普通なのを、ここが「ぬ」と終止形になって言い切りになっていることの説明である。また、契沖は「兼昌はさして名高き歌よみにもあらず。只堀川院後度百首の作者に入りたるまでなるを、京極黄門かく本歌にも取られたるは、殊に思はるる故有るなるべし」といっている。京極黄門というのは百人一首撰者定家のこと、無名の歌人でも秀歌ならば入れるという撰者定家の格別の気持があつたのだからというのである。

淡路島かよふ千鳥の鳴く声に
 幾夜寝覚
 めぬ須磨の関守

七八

源 兼昌



ほととぎす鳴きつる方を眺むれば ただ
有明の月ぞ残れる

後徳大寺左大臣



ほととぎすの鳴いた方の空を眺めると、今鳴いたほととぎすの姿はなく、ただ有明の月が残っているばかりである。

ほととぎす 山中に住み、特に初夏のころ、多く夜間に鋭い声で鳴く。その声は万葉集にも詠まれているが、殊に平安朝には歌にもよまれ文章にも取り入れられて、文学の好題材としてよるこぼれた。郭公・杜鵑・子規・蜀魂など書く。平安貴族はその声を聞こうとして夜を明かしたり、人より先に聞こうと競ったりした。ただほととぎすの姿はなく、有明の月ばかり残っていること。有明の月夜が明けてもまだ西の空に残っている月。百人一首三十・三十一番の歌参照。

変に技巧をこらさずに、さくりと詠みくだして、しかも余情のある歌である。恐らく宵のころからほととぎすの声を待ちあかしたのであろう、眺方は一声を聞きつけて、その方を眺めたところ、すでにその姿はなく、ただ有明の月がそのなごりのように西の空に傾きながら残っていたという、瞬間の景趣がとらえられている佳品である。古注に「ただ」

の字に感情がこもっているから、注意すべきだといっている。香川景樹は「実にけしき見えて、郭公にとりては、当時最第一の御歌というべし」といい、古くは宗祇も「一声鳴きていづちとも行方なき空を打ち眺めてるたるに、有明の月細う残りたらんさま面影身にしむやうにぞ侍る」といって賞賛している。ほととぎすを詠んだ歌は多いが、この歌はその随一の作とされているのである。

出典 千載集・夏(一六一)、「曉聞 郭公」といへる心をよみ侍りける。作者 藤原実定。右大臣公能(きみよし)の子。祖父実能を徳大寺左大臣といっただので、それに対して後徳大寺と呼ばれたのである。左大臣まで進み、建久二年(一二九)出家して如円といっただが、同年没。五十三歳。平明澄徹の作が多い。千載集以下勅撰集に七十三首入集。参考 契沖のあげている先行の歌は「有明の月だにあれや郭公ただ一声の行く方も見ん」(後拾遺)「郭公飽かて過ぎぬる声により跡なき空に眺めつるかな」(金葉)である。「一声は月が鳴いたかほととぎす」「一声は唯有明の月ばかり」の句はこの歌にもとづく。同じ作者の歌で「なごの海の霞の間より眺むれば入日を洗ふ沖つ白波」(新古今)は秀歌として名高い。

多少のくどさを免れない。

遂げられぬ恋に悩み苦しんでいるこのごろ、それでもどうか命だけはもちこたえているのに、このつらさにこらえられないのは、抑えても抑え切れずに、あとからあとからこぼれてくる涙だなあ。

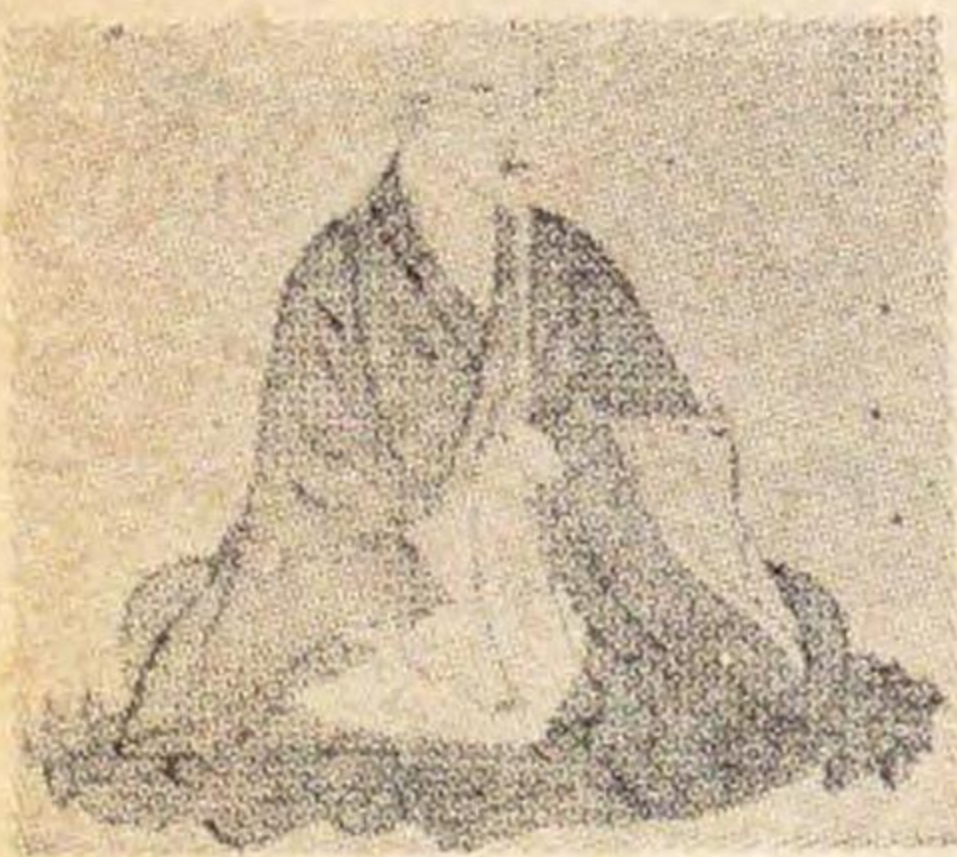
思ひわび 恋の物思いに心をなやますこと。さても 命はあつても 死なずに命はもちこたえているのに。 憂きに堪へぬは つらさにこらえ切れぬのは という意で、命は堪えているが、涙は堪えられずにこぼれ出ること。

出典 千載集・恋三(八一七)、「題しらず」。作者 俗名右馬助教頼(あつより)。治部丞(じぶのじょう)清孝の子。生没不詳。崇徳天皇に仕えて、従五位上右馬助となったが、のち出家して名を道因と改めた。延暦寺の僧であった。同因とも書く。万葉集に訓点を試みたり、万葉集の成立年代についての見識のあったことが顕昭の著によってもわかる。千載集の撰ばれる直前に没した。千載集以下勅撰集に四十一首入集。参考 道因は歌道に執心があつたということ、逸話の多い人である。長明の無名抄によると、七八十歳になるまで「秀歌を詠ませたまえ」と、徒歩で和歌の神を祀る住吉神社へ月詣をし、耳が遠くなると、歌合の時に、講師(歌のよみあげ役)のそばに座を占めて耳を傾けていたという。また、歌合の際、判者清輔(百人一首、「ながらへば」の作者)が道因の歌を負けたので、悲しんで判者の家を訪れて泣いて恨んだといい、俊成(百人一首「世の中よ」の作者)が千載集を撰んだ時、その歌を十八首撰入したが、すでに故人となっていた道因は俊成の夢にあらわれて涙を流して喜んだので、さらに二首追加して撰入したという。

思ひわびさても命はあるものを 憂きに
堪へぬは涙なりけり

道因法師

冷泉為恭筆



世の中よ道こそなけれ思ひ入る 山の奥
にも鹿ぞ鳴くなる

皇太后宮大夫俊成

世中よみちこよ
ふきれたる思ひ
定家筆
やは乃た下
志の勢しくふれ

世の中よ、憂さからのがれる道というものは無いもの
のだなあ。憂さを避けられると思ひこんで、こんな山奥には
いつて来たのだが、ここにも鹿が悲しげに鳴いていることだ。

世の中よ「世の中」は世間、憂き世。「よ」は詠
嘆の助詞。文はここで切れる。道こそなけれ思ひ入るの道
はないものだ。「なけれ」は「こそ」を受けて「なし」の已
然形。思ひ入る深く思ひこむ意と、山に入りこむ意とが
かけてある。鹿ぞ鳴くなる「鹿ぞ」は「然(しか)ぞ」が
かけてある。「なる」は詠嘆の助動詞「なり」の連体形で、
上の「ぞ」の結びとなっている。

詞書にある「述懐」とは、ある時の思いを述べる歌
という意である。凡河内躬恒の歌に「世を捨てて山に入る人
山にてもなほ憂き時はいづち行くらむ」(古今)というがあ
り、または法師の歌にも「のがれても同じ憂世と聞くもの
をいかなる山に身を隠さまし」(新千載)というがある。所
詮、世の憂さはどこへいってものがれるすべはないという嘆
息であるが、俊成の歌はこれらと同想ながら、のがれようと
して来た山にも鹿の悲しげな声を聞けば、これも憂さからの

がれられぬところだと、実感をたたえているところに特色が
ある。また、初句切れ、第二句切れの形は深い嘆息の心をよ
くあらわしているといえる。伝えるところによると、俊成は
千載集の撰者として、この歌の「世の中よ道こそなけれ」の
ところが政道の乱れをいうようにきこえるからといって、撰
入をばかったが、後に勅命で入れたという。

出典「千載集・雑中(一一四八)、「述懐百首の歌よ
み侍りける時、鹿の歌とよめる」。作者「権中納言俊忠の
子。はじめ顕広、後俊成と改めた。基俊の弟子となり、後、
俊頼の風を学んだから、新派旧派の折衷的立場に立つ。従三
位に進み、右京大夫・皇太后宮大夫を歴任、五条室町に住ん
でいたので五条三位と称した。六十三歳で官を退き、出家し
て釈阿と号し、七十歳にして千載集撰進の勅命を拝し、後完
成。また古来風体抄を作り式子内親王に献上、建仁三年に後
鳥羽上皇より九十賀を賜わったが、翌元久元年(三〇四)没。家
集に長秋詠藻があり、定家はその子である。詞花集以下勅撰
集に四百十五首入集。参考「夕されば野辺の秋風身にし
みて鶉鳴くなり深草の里」(千載集)の歌は作者自賛の歌とし
て有名である。

ながらへばまたこの頃やしのばれむ 憂
しと見し世ぞ今は恋しき

藤原清輔朝臣

筆為恭泉



長生きをするならば、こんども、苦しんでいる現在
の今の時代がなつかしく思ひ出されるであろうか。つらいと
思った前の時代が、今となっては恋しい。

ながらへば「ながらふ」は、長生きをする、下二
段活用の未然形に「ば」が付いて仮定になっている。また
「再び」この度も。この頃やこの頃は、下の句との関係
で、苦しんでいる現在の今の時代。「や」は疑問。しのば
れむ「なつかしく思ひ出されるだろう。「しのぶ」は、なつ
かしく思ひ出す。古代では「しのぶ」は自発助動詞。
「む」は推量助動詞。憂しと見し世ぞ「見し」は、思っ
た。「見る」は、思うと同じ意味に使われた。「し」は過去
の助動詞で、それが過去の時代であったことを示す。世は、
時代。苦しいと思つた時代。今は恋しき「は」は他と区
別している。今の時代では前の時代が恋しい。

時が経過すると、苦しかった事もなつかしくなっ
てくる。作者はそういう回顧的な気持ちになって、「憂しと見し
世ぞ今は恋しき」といっている。それと共に、現在の苦しい
生活を思い、それも長生きした後には今のよう懐し

なくなってくるだろうと類推したのである。それは、苦しんで
いる現在の救いである。清輔朝臣集には、昔のことが懐しく
なった頃、三条中将に贈ったとある。この歌は、ただ昔を回
顧しただけのものではない。その心持ちを通じて、現在の苦
しみを客観視し、将来へ希望をつなぐことによって苦しみが
ら解放されようとしているのである。上三句は、心からの解
放を叙べており、下二句は類推の基礎となる現在の心理状態
を叙べている。「この頃」が現在の苦しい境地、「憂しと見し
世」が過去の苦しい境地を余情的に表現して、この歌の
心深さを示している。心理の動きと心深さを見せている純叙
情の歌である。

出典「新古今集・雑下(一八四三)、「題しらず」。清
輔朝臣集「いにしへ思ひいでられけるころ、三条大納言いま
だ中将にておはしける時つかはしける」。作者「顯輔の子。
堀川から崇徳まで三代の天皇に仕え、正四位下皇太后宮大
進、兼長門守に至った。治承元年(一一七)七十四歳で没した。
六条家を代表する歌人で、二条天皇の命で準勅撰集、続詞花
集を撰んだ。歌学にも通じていて、袋草子等の歌論がある。
藤原兼実の歌の師ともなり歌壇に重んじられた。

八五

夜もすがら物思ふ頃は明けやらで
ひまさへつれなかりけり
俊恵法師 閨の



筆為泉冷

恋人のつれなさに一晚中物思いをしているこのごろは、なかなか夜も明けないで、戸のすき間がしらんで来そうもない。恋人ばかりか、寢室のすき間までが私に冷淡なことだなあ。

夜もすがら一晩中。 明けやらで一夜が明け切らないで。「で」は「ずして」の意。 閨のひまさへ「さへ」は「までも」の意で、恋人が冷淡なばかりか、隙間までが冷淡だという心持である。 つれなかりけり「つれなし」は冷淡でつらくあたることをいう。

恋人を待って、寢室に寝られぬ夜をあかすという立場は、女の上のことを詠んだものとして理解される。 詞書にあるように、作者は女の立場に立ちながら、恋の歌として詠んだものである。物思いに寝もやらず悩み苦しんでいるこのごろは、他の夜と違って夜の明けるのも長いように思われ、だから心ない寢室のすき間までも自分につれなく思われるというのである。 後拾遺集の冬の部に、増基法師の「冬の夜に幾たびばかり寝覚して物思ふ宿のひま白むらむ」という歌がある。これは物思いをしている冬の夜は一体幾度寝ざめて夜がしらんでくるのだらう、さても長い夜だという心持で、

素直な作だが、俊恵の歌はこれに比して「閨のひま」を擬人化しているところに技巧がある。なお、第三句が千載集では「明けやらぬ」となっている。この異同については鑑賞の分かれるところであるが、古くから諸説がある。「明けやらぬ」とあればこの句は次の閨にかかってゆくことになる。香川景樹は「明けやらぬ閨のひま」とつづいては、秋の長夜などが自然に明けやらぬこととなって、上の「物思ふころは」とあるのがむだになってしまう。これは夜の長短にかかわらず、物思いのために「明けやらぬ」といつているのだから、上を受けて「明けやらで」と、ここでちょっと切るべきだとしている。

出典 千載集・恋二（七六五）、「恋の歌とよめる」。作者 百人一首「うかりける」の作者源俊頼の子。生没未詳。東大寺の僧であった。自宅を歌林苑と称し、毎月歌の会を催したという。方丈記や無名抄（歌書）を著した鴨長明はその弟子であった。詞花集以下勅撰集に八十四首入集。参考 俊恵作としては「春といへばかすみにけりなきのふまで波間に見えし淡路島山」が新古今集に採られていて、よい歌である。

八六

なげけとて月やは物を思はする
顔なるわが涙かな
西行法師 かこち



藏寺川弘

嘆けといて、月は私に物思いをさせるのであろうか、そんなことはあるまい。それなのに、まるで月のせいでもあるかのように、かこつけがましくあふれ出てくる私の涙であるよ。

「なげけとて」「なげけ」は「嘆く」の命令形。月やは物を思はする。「やは」は反語の助詞。「思はする」は「やは」を受けて連体形で、ここで切れる。かこち顔なる「かこち」はかこつける、月のせいにする。ここは月にその罪を負わせるかのようなという意。

出典 千載集・恋五（九二六）、「月前恋といへる心をよめる」。作者 俗名は佐藤義清（のりきよ）。左衛門尉康清の子。鳥羽上皇に仕えて北面の武士となり、左兵衛尉となつたが、二十三歳の時、妻子を捨てて出家、円位または西行と号し、諸国を遍歴して歌を詠んだ。「願はくは花のもとにて春死なむそのきさらぎの望月（もちづき）の頃」という歌を詠み、かねての願いかなって、建久元年二月十六日、七十三歳で没した。家集を山家集という。多く、平明流暢で、ことばを飾らず、後鳥羽院は評して「西行はおもしろくして、しかも心も殊に深く、有りがたく出で来がたき方も共に相兼ねて見ゆ。生得の歌人と覚ゆ」といわれ、後の文学者に与えた影響は極めて大きい。千載集以下勅撰集に二百五十三首も入集している。参考 同作者の歌に「さびしさに堪へたる人の又もあれな庵（いおり）並べむ冬の山里」（新古今）「年たけて又越ゆべしと思ひきや命なりけりさやの中山」（同）「津の国の難波の春は夢なれや芦の枯葉に風わたるなり」（同）など、秀歌はすこぶる多い。

嘆く人が月に向かっての感懐である。恋の物思いをするのは自分からであって、月がそうさせるわけではない。そのことはよくわかっておりながら、月を見てみると、いかにも月が自分に嘆けといているかのように、涙が出て抑えられない。涙としてみれば、まるで月にその罪を着せてでもいるかのようだというのである。月をも涙をも擬人化して、嘆く人そのものはいかにも弱くはかないものとしてるのである。心に深く物思いをする人の、澄みわたる月に対しての情としては

八七
 村雨の露もまだひぬまきの葉に霧たち
 のぼる秋の夕暮
 寂蓮法師

にわか雨が過ぎ去って残っていた露さえもまだ乾かないで付いている槇(まき)の木の葉に、霧がまた立ちのぼって来る秋の夕暮よ。

村雨にわか雨。露もこの露は、にわか雨によってできた水滴である。「も」は強意で、さえも。まだひぬ「ひ」は上一段活用の動詞で終止形は「ひる」。「ぬ」は打消助動詞。まだ乾かない、すなわち露が消えないのである。にわか雨が止んでからまだ短時間の情景である。まきの葉は深山に産する。霧たちのぼる雨後の霧が木の葉のあたりに上ってゆく。秋の夕暮平安朝以来、一年中で最もさびしい趣がある時とされている。名詞止め。

杉、檜などの槇は深山に良材を産するのである。また、霧たちのぼる情景は深山がふさわしい。この歌は深山を想像させる。秋の日のさびしい夕暮に、突然にわか雨が降って来て、しばらく過ぎていってしまった。後には、槇の葉に水玉の露が残されていた。それは水色の玉で、暗緑色の槇の葉の中では、一段と目立ち、さらさらと光っていたのである。

う。雨が止んでからに程も経たないので、雨の露は乾かないで光っている。まだ村雨の動きが十分に終わっていないのに、また、雨の後に発生した霧が、露が光っている木の葉を包んで山を上って来る。ものさびしい秋の夕暮の出来事である。秋の夕暮の名詞止めはこの時代の流行であるが、それは最もさびしい情景を表わすものであった。静かであわれのある幽玄な自然の情景を客観的に描いているが、そこに注目されるのは、動いている自然をとらえていることである。村雨が去り、まだ霧が動いている時にまた霧がのぼってくる。作者は、自然の動きに注目している。彼は生きている自然を感じているのである。作者は「さびしさはその色としもなかりけり槇立つ山の秋の夕暮」(新古今集・秋上)とも歌っているが、深山に幽玄を感じた人である。

出典 新古今集・秋下(四九二)、「五十首の歌奉りし時」。作者 寂蓮法師。俗人の時の名は藤原定長といい、中務少輔に任じられた。俊成の兄弟の僧俊海の子で、俊成の養子となったが、定家の子が生まれたので離縁し、三十歳余りで出家し、高野山、嵯峨等に住んだ。和歌所の寄人になり新古今集の撰者を命ぜられたが完成前に没。



冷泉為理筆

八八
 難波江の芦のかりねの一夜ゆるみをつ
 くしてや恋ひわたるべき
 皇嘉門院別当

難波の入江に生えている芦の刈りあとの根の一節(ひとよ)、そのように旅の宿でのほんの仮寝の一夜(ひとよ)のために、難波の露標(みおつくし)ではないが、身を尽くしていつまでも恋いつづけなければならぬことだろうか。かりそめの契りであったのに、あの人のことが忘れられそうにない。

難波江 今の大阪の入江。百人一首十九番「難波湯みじかき芦のふしの間も」とあったように、難波江は芦の名所であった。芦のかりねを刈ったあとの根の意と、旅先での仮寝の意とがかけてある。一夜ゆるみ「ひとよ」には「一夜」と「一節」とがかけてある。「節(よ)」は竹や芦の節と節との間をいう。みをつくしてや「露標(みおつくし)」の意と「身を尽くし」の意とがかけてある。露標は難波の海の所々に立てられていた航路標。今の大阪市のマークもこれにちなんだもの。百人一首二十番の歌参照。「身を尽くし」は命のある限りという意。「や」は疑問の助詞。恋ひわたるべき「わたる」は動作の継続する意。「べき」は当然の助動詞「べし」の連体形。上の助詞「や」を受けた結びとなっている。

「旅宿逢恋」という題で詠んだものである。旅宿でのついはかない契りであったのに、あれ以来どうしてこんないつまでも思いつづけるようになってしまったことか、と男にはげしい恋ごころをもちつづける女が自分の心をなかなば怪しみながら、どうにもならぬ恋の衝動を歌っているのである。「難波江の芦」は次の「かりね」にかかり、「かりね」は掛詞で「芦」の縁語となり、「みをつくし」も掛詞で、同じく「難波江」の縁語。技巧の粋をこらした歌で、まことに手がこんでいるが、歌としては女ごころのはげしさのこめられた作で、當時は達者の歌として認められたことであろう。

出典 千載集・恋三(八〇六)、「摂政、右大臣の時の家の歌合に『旅宿逢恋』といへる心をよめる」。作者 皇嘉門院は法性寺関白忠通の娘藤原聖子、崇徳院女御になられた方で、作者はこの方に仕えた別当(女官)で、大皇太后宮亮俊蔭の娘というのみで、他は伝未詳である。千載集以下勅撰集に九首入集しているだけである。参考 契沖は「難波わたりにて知らぬ人にいひよりに逢ひたる心なり」といい、真淵は「一首の様を思ふに、只旅の宿にて思ひがけぬ逢ひごとせし意なるべし」といっている。



冷泉為理筆

八九
 玉の緒よたえなばたえねながらへば 忍
 ぶることの弱りもぞする
 式子内親王



筆為泉冷

私の命よ、死ぬものなら死んでしまえ。この上生きていると、恋を隠すことが力弱くなりますよ。

玉の緒よ命。玉をつないでおく緒は短かいので命に似ているところから名。「よ」は命に呼びかけている。たえなばたえね「絶ゆ」は、切れること。ここでは死ぬこと。「緒」の縁語である。「な」は完了助動詞「ぬ」の未然形。「ね」は同じく命令形。死にそうだと思ひ、更にこれを反省して、死んだ方がよいと思う心理状態を示している。ながらへば「長く生きて」と。忍ぶこと「恋を隠すこと」。「忍ぶ」は、四段と下二段の二つの活用があつて、ここは下二段。隠すこと。弱りもぞする「弱るよ、の意。「もぞ」は危ぶむ気持を示す。

男を恋しているが、恋を明かすことができない。それは、自分の名を重んじるためである。その苦しさに堪えきれなくて、死んでしまひそうに思う。その時に、死ぬことに反省を加えた。「たえなばたえね」はそれを表わしている。そして、このまま生き続けていれば、いよいよ弱くなつて、隠して堪えしのんでいることが出来なくなる。それでは名を

けがすことになるから、私は死んでしまつた方がよいというのである。新古今集では忍恋という題詠になつてはいるが、実情に即した歌らしく思われる。忍ぶ恋の苦しみは堪えに堪えていたが、いまは最高潮に達した。恋心に負けて汚名を流すか、負ける前に死んでしまふか。その一つを選ばねばならぬ。苦しみのために死にそうになつたのなら、一層のこと死を選んだ方がよいという。悲壮な強烈な感情を歌っている。いかにも実感的で、技巧を重んじた時代の歌らしくない。しかし、実感を重んずることも新古今時代の新風の一面であつた。

出典「新古今集・恋一（〇三四）、「百首の歌の中に忍恋を」。作者「式子は「しよくし」とも読む。後白河天皇の第二皇女、また、第三皇女ともいう。以仁王、殷富門院等の同腹の妹。平治元年、賀茂斎院となられたが、病氣のため嘉応元年辞され萱斎院と申した。建久八年出家されて法名を承如法といつた。建仁元年に没。歌は藤原俊成に学び、新古今集時代初期の代表的女流歌人である。哀切、純情な歌風は人をひく力を持つ。平安朝末の戦乱の中に生きられ、以仁王の戦死に会う等悲痛な生涯だつたと思われる。

つれないあの人にお見せしたいものです。雄島の漁夫の袖でさえ、波で濡れに濡れた色は別に変わりはありませんのに、かなわぬ恋ゆえに血の涙で濡れた私のこの袖を。

見せばやな「ばや」は希望をあらわす助詞。「な」は感動の助詞。雄島の蟹「雄島」は宮城県松島湾の島の一つ。「あま」は漁夫。袖だにも「袖でさえも。濡れにぞ濡れし」ひどく濡れたという意。「し」は過去の助動詞「き」の連体形で、上の「ぞ」の結び。ここで文は切れて、「しかし」と、下へかかつてゆく心持である。

この歌は源重之の「松島や雄島の磯にあさりせし蟹の袖こそかくは濡れしか」（後拾遺・恋四）を本歌としている。すなわち本歌取の歌である。本歌の意は「松島の雄島の磯に漁をした漁夫の袖のように、物思ひの私の袖は涙でこんなに濡れてしまつた」というのだが、この歌はこの本歌の単純な内容をさらに曲折をつけて複雑にし、その漁夫の袖でさえ、ひどく濡れることは濡れても、色までは変わるまい、それに比して私の袖はどのように涙で色まで変わってしまったと、一步を進めているのである。本歌取の歌としては上乘の

作であろうが、多少誇張に過ぎた作といえはばいえるものである。

出典「千載集・恋四（八八四）、「歌合し侍りける時、恋の歌とよめる」。作者「殷富門院は後白河天皇の第一皇女亮子内親王。百人一首「玉の緒よ」の作者式子内親王の同母姉。作者は従五位下信成の娘で、殷富門院に仕えた。歌人としては当代一流に属し、多くの歌合に出席し、定家と親交があつたことが、定家の日記「明月記」によつて知られる。没年は未詳。千載集以下勅撰集に六十五首入集。参考「古今集に、紀貫之の詠んだ「白玉と見えし涙も年経（ふ）ればからくれなるにうつろひにけり」という歌があり、いわゆる、血の涙とか血涙とか、また紅涙とかいうことは中国の漢籍から来て、古くから歌文に見える。伊勢物語にも「男、血の涙を流せども」などがある。この歌はそれをいっているのである。同じ作者の他の歌には「春風の霞吹き解く絶えまより乱れてなびく青柳（あおやぎ）の糸」（春）「眺めつつ思ふに濡るる袂かな幾夜かは見む秋の夜の月」（秋）「わが門の刈田のおもにふす鳴（しぎ）の床あらはなる冬の夜の月」（冬）などがあり、これらはすべて新古今集に撰入されている。

見せばやな雄島の蟹の袖だにも 濡れに
 ぞ濡れし色はかはらず
 九〇
 殷富門院大輔



雄島(御島)碑

きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに
 かたしきひとりかもねむ
 衣ころも

後京極摂政前太政大臣

冷泉為理筆



【口歌】こおろぎが鳴いている、霜が置く夜の寒い筵（むしろ）の寝床（ねどこ）に着物の片袖だけを敷いて、一人で寝ることだろうかなあ。

【語釈】きりぎりすこおろぎ。鳴くや「や」は間投助詞で強意。霜夜霜が置く寒い夜。さむしろさ筵の意で、敷きもの。これが寝床である。「寒し」を懸けている懸詞。衣かたしき衣片敷き。着物の片方の袖を床の上に敷いて寝る。これは一人で寝る時の寝様である。二人で寝る時はお互いに、片方の袖を合わせて床に敷いて寝る。本歌取り。本歌は「さ筵に衣片敷き今宵もや我を待つらむ宇治の橋姫」（古今集、巻十四・恋四・よみ人知らず）かも「か」は疑問、「も」は強意のそれぞれ助詞。「ひとりかも寝む」は本歌取。本歌は、「足引の山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をひとりかも寝む」（拾遺集、巻十三・恋三・人麿）。

【鑑賞】秋の末の霜が下りる寒い夜である。こおろぎが庭で鳴いている。さびしい声である。筵の床をしいて寝ようとする時の感慨である。一人でさびしく、長い秋の夜を寝なければならぬ嘆きをいっている。これは、当時、しみじみした

趣があるとしたあわれを一方では味わうことであった。調べは強く、感動の強さを示しており、初、二句の具象は、あわれの感を高めている。この歌は、二首の本歌を使っている、珍しい本歌取りの歌である。古今集の歌からは「さ筵に衣片敷き」を取った。この歌は恋の歌で、橋姫が男を待っているのである。この歌の方は、秋の歌で、一人で寝て秋のあわれを味わおうというのである。また、人麿の歌からは「ひとりかも寝む」を取った。これも恋の歌であるが、それを秋の歌に変えている。これは本歌取りの方式になかったものである。本歌に較べるとこの歌はどの歌よりも具象的で実際的にしている。これが新古今の歌の特質でもある。この歌は秋の歌であるけれども、本歌との連想から恋の気分もかすかにたただよって、それだけ浪漫的になっている。

【参考】出典新古今集・秋下（五一八）、「百首の歌奉りし時、摂政太政大臣」。この百首は正治二年院初度百首歌。秋篠月清集。作者藤原良経（よしつね）。摂政兼実の子。右大臣を経て建仁二年摂政、元久元年従一位太政大臣、建永元年急死。俊成門下。新古今時代代表歌人。和歌所寄人。新古今集仮名序筆者。家集に秋篠月清集がある。

わが袖は潮干に見えぬ沖の石の
 知らね乾く間もなし
 二条院講岐

冷泉為理筆



【口歌】私の袖は、ちょうど海の潮がひいた時にも見えない沖の石のように、人は気づかないけれども、かわく間（ま）とてありません。

【語釈】潮干に見えぬ海潮がひあがった時でも見えないという意。下の「沖の石」にかかる。沖の石の沖にある石のように。「沖」は「磯」に対する。磯の石なら潮が引けばあらわれて見えるが、沖の石は常に見えない。人こそ知らね人こそ知らぬが。「ね」は打消の助動詞「ず」の已然形で、上の「こそ」を受けて結びとなっているが、こういう場合は逆接として下へつづく。乾く間もなし涙で濡れてかわくひまもない。

【鑑賞】「石に寄する恋」という題で詠んだ歌である。片思いの女の恋ごころを石に寄せるにあたって、「沖の石」という、永遠に水中に没して人に気づかれぬものによって悲しみをあらわした比喩の巧みさは、なかなか着想奇抜といえる。この比喩は当時の歌人には評判となつたらしく、作者はこの歌から「沖の石の讃岐」と呼ばれたという。

【参考】出典千載集・恋二（七五九）、「寄石恋といへる

心」。二条院讃岐集、初句「わが恋は」。作者二条院は後白河天皇の第一皇子で、保元三年即位、永万元年に二十三歳でなくなられた方。作者はこの二条院にお仕えした女官で、源三位頼政の娘である。頼政は武人として歴史上名高い人物であるが、また歌人としてもすぐれていた人である。讃岐はこの血を受けていたのであろう。二条院崩御の後、後鳥羽院の中宮に仕えたりして、宮仕えをつづけていたようである。当時のおもな一流の歌人と肩をならべて参加しているし、百人一首「玉の緒よ」の作者式子内親王と並び称されたほどの女流歌人として許されていた人である。没年はよくわからないが、高輪で世を去つたらしい。千載集以下勅撰集に七十四首入集。参考作者の父頼政の家集に「ともすれば涙に沈む枕かな塩満つ磯の石ならなくに」「なごの海潮干（ひ）潮満つ磯の石となれるか君が見えかくれする」「いとほるる我がみぎには離れ石のかかる涙にゆるぎげぞなき」などの作があり、契沖はこれらを挙げて「かやうに詠める人の娘なれば父の歌の心を得て、おして詠めるか」といっている。父の詠んだ「磯の石」「離れ石」などにヒントを得て、さらに一歩を進めたというのである。

世の中は常にもがもな渚漕ぐ
の綱手かなしも

蟹の小舟
鎌倉右大臣

壽福寺藏



世の中はいつも常住不変であってほしいものだ。このなぎさを漕いでゆく漁夫の綱手を引いてゆく様子がしみじみと身にしみて趣深いことだ。この景色をいつも見られるように。

常にもがもな川いつも変わりなくあってほしいものだという意。世の無常でないようにと願う心持である。「がも」は願望、「な」は詠嘆の助詞。蟹漁夫。綱手舟のへさきにつけて、引くための綱。かなしも川「かなし」は愛する心と悲しむ心とある。ここはその両方を兼ねた心持である。

万葉集巻一に「河上のゆつ岩むらに草蒸さず常にもがもな常(とこ)をとめて」、古今集巻二十に「陸奥(みちのく)はいづくはあれど塩釜の清漕ぐ舟の綱手かなしも」という歌があり、これらの影響が考えられる。特に古今集の歌は直接のよりどころとなっているであろう。古今集の歌は陸奥の諸処を見、とり分け塩釜の清を綱手を引いてゆく舟のありさまに旅愁を覚えた人が都に戻って人に語っている趣があって、この歌を作者は念頭に置いたものと取れる。作者の心の

底には無常感というものがあり、たまたま渚を漕ぐ舟の様子に瞞目して、そのあわれな様に感じ、この様をまた見ることが出来るだろうか、世の常なることを願ったものと考えられる。

出典新勅撰集・露旅(五二五)、「題しらす」。作者源実朝。征夷大将軍頼朝の二男。後鳥羽天皇の建久三年に生まれ、兄頼家の後を継いで、十二歳で征夷大将軍となり、二十七歳で右大臣、翌七年正月、鎌倉鶴が岡八幡宮に右大臣拝賀の礼を行なう時、甥公暁(くぎょう)のため暗殺された。二十八歳。歌は定家に学び、作品を京都に送って、その指導を乞うた。「近代秀歌」や「万葉集」を定家から贈られもした。しかし、やがて万葉風の歌を詠んで、そこに実朝の特色が見られるようになった。家集を「金槐集」という。正岡子規は「人丸のちの歌よみは誰かあらむ征夷大将軍源の実朝」という歌を作った。新勅撰集以下勅撰集に九十一首入集。参考「実朝作に「箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波の寄るみゆ」「大海の磯もどるに寄する波わかれて砕けてさけて散るかも」「吹く風は涼しくもあるかおのづから山の蟬鳴きて秋は来にけり」など秀歌が多い。

吉野山の秋風が吹いて、夜が更(ふ)けると吉野の古里は寒くなり、その中で着物を打つ音が聞こえるよ。

み吉野川「み」は賛美する接頭語。さ夜ふけて川「さ」は接頭語で、夜がふけて。ふるさと川以前に都があった所。吉野の里は古里である。寒く川寒くなって。本歌は「み吉野の山の白雪つもるらしふる里寒くなりまさるなり」(古今集、巻六、冬、坂上是則) 衣うつなり川着物にする布を、砧(きぬた) (石、または木で造ってある)の上で、槌で叩いて、柔らかくすることを、衣をうつという。

作者は吉野の里に宿っている。吉野には秋風が吹いている。夜が更けるに従って、山の秋風が吹くので吉野の里も寒くなり、その中で着物の布を打つ砧の音が聞こえて来るのである。これは秋の夜のおわれである。そのあわれな情景を具象化したのである。実情に即して情景を歌っているのが、実感の深いものになっている。新古今集時代に発達した叙景の歌の一つである。二句を名詞で止めて、「吹く」ことを暗示し、「ふるさと寒く」は、秋風が吹くことによって寒くな

ることを暗示して、説明をさけて描写にしている。本歌取は、本歌が冬であるのを、秋にして変化させている。本歌と比較して見ると、山の白雪を秋風にし、本歌が「ふる里寒くなりまさるなり」と叙情にしているのを、「衣うつなり」と実際的なものに加えて描写にしているのが注意せられる。これは、ひいては古今集と新古今集の違いともいえる。

出典新古今集・秋下(四八二)、「掃衣(とうい)の心を」。作者藤原雅経。刑部卿頼経の子。承久二年参議。同三年(三三三)五十二歳で没。和歌所の寄人。新古今集撰者の一人。蹴まりの名手で師範家となった。家集に明香井和歌集がある。参考川本歌取について。古歌の中の語句を使って新しい歌を作る技巧をいう。取る句は、短歌を形造っている句を単位として、一句から三句までの語句を取る。最高のものでも三句までである。大抵一句、二句である。これは明らかに本歌取であることを分かって取るので盗むのではない。それだけに、本歌のままの内容ではいけないので、必ず意味を変化させる。本歌が四季の歌であれば本歌取の歌では恋の歌にするというようなことである。それによって、本歌にある気分を本歌取で連想させる。

み吉野の山の秋風さ夜ふけて
寒く衣うつなり

ふるさと
参議雅経

九四

吉野川



九五

おほけなく憂き世の民におほふかな
我が立つ袖に墨染の袖
大僧正慈円

比叡山



身分不相応にも、私はこの世の中の人々の上に蔽いかけることだ、比叡山に住むわが墨染の袖を。

口訳

おほけなくもったいなく。身分不相応に。憂き世の世。おほふかな。おほふは法華経の「法衣ヲ以テ之ヲ覆フ」から出たいい方で、多くの人の憂苦を蔽い救うこと。我が立つ袖は伝教大師の比叡山に根本中堂を建てようとした時に詠んだ「阿耨多羅三藐三菩提（あのかたらさんみやくさんぼだい）の仏たち我が立つ袖に冥加（みょうが）あらせ給へ」という歌によるもので、比叡山をさす。「阿耨多羅三藐三菩提」は、もと古代の印度語で、仏の最上の妙道をいう。「袖」は木こりの粗末な小屋で、根本中堂を卑下した言い方。「立つ」には「墨染の袖」の縁で「裁（た）つ」の意も掛けてある。墨染の袖は僧衣の袖で、「墨」は「住み」に掛けてある。

参考

この歌は作者がまだ若年のころ、比叡山の僧として衆生済度の覚悟を感慨をこめて歌ったものと思われる。延暦寺の僧としてうき世の人に慈悲を垂れることを、いかにも謙虚な心持で、それでいて感動的に歌いあげているのである。

参考

出典は千載集・雑中（二一三四）、「題しらず」。作者は知足院関白忠実の孫。法性寺入道忠通の六男。九条兼実の弟で、良経の叔父にあたる。十一歳の時、延暦寺座主覚快法親王に師事、十四歳で出家、初めは道快といい、後慈円と改めた。吉水和尚ともいう。建久三年、三十八歳で権僧正天台座主となって以来、四度も座主となり、当時僧としては最高の位置にあり、宮中の信任も厚く、嘉禄元年（三五）九月没。七十一歳。後、勅をもって慈鎮のおくり名を賜わった。歌人としてもすぐれ、家集に拾玉集があり、愚管抄という史書もある。西行に次いで新古今集にはその作が多く採られている。多作速吟の歌人で、当代歌壇の指導的な人物であった。千載集以下勅撰集に二百五十五首入集。参考は「後鳥羽院御口伝」に、式子内親王・良経と並べて「近き世にとりては殊勝なり」とその歌を賞賛されている。「秋深き淡路の鳥のありあけにかたぶく月を送る浦風」（新古今）「眺むればわが山の端に雪白し都の人よあはれとも見よ」（同）「照る月の光とともに流れ来て音さへ澄める山川の水」（統拾遺）など。

おおらかな張りをもった一首といえよう。百人一首の歌の中では特異な歌で、述懐の作としても珍しいものである。

九六

花さそふ嵐の庭の雪ならで
のはわが身なりけり
ふり行くも
入道前太政大臣

筆為景泉



桜の花を誘って山風が庭の雪のように散り降らせているが、降りゆく、いや古りゆくものは実はそれではなくて、このわが身なんだなあ。

口訳

花さそふ。桜の花を誘って散らす。嵐の庭。嵐は山風。山風の吹く庭の意をつづめていった。雪ならで。「雪」は散る花をたとえた。「で」は「ずして」のつづま。た言い方。ふり行くものは「ふり」は「降り」の意で、上の「雪」を受け、また「古り」の意を兼ねて、下の「わが身」にかかっている。

参考

詞書には「落花をよみ侍りける」とあるが、「雑」の部にはいっているとおり、この歌は単に風景としての落花を詠んだものではなく、人生的な嘆きを主にした作と見られる。庭前、ひとしきり吹く風に雪のごとく散る花に対して、わが身の老いゆくのを嘆いたものである。無常の風にははらとはかなく散ってゆく花はさながらわが身の老いゆくのを象徴しているかのようにだという感慨は順直なものではあるが、想は別に新しいものではなく、技巧としても、「花」を「雪」と見、「ふり」に二様の意義を持たせる掛詞の技法もさして

参考

出典は新勅撰集・雑一（二〇五四）、「落花をよみ侍りける」。作者は藤原公経（きんつね）。内大臣実宗の二男で、定家の妻の弟。源頼朝の義弟一条能保の娘を妻とし、鎌倉方と結んだために、後鳥羽院にうとんぜられて勅勘の身となったが、後実朝の弁明により許された。しかし、後には形勢逆転するにおよんで、累進して内大臣を経て、太政大臣、従一位に進み、京都の北山の山荘を改修して西園寺（さいおんじ）を建立、さまざまの栄華を尽くした。世に西園寺太政大臣と呼ばれ、西園寺家の祖である。新古今集以下勅撰集に百十二首入集。参考は契沖は「雪といふにつけて黒髪の変る色をも添へられたるか」といっているが、さまでの意はあるまい。また契沖は「嵐の庭とある詞少し後の連歌めきて聞ゆるにや」といっているが、嵐の吹く庭というのを省略した修辞法をいっただけのものであろう。

九七
来ぬ人を松帆の浦の夕なぎに
塩の身もこがれつつ

焼くや藻
権中納言定家

集古十種所収



待っていても来ない人を待つ私は、ちようど松帆の浦で夕なぎのころ焼く塩が火にこがれるように、熱い恋の思いに身もこがれがれしていることだ。

松帆の浦 淡路島北端、岩屋村の浜。「松」に「待

つ」が掛けてある。夕なぎ 夕方に風がやむこと。瀬戸内海沿岸は夕なぎのはげしい所である。焼くや藻 塩の「や」は詠嘆の助詞。「藻塩」は塩のこと。海藻に塩水を注ぎ、日にはして塩分を濃くした水を煮て塩を作る。火で煮ることから、その縁で、「焼く」「こがる」といった。ここは万葉集の巻六にある笠金村の長歌「淡路島、松帆の浦に、朝なぎに、玉藻刈りつつ、夕なぎに、藻塩焼きつつ、あま乙女、ありとは聞けど」を本歌としている。身もこがれつつ 藻塩を焼くということと、恋人を待って恋いこがれるということがかけてある。

掛詞や縁語を縦横に駆使しながら、意味の不自然さはなく、かえって恋人を待ちこがれるやるせなさがたたえられている歌である。「松帆の浦」以下「藻塩の」までは一種の修辭上の序詞ではあるが、待人のくすぶったようない

らいらした心情をいうのにふさわしいイメージをもったものとして効果的である。万葉の本歌の取り方も巧みで、作者自身も自賛歌として、その撰である新勅撰集にも入れ、また百人一首にも取り入れたものであろう。

出典 新勅撰集・恋三(八五一)、「建保六年内裏の歌合の恋の歌」。作者 藤原俊成の第二子。侍従、参議を経て権中納言となった。晩年に出家して明静といった。仁治二年(二五)没。八十歳。多才多能で、新古今集および新勅撰集の撰者で、家集に拾遺愚草、歌論書に近代秀歌、毎月抄、僻案抄などがあり、その日記は明月記という。当代歌人の第一人者で、象徴的歌風を樹立した。千載集以下勅撰集に四百五十六首入集。参考 室町時代の歌僧正徹は「定家を難せん輩は冥加(みよすが)もあるべからず、罰を蒙るべき事なり」といったが、後世定家を尊信すること神のごとくであった。「春の夜の夢の浮橋とだえして峯に別るる横雲の空」(新古今)「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苦(とま)屋の秋の夕暮」(同)「旅人の袖吹き返す秋風に夕日さびしき山のかけ橋」(同)など、秀歌として、その芸術性の高く評価されるものが多い。

ろう。

風がそよそよと榎(なら)の葉をそよがせている、この加茂のならの小川の夕暮は、もう涼しくて秋らしい感じがするが、この小川のほとりで行なわれているみな月ばらえの様子を見ると、それだけがまだ今日は夏だという証拠なのだ。なあ。

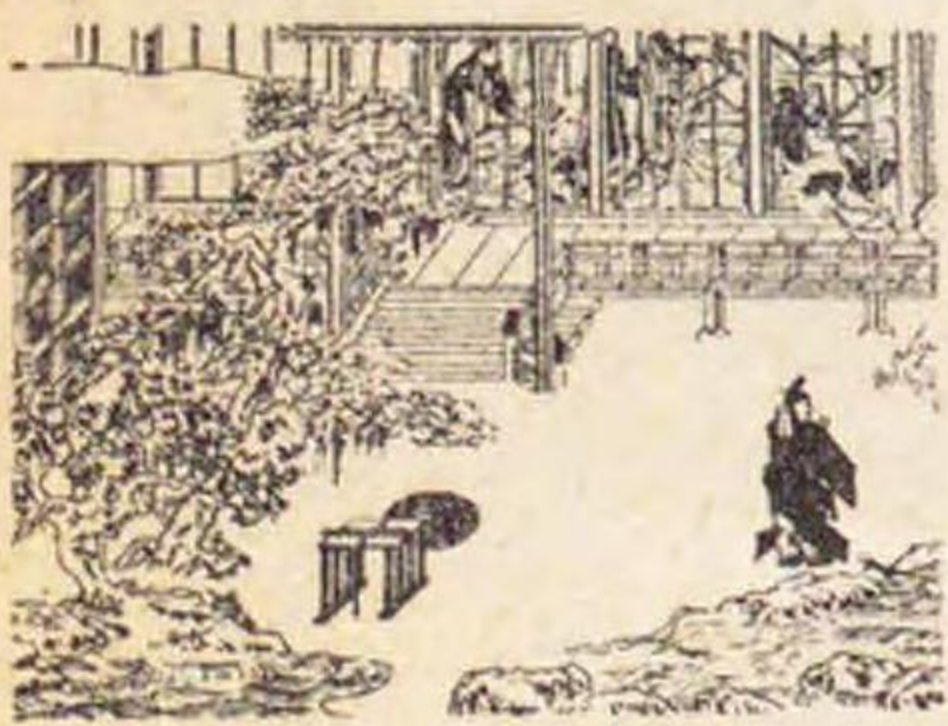
ならの小川 京都上賀茂神社の中を流れる御手洗川(みたらしがわ)。「榎」の木をかけてある。みそぎ 体の罪けがれを払うことで、ここは陰暦六月晦日(みそか)、つまり夏の終りの日に行なう六月祓(みなつきばらえ)の神事をいう。しるしなりけり 、「しるし」は証拠で、夏である証拠をいう。

詞書によれば屏風歌(びょうぶうた)で、六月祓の様

出典 新勅撰集・夏(一九二)、「寛喜元年女御入内の屏風」。作者 権中納言藤原光隆の子。侍従から累進して宮内卿となり、従二位に進んだが、病のため出家、仏性と号した。壬生(みぶ)に住み、従二位であったので、壬生の二位といわれ、その家集を壬二集(みにしゅう)という。若くして寂蓮の養子となり、ともに俊成に歌を学んだ。新古今集撰者の一人となり、定家と並び称された。後鳥羽院隠岐遷幸後も常に歌を奉っていた。嘉禎三年(二二七)没。八十歳。千載集以下勅撰集に二百八十一首入集。参考 戸田茂睡はこの歌を「何のむづかしき事もなく、すらりと云ひ出でたる詞、時節の景氣その所に応じ、よろしき歌の手本なるべし」といっているが、そのとおりの秀歌である。詞書によると藤原道家の娘(後に藻壁門院という)が後堀河天皇の中宮として入内(じゆだい)される時の御屏風歌であるが、絵にこだわらぬ生新の気がある。同じ作者の「梅が香に昔を問へば春の月答へぬ影ぞ袖にうつれる」(新古今)「下紅葉かつ散る山の夕しぐれ濡れてやひとり鹿の鳴くらむ」(同)「志賀の浦や遠ざかりゆく波間より水りて出づる有明の月」(同)など、秀歌として名高い。

九八
風そよぐならの小川の夕暮は
夏のしるしなりける
みそぎぞ
従二位家隆

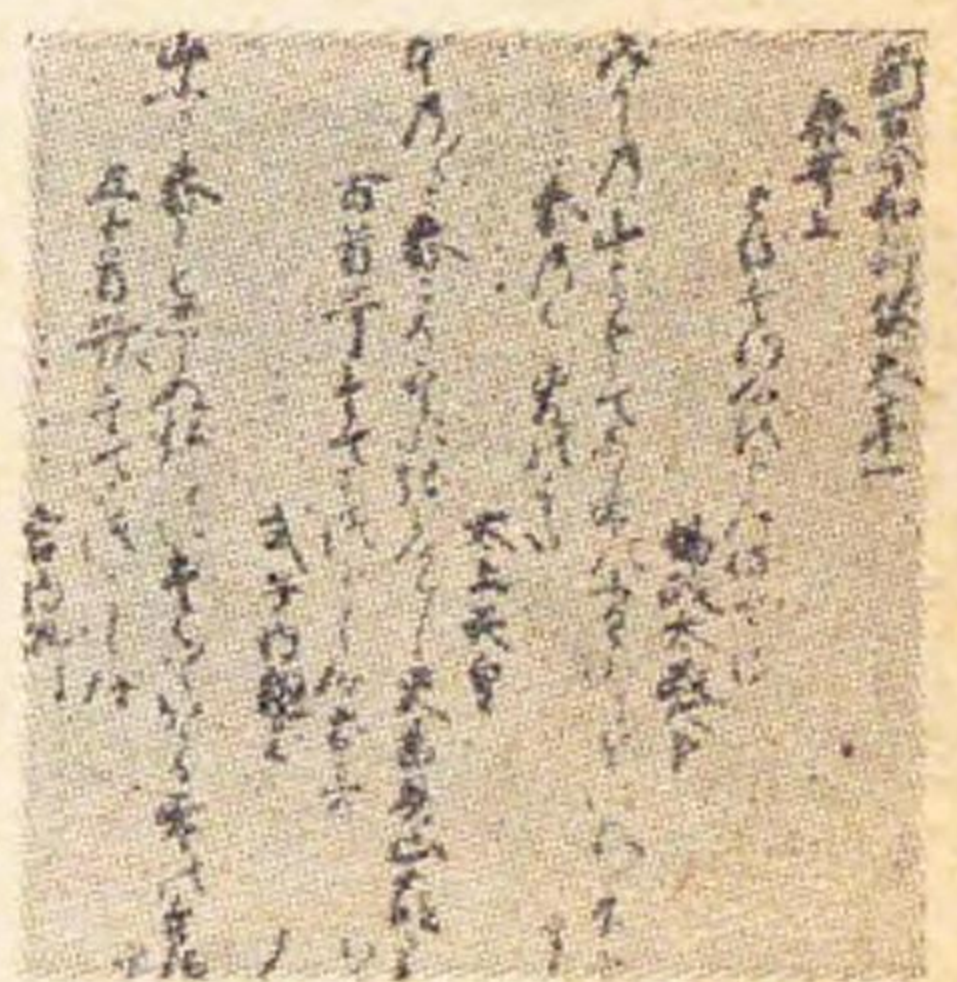
六月祓



九九

人もをし人もうらめしあぢきなく世を
思ふゆゑに物思ふ身は 後鳥羽院

新古今集写本



口訳 時には人もいとと思うことがあり、時には人もうらめしいと思うことがある。つまらなくこの世を思うゆゑに物思いをするこの私は―。

語釈 人もをし||人も愛(を)しで、人を愛する心。あぢきなく||味気なく。つまらなく。

鑑賞 述懐の歌である。後鳥羽院御製に「奥山のおどろが下も踏み分けて道ある世ぞと人に知らせむ」(新古今)「われこそは新島守よ隠岐の海の荒き波風心して吹け」(増鏡)などあって、承久の乱を背景とした当時の院のご生活のただならぬものがあったことをしのばせる。この百人一首の歌もそうしたころの院のご心境のうかがえる作で、世を嘆き、すべてが味気なく思われることから、とかく物思いをする自分には、或る人が親しく思われることがあるかと思うと、また時に、愛憎常ならぬのも所詮、わが世を味気なく思うことに由来するのかと、院ご自身の深い内面を語ろうとされた歌である。沈痛な御製である。「人」をそれぞれ「忠臣」「逆臣」と狭く限る必要はあるまい。同じようなご心境を歌われた御製に

「憂き世いとふ思ひは年ぞつもりぬる富士のけぶりの夕ぐれ
の空」「夏山の茂みに這へる青つづら苦しや憂き世わが身ひ
とつに」などがある。

参考 出典||統後撰集・雑中(一一九九)、「題しらず」。

作者||第八十代高倉天皇の第四皇子。寿永二年に四歳で即位、在位十五年中には建久の政変あり、讓位後、承久三年、北条氏追討の兵をあげられたが失敗、隠岐に移され、同地で十九年を過ごされ、延応元年(三三〇)崩御。御寿六十歳。書画・管絃・蹴鞠・刀剣等の諸道にすぐれ、特に歌道に秀でられ和歌所を再興、新古今集をご親撰になり、千五百番歌合をはじめ、多くの歌合を催され、従って当時は優秀歌人が雲の如く現われ、いわゆる新古今時代を現出した。隠岐遷幸後も、新古今切継をされ、隠岐本を制定された。「御鳥羽院御口伝」はその歌論としてすぐれた御作である。参考||御製に「見渡せば山も霞む水無瀬川(みなせがわ)夕べは秋と何思ひけむ」(新古今)「鶯の鳴けどもいまだ降る雪に杉の葉白き逢坂の山」(同)「さびしさはみ山の秋の朝ぐもり霧にしをる楨(まさ)の下露」(同)などの秀作がある。淀川のほとり、水無瀬川は院をおまつりしたところである。

口訳 宮中の古び荒れはてた軒端の忍ぶ草、それを見るにつけても、いくらしのんでもしのび尽くせない遠いなつかしい昔の御代だなあ。

語釈 百敷や||宮中の。皇居の。「百敷」は古く、「百敷の」||として「大宮」の枕詞であったが、後には大宮そのものの意にも用いられた。しのぶにも||「しのぶ」は「忍草」(羊歯植物の一種)と、昔をし、のぶ意とが掛けてある。なほあまりある||いくらしのんでもしのび切れない。昔||宮殿に忍草の生えなかつた昔、すなわち、例えば世のよく治まった延喜・天曆(醍醐・村上兩帝の年号)などの聖代をさしている。

鑑賞 この御製は建保四年、御年二十歳の御作である。北条氏によって佐渡へ遷幸せしめられる前の御作であるが、若くしてすでに皇居の衰微を深く嘆かれた心情のうかがえるものである。軒端の忍草は恐らく眼前の実景であったのであるが、すでに現実に求めがたいものとなった世界をはかなくあこがれる気持がくみとられる。前の後鳥羽院の御製ともに見過ごしがたい一首である。香川景樹はこの御製に「さし

もめでたく富み榮えつる大宮も、いと物寂びたる此頃の大御代のさま、面影に見ゆる心地して、いとも悲しき御製なり。かくもあらびたる大御代に出させ給ひし御宿世の拙(つたな)きには、上りたる世の大宮をば、いかになつかしくも悲しくも忍ばせ給ひけん」と評しているが、そのとおりである。

参考 出典||統後撰集・雑下(一一〇二)、「題しらず」。

作者||後鳥羽院の第三皇子。幼年にして、柔弱な御兄土御門天皇に代わって即位、承久三年、二十五歳で讓位、父院の御計画を助けられたが成らず、佐渡に流された。御在島二十二年、仁治三年(三三三)四十一歳で崩御。歌は主として定家に師事され、その風を受けられたところが多い。歌学書に八雲御抄(やくもみしよう)、故実書に禁秘抄の御著がある。統後撰集以下勅撰集に百五十四首入集。参考||後鳥羽院が隠岐の島で崩御された時、順徳院の御製に「同じ世の別ればなほぞ忍ばるる空行く月のよそのかたみに」(新拾遺)とある。「花鳥のほかに春のあり顔に霞みてかかる山の端の月」(統後撰)「秋風にまたこそ問はめ津の国の生田(いくた)の森の春のあけぼの」(統古今)など、同じ作者のすぐれた御製がある。

もも 百敷や古き軒端のしのぶにも
りある昔なりけり 順徳院

一〇〇

しのぶ草



付1 上句五十音順索引

歌の
番号

上句
(あ)の部

下句

作者

出典

一 充 あきかぜにたなびくものたえまより
 二 一 あきのたのかりほのいほのとまをあらみ
 三 三 あけぬればくるものとはしりながら
 四 三 あさぢふのをのしのはらしのぶれど
 五 三 あさぼらけありあけのつきとみるまでに
 六 三 あさぼらけうぢのかはぎりたえだえに
 七 三 あしびきのやまどりのをのしだりをの
 八 三 あはぢしまかよふちどりのなくこゑに
 九 三 あはれともいふべきひとはおもほえで
 十 三 あひみてのちのころにくらぶれば
 十一 三 あふことのたえてしなくばなかなかに
 十二 三 あまつかぜくものかよひぢふきとぢよ
 十三 七 あまのはらふりさけみればかすがなる
 十四 三 あらざらむこのよのほかのおもひでに
 十五 三 あらしふくみむろのやまのみぢばは
 十六 三 ありあけのつれなくみえしわかれより
 十七 三 ありまやまあなのさきはらかせふけば

もれいづるつきのかげのさやけさ
 わがころもではつゆにぬれつつ
 なほうらめしきあさぼらけかな
 あまりてなどかひとのこひしき
 よしののさとにふれるしらゆき
 あらはれわたるせぜのあじろぎ
 ながながしよをひとりかもねむ
 いくよねぎぬすまのせきもり
 みのいたづらになりぬべきかな
 むかしはものをおもはざりけり
 ひともみをもうらみざらまし
 をとめのすがたしぼしとどめむ
 みかさのやまにいでしつきかも
 いまひとたびのあふこともがな
 たつたのかはのにしきなりけり
 あかつきばかりうきものはなし
 いでそよひとをわすれやはする

左京大夫顯輔 〆新古今 〰
 天智天皇 〆後撰 〰
 藤原道信朝臣 〆後拾遺 〰
 参議 等 〆後撰 〰
 坂上是則 〆古今 〰
 権中納言定頼 〆千載 〰
 柿本人麿 〆拾遺 〰
 源兼昌 〆金葉 〰
 謙徳 〆公拾遺 〰
 中納言敦忠 〆拾遺 〰
 中納言朝忠 〆拾遺 〰
 僧正遍昭 〆古今 〰
 安部仲麿 〆古今 〰
 和泉式部 〆後拾遺 〰
 能因法師 〆後拾遺 〰
 壬生忠岑 〆古今 〰
 大式三位 〆後拾遺 〰

(い)の部

一 六 いにしへのならのみやこのやへざくら
 二 二 いまこむといひしばかりにながつきの
 三 三 いまはただおもひたえなむとばかりを
 四 三 うかりけるひとをはつせのやまおろし
 五 三 うらみわびほさぬそでだにあるものを
 六 三 おくやまにもみぢふみわけなくしかの
 七 三 おとにきくたかしのはまのあだなみは
 八 三 おほけなくうきよのたみにおほふかな
 九 三 おほえやまいくののみちのとほければ
 十 三 おもひわびさてもいのちはあるものを
 十一 三 かくとだにえやはいぶきのさしもぐさ
 十二 三 かぜそよぐならのをがはのゆふぐれは
 十三 三 かぜをいたみいはうつなみのおのれのみ
 十四 三 かささぎのわたせるはしにおくしもの
 十五 三 きみがためはるののいでてわかなつむ
 十六 三 きみがためをしからざりしいのちさへ
 十七 三 きりぎりすなくやしもよのさむしろに

(き)の部

けふこのへにほひぬるかな
 ありあけのつきをまちいでつるかな
 ひとつてならでいふよしもがな
 はげしかれとはいのらぬものを
 こひにくちなむなこそをしけれ
 こゑきくときぞあきはかなしき
 かけじやそでのぬれもこそすれ
 わがたつそまにすみぞめのそで
 まだふみもみずあまのはしだて
 うきにたへぬはなみだなりけり
 さしもしらじなもゆるおもひを
 みそぎぞなつのしるしなりける
 くだけてものをおもふころかな
 しろきをみればよぞふけにける
 わがころもでにゆきはふりつつ
 ながくもがなとおもひけるかな
 ころもかたしきひとりかもねむ

伊勢大輔 〆詞花 〰
 素性法師 〆古今 〰
 左京大夫道雅 〆後拾遺 〰
 源俊頼朝臣 〆千載 〰
 相模 〆後拾遺 〰
 猿丸太夫 〆古今 〰
 祐子内親王家紀伊 〆金葉 〰
 大僧正慈円 〆千載 〰
 小式部内侍 〆金葉 〰
 道因法師 〆千載 〰
 藤原実方朝臣 〆後拾遺 〰
 従二位家隆 〆新勅撰 〰
 源重之 〆詞花 〰
 中納言家持 〆新古今 〰
 光孝天皇 〆古今 〰
 藤原義孝 〆後拾遺 〰
 後京極摂政 〆新古今 〰

元 ころあてにをらばやをらむはつしもの
六 ころにもあらでうきよにながらへば
七 こぬひとをまつほのうらのゆふなぎに
八 このたびはぬさもとりあへずたむけやま
九 こひすてふわがなはまだきたちにけり
一〇 これやこのゆくもかへるもわかれては

(七) の部

吉 さびしさにやどをたちいでてながむれば
四 (七) の部

三 しのぶれどいろにいでにけりわがこひは
二 しらつゆにかぜのふきしくあきののは

(六) の部

一 すみのえのきしによるなみよるさへや
七 (六) の部

七 せをはやみいはにせかるるたきがはの
七 (七) の部

三 たくさこのをへのさくらさきにけり
二 たきのおとはたえてひさしくなりぬれど
四 たごのうらにうちいでてみればしるたへの
六 たちわかれいなばのやまのみねにおふる
八 たまのをよたえなばたえねながらへば
四 たらをかもしるひとにせむたかさこの

七 ちぎりおきしさせもがつゆをいのちにて
三 ちぎりきなかたみにそでをしぼりつつ
七 ちはやぶるかみよもきかずたつたがは

(ち) の部

三 つきみればちちにもこそかなしけれ
三 つくばねのみねよりおつるみなのがは

(つ) の部

三 ながからむころもしらすくろかみの
二 ながらへばまたこのごろやしのぼれむ
三 なげきつつひとりぬるよのあくるまは
六 なげけとてつきやはものをおもはする
三 なつのよはまだよひながらあけぬるを
三 なにしおはばあふさかやまのさねかづら
六 なにはえのあしのかりねのひとよゆゑ
九 なのはがたみじかきあしのふしのまも

(は) の部

九 はなさそふあらしのにはのゆきならで
二 はなのいろはうつりにけりないたづらに
七 はるすぎてなつきにけらししるたへの
七 はるのよのゆめばかりなるたまくらに

(ひ) の部

おきまどはせるしらぎくのはな
こひしかるべきよはのつきかな
やくやもしほのみもこがれつつ
もみぢのにしきかみのまにまに
ひとしれずこそおもひそめしか
しるもしらぬもあふさかのせき

いづこもおなじあきのゆふぐれ

ものやおもふとひとのとふまで
つらぬきとめぬたまぞちりける

ゆめのかよひぢひとめよくらむ

われてもすゑにあはむとぞおもふ

とやまのかすみたたずもあらなむ
なこそながれてなほきこえけれ
ふじのたかねにゆきはふりつつ
まつとしきかばいまかへりこむ
しのぶることのよわりもぞする
まつもむかしのともならなくに

あはれことしのあきもいぬめり
すゑのまつやまなみこさじとは
からくれなゐにみづくくるとは

わがみひとつのあきにはあらねど
こひぞつもりてふちとなりぬる

みだれてけさはものをこそおもへ
うしとみしよぞいまはこひしき
いかにひさしきものとかはしる
かこちがほなるわがなみだかな
くものいづこにつきやどるらむ
ひとにしたられでくるよしもがな
みをつくしてやこひわたるべき
あはでこのよをすぐしてよとや

ふりゆくものはわがみなりけり
わがみよにふるながめせしまに
ころもほすてふあまのかぐやま
かひなくたたむなこそをしけれ

凡河内躬恒 〆古今 〆
三 条 院 〆後拾遺 〆
権中納言定家 〆新勅撰 〆
菅 家 〆古今 〆
壬 生 忠 見 〆拾遺 〆
蟬 丸 〆後撰 〆

良 暹 法 師 〆後拾遺 〆

平 兼 盛 〆拾遺 〆
文 屋 朝 康 〆後撰 〆

藤原敏行朝臣 〆古今 〆

崇 德 院 〆詞花 〆

権中納言匡房 〆後拾遺 〆
大納言公任 〆拾遺 〆
山 部 赤 人 〆新古今 〆
中納言行平 〆古今 〆
式子内親王 〆新古今 〆
藤 原 興 風 〆古今 〆

藤 原 基 俊 〆千載 〆
清 原 元 輔 〆後拾遺 〆
在原業平朝臣 〆古今 〆

大 江 千 里 〆古今 〆
陽 成 院 〆後撰 〆

待賢門院堀川 〆千載 〆
藤原清輔朝臣 〆新古今 〆
右大将道綱母 〆拾遺 〆
西 行 法 師 〆千載 〆
清原深養父 〆古今 〆
三条右大臣 〆後撰 〆
皇嘉門院别当 〆千載 〆
伊 勢 〆新古今 〆

入道前太政大臣 〆新勅撰 〆
小 野 小 町 〆古今 〆
持 統 天 皇 〆新古今 〆
周 防 内 侍 〆千載 〆

三 ひさかたのひかりのどけきはるのひに
三 ひとはいさころもしらずふるさと
三 ひとをしひともうらめしあぢきなく

三 ふくからにあきのくさきのしをるれば

二 ほととぎすなきつるかたをながむれば

二 みかきもりゑじのたくひのよるはもえ
二 みかのはらわきてながるるいづみかは
二 みせばやなをじまのあまのそでだにも
二 みちのくのしのぶもぢずりたれゆゑに
二 みよしののやまのあきかぜさよふけて

二 むらさめのつゆもまだひぬまきのはに

二 めぐりあひてみしやそれともわかぬまに

二 ももしきやふるきのきばのしのぶにも
二 もろともにあはれとおもへやまざくら

二 やすらはでねなましものをさよふけて

しづころなくはなのちるらむ
はなぞむかしのかにほひける
よをおもふゆゑにものおもふみは

むべやまかぜをあらしといふらむ

ただありあけのつきぞのこれる

ひるはきえつつものをこそおもへ
いつみきとてかこひしかるらむ
ぬれにぞぬれしいろはかはらず
みだれそめにしわれならなくに
ふるさとさむくころもうつなり

きりたちのぼるあきのゆふぐれ

くもがくれにしよはのつきかな

なほあまりあるむかしなりけり
はなよりほかにしるひともなし

かたぶくまでのつきをみしかな

紀 友 則 古 今
紀 貫 之 古 今
後 鳥 羽 院 統 後 撰

文 屋 康 秀 古 今

後 德 大 寺 左 大 臣 千 載

大 中 臣 能 宣 朝 臣 詞 花
中 納 言 兼 輔 新 古 今
殿 富 門 院 大 輔 千 載
河 原 左 大 臣 古 今
参 議 雅 経 新 古 今

寂 蓮 法 師 新 古 今

紫 式 部 新 古 今

順 德 院 統 後 撰
前 大 僧 正 行 尊 金 葉

赤 染 衛 門 後 拾 遺

三 やへむぐらしげれるやどのさびしきに
三 やまがはにかぜのかけたるしがらみは
三 やまざとはふゆぞさびしさまさりける

二 ゆふさればかどたのいなばおとづれて
二 ゆらのとをわたるふなびとかぢをたえ

二 よのなかはつねにもがもななぎさこぐ
二 よのなかよみちこそなけれおもひいる
二 よもすがらものおもふころはあけやらで
二 よをこめてとりのそらねははかるとも

二 わがいほはみやこのたつみしかぞすむ
二 わがそではしほひにみえぬおきのいしの
二 わすらるるみをばおもはずちかひてし
二 わすれじのゆくすゑまではかたければ
二 わたのはらこぎいでてみればひさかたの
二 わたのはらやそしまかけてこぎいでぬと
二 わびぬればいまはたおなじにはなる

二 をぐらやまみねのもみぢばこころあらば

ひとこそみえねあきはきにけり
ながれもあへぬもみぢなりけり
ひとめもくさもかれぬとおもへば

あしのまろやにあきかぜぞふく
ゆくへもしらぬこひのみちかな

あまのをぶねのつなでかなしも
やまのおくにもしかぞなくなる
ねやのひまさへつれなかりけり
よにあふさかのせきはゆるさじ

よをうぢやまとひとはいふなり
ひとこそしらねかはくまもなし
ひとのいのちのをしくもあるかな
けふをかぎりのいのちともがな
くもゐにまがふおきつしらなみ
ひとにはつげよあまのつりぶね
みをつくしてもあはむとぞおもふ

いまひとたびのみゆきまたなむ

惠 慶 法 師 古 今
春 道 列 樹 古 今
源 宗 于 朝 臣 古 今

大 納 言 経 信 金 葉
曾 禰 好 忠 新 古 今

鎌 倉 右 大 臣 新 勅 撰
皇 后 宮 大 夫 俊 成 千 載
俊 惠 法 師 千 載
清 少 納 言 後 拾 遺

喜 撰 法 師 古 今
二 条 院 讚 岐 千 載
右 近 拾 遺

儀 同 三 司 母 新 古 今
法 性 寺 前 関 白 詞 花
入 道 大 政 大 臣 古 今
参 議 篁 古 今
元 良 親 王 後 撰

貞 信 公 拾 遺

付2 下句五十音順索引

(数字は歌の番号、(を)の部は(お)の部に配列)

(あ)の部 (八首)
 三 あかつきばかりうきものはなし (ありあけの)
 七 あしのまろやにあきかぜぞふく (ゆふざれば)
 元 あはでこのよをすぐしてよとや (なにはがた)
 五 あはれことしのあきもいぬめり (ちぎりおきし)
 三 あまのをぶねのつなでかなしも (よのなかは)
 六 あまりてなどかひとのこひしき (あさぢふの)
 四 あらはれわたるせぜのあじろぎ (あさぼらけ)
 二 ありあけのつきをまちいでつるかな (いまこむと)
 (い)の部 (七首)
 五 いかにひさしきものとかはしる (なげきつつ)
 七 いくよねぎぬすまのせきもり (あはぢしま)
 吉 いづこもおなじあきのゆふぐれ (さびしさに)
 三 いつみきとてかこひしかるらむ (みかのほら)
 五 いでそよひとをわすれやはする (ありまやま)
 六 いまひとたびのあふこともがな (あらざらむ)
 三 いまひとたびのみゆきまたなむ (をぐらやま)
 (う)の部 (二首)
 六 うきにたへぬはなみだなりけり (おもひわび)
 四 うしとみしよぞいまはこひしき (ながらへば)

(お)の部 (二首)
 元 おきまどはせるしらぎくのはな (こころあてに)
 三 をとめのすがたしぼしとどめむ (あまつかせ)
 (か)の部 (五首)
 七 かけじやそでのぬれもこそすれ (おとにきく)
 六 かこちがほなるわがなみだかな (なげけとて)
 五 かたぶくまでのつきをみしかな (やすらはで)
 三 かひなくたむなこそをしけれ (はるのよの)
 七 からくれなゐにみづくくるとは (ちはやぶる)
 (き)の部 (二首)
 七 きりたちのぼるあきのゆふぐれ (むらさめの)
 (く)の部 (四首)
 四 くだけでものをおもふころかな (かぜをいたみ)
 三 くもがくれにしよはのつきかな (めぐりあひて)
 五 くものいづこにつきやどるらむ (なつのよは)
 三 くもるにまがふおきつしらなみ (わたのほら)
 (け)の部 (二首)
 六 けふここのへにほひぬるかな (いにしへの)
 四 けふをかぎりのいのちともがな (わすれじの)

(こ)の部 (六首)
 六 こひしかるべきよはのつきかな (こころにも)
 三 こひぞつもりてふちとなりぬる (つくばねの)
 三 こひにくちなむなこそをしけれ (うらみわび)
 六 ころもかたしきひとりかもねむ (きりぎりす)
 二 ころもほすてふあまのかぐやま (はるすぎて)
 五 こゑきくときぞあきはかなしき (おくやまに)
 (さ)の部 (一首)
 五 さしもしらじなもゆるおもひを (かくとだに)
 (し)の部 (四首)
 三 しづこころなくはなのちるらむ (ひさかたの)
 三 しのぶることのよわりもぞする (たまのをよ)
 六 しろきをみればよぞふけにける (これやこの)
 (す)の部 (二首)
 三 すゑのまつやまなみこさじとは (ちぎりきな)
 (た)の部 (二首)
 六 ただありあけのつきぞのこれる (ほととぎす)
 二 たつたのかはのにしきなりけり (あらしふく)
 (つ)の部 (一首)
 三 つらぬきとめぬたまぞちりける (しらつゆに)
 (と)の部 (一首)

とやまのかすみたたずもあらなむ (たかさごの)
 (な)の部 (六首)
 五 ながくもがなとおもひけるかな (きみがためをし)
 三 ながながしよをひとりかもねむ (あしびきの)
 三 ながれもあへぬもみぢなりけり (やまがはに)
 三 なこそながれてなほきこえけれ (たきのおとは)
 三 なほあまりあるむかしなりけり (ももしきや)
 三 なほうらめしきあさぼらけかな (あけぬれば)
 (ぬ)の部 (二首)
 六 ぬれにぞぬれしいろはかはらず (みせばやな)
 (ね)の部 (二首)
 六 ねやのひまさへつれなかりけり (よもすがら)
 (は)の部 (三首)
 六 はげかれとはいのらぬものを (うかりける)
 六 はなぞむかしのかにほひける (ひとはいさ)
 六 はなよりほかにしるひともなし (もろとも)
 (ひ)の部 (十首)
 六 ひとこそしらねかはくまもなし (わがそでは)
 六 ひとこそみえねあきはきにけり (やへむぐら)
 六 ひとしれずこそおもひそめしか (こひすてふ)
 六 ひとづてならでいふよしもがな (いまはただ)
 六 ひとにしられでくるよしもがな (なにしおはば)
 二 ひとにはつげよあまのつりぶね (わたのほらやそしま)

- 三 ひとのいのちのをしくもあるかな (わすらるる)
- 四 ひとめもくさもかれぬとおもへば (やまざとは)
- 五 ひともみをもうらみざらまし (あふことの)
- 六 ひるはきえつつものをこそおもへ (みかきもり)
- (ふ)の部 (三首)
- 七 ふじのたかねにゆきはふりつつ (たごのうらに)
- 八 ふりゆくものはわがみなりけり (はなさそふ)
- 九 ふるさとさむくころもうつなり (みよしの)
- (ま)の部 (三首)
- 一 まだふみもみずあまのはしだて (おほえやま)
- 二 まつとしきかばいまかへりこむ (たちわかれ)
- 三 まつもむかしのともならなくに (たれをかも)
- (み)の部 (七首)
- 四 みかさのやまにいでしつきかも (あまのはら)
- 五 みそぎぞなつのしるしなりける (かぜそよぐ)
- 六 みだれそめにしわれならなくに (みちのくの)
- 七 みだれてけさはものをこそおもへ (ながからむ)
- 八 みのいたづらなりぬべきかな (あはれとも)
- 九 みをつくしてもあはむとぞおもふ (わびぬれば)
- 一〇 みをつくしてやこひわたるべき (なにはえの)
- (む)の部 (二首)
- 二 むかしはものをおもはざりけり (あひみての)
- 三 むべやまかぜをあらしといふらむ (ふくからに)

- (も)の部 (三首)
- 一 ものやおもふとひとのとふまで (しのぶれど)
- 二 もみぢのにしきかみのまにまに (このたびは)
- 三 もれいづるつぎのかげのさやけさ (あきかぜに)
- (や)の部 (二首)
- 四 やくやもしほのみもこがれつつ (こぬひとを)
- 五 やまのおくにもしかぞなくなる (よのなかよ)
- (ゆ)の部 (二首)
- 六 ゆくへもしらぬこひのみちかな (ゆらのとを)
- 七 ゆめのかよひぢひとめよくらむ (すみのえの)
- (よ)の部 (四首)
- 八 よしののさとにふれるしらゆき (あさぼらけ)
- 九 よにあふさかのせきはゆるさじ (ありあけ)
- 一〇 よをうちやまとひとはいふなり (よをこめて)
- 一一 よをおもふゆゑにものおもふみは (わがいはは)
- 一二 (ひとををし)
- (わ)の部 (六首)
- 一三 わがころもでにゆきはふりつつ (きみがため)
- 一四 わがころもではつゆにぬれつつ (あきのたの)
- 一五 わがたつそまにすみぞめのそで (おほけなく)
- 一六 わがみひとつのあきにはあらねど (つきみれば)
- 一七 わがみよにふるながめせしまに (はなのいろは)
- 一八 われてもすゑにあはむとぞおもふ (せをはやみ)

付3 作者索引

- (あ)の部
 - 赤染衛門……………五
 - 赤人……………四
 - 頭輔……………四
 - 朝忠……………四
 - 朝康……………三
 - 敦忠……………三
 - 安部仲磨……………七
 - 在原業平朝臣……………七
- (い)の部
 - 家隆……………六
 - 和泉式部……………六
 - 伊勢……………九
 - 伊勢大輔……………九
 - 殷富門院大輔……………六
- (う)の部
 - 右近……………六
 - 右大将道綱母……………三
- (え)の部
 - 惠慶法師……………七
- (お)の部
 - 清原深養父……………六
- (か)の部
 - 大江山里……………三
 - 凡河内躬恒……………九
 - 大中臣能宣朝臣……………九
 - 興風……………四
 - 小野小町……………九
 - 柿本人磨……………三
 - 兼輔……………三
 - 兼昌……………七
 - 兼盛……………六
 - 鎌倉右大臣……………三
 - 菅隆……………六
 - 菅家……………四
- (き)の部
 - 紀伊……………三
 - 喜撰法師……………八
 - 儀同三司母……………三
 - 紀貫之……………三
 - 紀友則……………三
 - 行尊……………六
 - 清輔……………六
 - 清原深養父……………六
- (け)の部
 - 謙徳公……………七
- (こ)の部
 - 皇嘉門院別当……………八
 - 光孝天皇……………一五
 - 皇太后宮大夫俊成……………八
 - 後京極撰政前大臣……………九
 - 小式部内侍……………六
 - 後徳大寺左大臣……………八
 - 後鳥羽院……………九
 - 小町……………九
 - 伊尹(これただ)……………九
 - 是則……………三
 - 権中納言敦忠……………三
 - 権中納言定家……………三
 - 権中納言定頼……………三
 - 権中納言匡房……………三
 - 西行法師……………六
- (さ)の部
 - 寂蓮法師……………七
- (し)の部
 - 坂上是則……………三
 - 相模……………三
 - 左京大夫顯輔……………七
 - 左京大夫道雅……………六
 - 前大僧正慈円……………三
 - 定家……………七
 - 定方……………三
 - 定頼……………四
 - 実方……………五
 - 実定……………八
 - 実朝……………三
 - 讚岐……………三
 - 猿丸大夫……………五
 - 参議篁……………二
 - 参議等……………三
 - 参議雅経……………四
 - 三条院……………六
 - 三条右大臣……………三
 - 慈円……………三
 - 重之……………六
 - 持統天皇……………二
 - 寂蓮法師……………七

(..数字は歌の番号
特に必要と思われるものには姓と名と両方をのせた)

紫式部……………七〇
 (も)の部
 元輔……………三三
 基俊……………三五
 元良親王……………三〇
 (や)の部
 家持……………六
 康秀……………三三
 山部赤人……………四
 (ゆ)の部
 祐子内親王家紀伊……………七二
 行平……………六
 (よ)の部
 陽成院……………三三
 義孝……………三〇
 好忠……………三〇
 良経……………三九
 能宣……………三九
 (り)の部
 良暹法師……………七〇

從二位家隆……………六
 俊惠法師……………三五
 俊成……………三三
 順徳院……………一〇〇
 式子内親王……………九
 (す)の部
 周防内侍……………七
 崇徳院……………七
 (せ)の部
 清少納言……………三三
 蟬丸……………一〇
 (そ)の部
 僧正遍昭……………三
 素性法師……………二
 曾禰好忠……………二
 (た)の部
 待賢門院堀河……………八〇
 大納言公任……………五
 大納言経信……………七
 大式三位……………六
 平兼盛……………四〇
 篁(たかむら)……………二
 忠平……………二六
 忠見……………二

忠通……………六
 忠岑……………三
 (ち)の部
 千里……………三
 中納言朝忠……………四
 中納言兼輔……………七
 中納言家持……………六
 中納言行平……………六
 (つ)の部
 経信……………七
 列樹……………三
 貫之……………三
 (て)の部
 定家……………七
 貞信公……………六
 天智天皇……………一
 (と)の部
 道因法師……………三
 融……………四
 俊成……………三
 敏行……………六
 俊頼……………三
 友則……………三

仲業……………七
 平磨……………七
 (に)の部
 二条院讃岐……………三
 入道前太政大臣……………六
 (の)の部
 能因法師……………六
 (は)の部
 春道列樹……………三
 (ひ)の部
 等磨……………三
 人磨……………三
 (ふ)の部
 深養父……………六
 藤原興風……………四
 藤原清輔朝臣……………八
 藤原実方朝臣……………五
 藤原敏行朝臣……………六
 藤原道信朝臣……………三
 藤原基俊……………三
 藤原義孝……………三
 文屋朝康……………七

文屋康秀……………三
 (へ)の部
 遍昭……………三
 (ほ)の部
 法性寺入道前関白……………六
 堀河……………八
 (ま)の部
 雅経……………三
 匡房……………三
 (み)の部
 道真……………四
 道綱母……………三
 道信……………三
 道雅……………三
 躬恒……………三
 源兼昌……………六
 源重之……………六
 源俊頼朝臣……………三
 源宗于朝臣……………六
 壬生忠見……………四
 壬生忠岑……………三
 (む)の部
 宗于……………六



鑑賞 小倉百人一首 定価 80円/〒 30円

昭和39年11月30日 2版発行

編者 新村 出
発行者 野田 武男
印刷所 共同印刷株式会社

発行所 有限会社 洛文社

京都市中京区西ノ京大炊御門町8
電話 京都 81-8827 番
振替 京都 3828

(落丁・乱丁がありましたらお取換えいたします)

おぐらを【小倉】京都市右京区嵯峨町にある小倉山付近
一帯の古称。——さんそうウ；サ【小倉山荘】京都市右京
区嵯峨町にある小倉山の付近にあった宇都宮頼綱の、
山荘。——さんそうしきしウ；サ【小倉山荘色紙】小倉
色紙。——しきし【小倉色紙】小倉百人一首を各別に
認めた百枚の色紙。小倉山荘色紙。——ずけづけ【小
倉付】小倉百人一首の歌の五文字を上置き、下の
十二字をつけて一句となす冠付。「あきのたの、かり
小屋かけて猪の番」の類。——ひやくしゆ【小倉百首】
小倉百人一首。——ひやくにんいっしゆ【小倉百人一
首】歌集。藤原定家が小倉山荘での撰、または宇都
宮頼綱の撰ともいう。天智天皇から順徳天皇の時代に
至る百人の歌人の歌各一首を記したもの。歌ガルタ
として普及。小倉百首。——ひやくにんしゆ【小倉百
人一首】(古来の訓みくせ)小倉百人一首に同じ

△新村出編「広辞苑」▽

中國書局發行 第一一八號

林文

卷一

目錄

林文 卷一 目錄

一、論... 二、論... 三、論...

中國書局發行

